

# 宇土城跡（西岡台）XI

— 史跡整備事業に伴う平成14～16年度（第15～17次）発掘調査報告書 —

2012

熊本県宇土市教育委員会



# 宇土城跡（西岡台）XI

— 史跡整備事業に伴う平成14～16年度（第15～17次）発掘調査報告書 —

2012

熊本県宇土市教育委員会





宇土城跡(西岡台)周辺  
航空写真 (上が北東,  
平成5年撮影)



宇土城跡航空写真 (南西より, 平成20年撮影)

巻頭図版 2



主郭・千畳敷航空写真（南より，平成20年撮影）



平成14年度(第15次)  
調査区周辺航空写真  
(北東より)



豎堀跡 S D 19調査状況  
(東より)



平成15年度(第16次)  
調査区周辺航空写真  
(上が北)

巻頭図版 4



土師質土器や瓦質土器などの土器類



様々な種類の貿易陶磁器



# 序 文

宇土市周辺地域には、中世に築城された数多くの城跡が残されており、地域の大切な文化遺産として保存・継承されています。なかでも宇土城跡（西岡台）は宇土氏や名和氏の居城として広く知られており、その規模は県下の中世城跡のなかでも最大級を誇ります。

宇土城跡は昭和54年3月に国の史跡に指定され、昭和56年度より保存整備事業を開始しました。現在、第1ブロック（西岡神宮北側地区）と第2ブロック（千畳敷及び周辺地区）の整備を完了し、平成18年度から第3ブロック（三城及び周辺地区）の発掘調査、平成19年度より保存整備工事に着手しています。

主郭・千畳敷の発掘調査では、多数の掘立柱建物跡や柵列跡、門跡などの城郭遺構を検出し、千畳敷を囲む横堀跡が未完成のものであることを確認しました。未完成の堀跡の発見は、数多く行われている中世城跡の発掘調査でも全国で初めての確認例です。また、石塔を用いた城破り跡が九州で初めて確認されるなど極めて重要な成果が得られています。その他、調査で出土した国産の土器や陶磁器、中国・朝鮮半島・東南アジア製の貿易陶磁器などの出土品も往時の宇土城のようすを今に伝える貴重な資料です。

以上の調査成果を反映しながら、当時の歴史環境に基づいた整備を行うため、史跡宇土城跡保存整備検討委員会の協議を経て事業を進めています。これまでに掘立柱建物跡の平面・立体表示や城門及び堀跡の復元、城破りに用いられた石塔の野外展示などの遺構整備、トイレや花木広場などの便益・休養施設の整備を実施しました。

最後になりましたが、発掘調査及び保存整備工事にあたって御指導・御協力いただきました文化庁記念物課ならびに熊本県教育委員会文化課、保存整備検討委員会の先生方をはじめ関係各位に心より感謝申し上げます。

平成24年3月

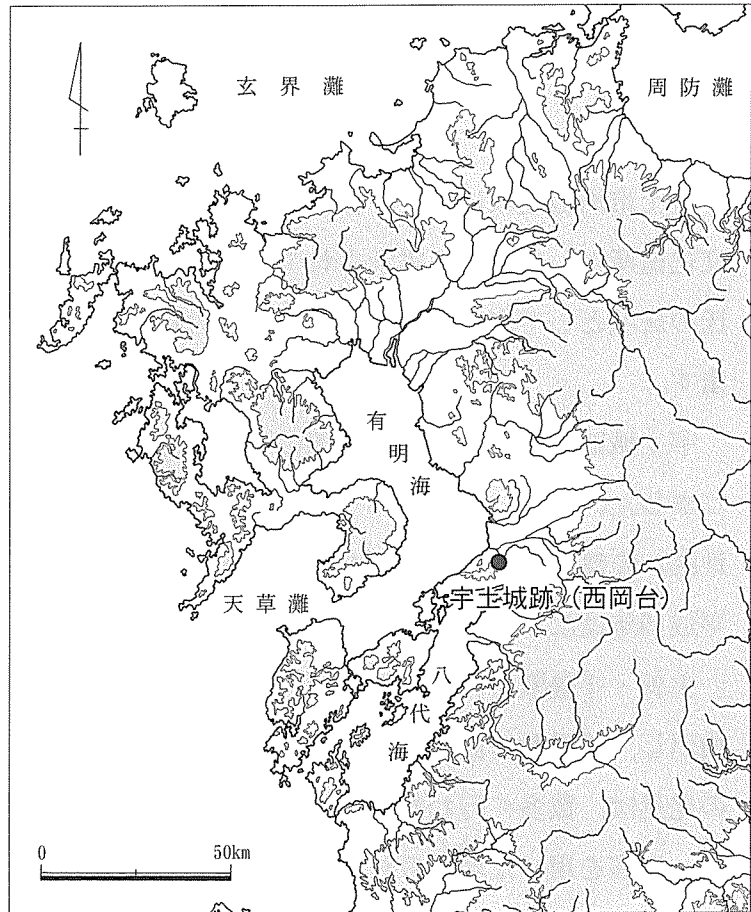
宇土市教育長 木下博信



宇土城跡（西岡台）の位置

左：1/20,000,000

右：1/2,000,000



## 例 言

- 1 本書は熊本県宇土市神馬町に所在する国指定史跡・宇土城跡（西岡台）の平成14～16年度（第15～17次）発掘調査報告書である。当該発掘調査は、史跡宇土城跡保存整備事業（国庫補助事業）に伴い宇土市教育委員会が実施した。
- 2 調査地は宇土市神馬町579・624・625-1に所在する。
- 3 発掘調査は藤本貴仁が担当した。なお、発掘調査区の地名名称は、15次調査では「T」（トレンチの頭文字）、16・17次調査では「区」を用いた。
- 4 発掘調査に伴う遺構実測図は主に藤本が作成し、一部を株式会社ダイチプラン・株式会社九州航空に委託した。
- 5 発掘調査時の写真及び遺物写真は藤本が撮影した。また、調査地における航空写真撮影は株式会社九州航空に委託した。
- 6 遺物実測図作成および遺構・遺物実測図の製図は、境美和・春川香子・淵上幸恵・山口陽子が行い、これらを藤本が補正した。また、出土遺物観察表の作成は藤本が行い、山口がこれを補佐した。なお、本編の挿図と図版の遺物番号は対応する。
- 7 出土した国産及び貿易陶磁器の産地や製作年代などについては、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）にご指導いただいた。
- 8 本編で用いた平面直角座標は日本測地系を使用し、方位は座標軸（日本測地系）を基準とした北をあらわす。また、レベルは標高を示す。
- 9 遺構は溝跡・横堀跡・縦堀跡をSD、道路状遺構をSF、ピットをPと略表記する。
- 10 本書の執筆は、第2章を藤本・芥川博士が担当し、それ以外の執筆および編集は藤本が担当した。
- 11 出土遺物・その他の関連資料は、宇土市教育委員会（宇土市新小路町95）に収蔵・保管している。

## 本文目次

第1章 序章	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の組織	3
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境と歴史的環境	5
第2節 宇土城跡に関する歴史	7
第3節 縄張りと発掘調査について	9
第3章 平成14年度（第15次）発掘調査	13
第1節 調査の概要	13
第2節 検出遺構	14
第3節 出土遺物	20
第4章 平成15年度（第16次）発掘調査	35
第1節 調査の概要	35
第2節 検出遺構	36
第3節 出土遺物	41
第5章 平成16年度（第17次）発掘調査	51
第1節 調査の概要	51
第2節 検出遺構	52
第3節 出土遺物	57
第6章 まとめ	61
第1節 千畳敷周辺の城郭遺構について－竪堀跡を中心に－	61
第2節 古墳時代首長居館について	62

## 挿図目次

図1 九州最大級であることが判明した古墳時代「首長居館」(熊本日日新聞)	3	図16 SD01出土遺物(1/3)	21
図2 宇土城跡(西岡台)の位置(1/600,000)	6	図17 SD19出土遺物1(1/3)	21
図3 宇土城跡周辺遺跡分布図(1/25,000)	6	図18 SD19出土遺物2(1/3)	23
図4 宇土半島基部の中・近世城跡(1/100,000)	8	図19 SD19出土遺物3(1/3)	24
図5 宇土城跡縄張り図(1/3,000)	10	図20 SD19出土遺物4(1/3)	25
図6 千畳敷周辺検出遺構集成図(1/1,000)	11	図21 SD19出土遺物5(1/3)	26
図7 15次調査区配置図(1/1,000)	13	図22 T1501遺構外出土遺物(1/3)	27
図8 T1501土層断面図(1/60)	15	図23 T1502出土遺物(1/3)	27
図9 T1502遺構配置図及び同北壁土層断面図(1/100, 1/60)	15	図24 T1503遺構外出土遺物(1/3)	28
図10 T1502西壁土層断面図(1/60)	16	図25 16次調査区配置図(1/1,000)	35
図11 T1505遺構配置図(1/100)	16	図26 T1502遺構配置図及び西壁土層断面図(1/80)	37
図12 トイレ建設予定地周辺確認調査トレンチ土層断面図(1/60)	16	図27 1601区遺構配置図及び北壁土層断面図(1/80)	38
図13 SD19周辺遺構配置図(1/100)	17・18	図28 1602区遺構配置図(1/100)	39
図14 T1503西壁・東壁土層断面図(1/60)	19	図29 1603区遺構配置図及び土層断面図(1/100)	40
図15 T1503南壁・北壁土層断面図(1/60)	20	図30 千畳敷虎口北側SD02平面及び土層断面図(1/100)	41
		図31 SD19・SD18・1602区P1・SD06・SD02出土遺物(1/2, 1/3)	42

図32	T1502, 1601・1602区遺構外出土遺物(1/2, 1/3) …43	……………53・54	
図33	1603区遺構外出土遺物(1/2, 1/3) ……44	図38	SD22平面図及び土層断面図(1/60) ……55
図34	17次調査区配置図(1/1, 000) ……51	図39	SD22・SF02出土遺物(1/3) ……56
図35	1701・1702区遺構配置図(1/200) ……53・54	図40	1701～1703区遺構外出土遺物(1/2, 1/3) …56
図36	1701区遺構配置図及び東壁土層断面図(1/100) ……………53・54	図41	1703区遺構外出土遺物(1/3) ……57
図37	1703区遺構配置図及び土層断面図(1/100, 1/60)	図42	千疊敷周辺の竪堀跡と横堀跡(1/3, 000) ……61
		図43	首長居館推定範囲図(1/1, 500) ……62

## 表 目 次

表1	宇土城跡(西岡台)発掘調査の経過 ……2	変遷 ……9	
表2	宇土城跡(西岡台)における名和家当主と歴史的 象 ……8	表4	15次調査出土遺物観察表 ……29
表3	15世紀末から16世紀中頃における豊福領の領有	表5	16次調査出土遺物観察表 ……46
		表6	17次調査出土遺物観察表 ……59

## 図版目次

巻頭図版1	宇土城跡(西岡台)周辺航空写真(上が北東) 宇土城跡航空写真(南西より)	T1505遺構検出状況(北より)	
巻頭図版2	主郭・千疊敷航空写真(南より) 平成14年度(第15次)調査区周辺航空写真 (北東より)	SD01, 横堀跡SD04・SD05検出状況(東より) SD01出土遺物, SD19出土遺物1	
巻頭図版3	竪堀跡SD19調査状況(東より) 平成15年度(第16次)調査区周辺航空写真 (上が北)	図版8	SD19出土遺物2
巻頭図版4	土師質土器や瓦質土器などの土器類 様々な種類の貿易陶磁器	図版9	SD19出土遺物3
図版1	T1501表土除去状況(南より) T1501東壁土層断面(南西より) T1501調査状況(南より) T1502・1503航空写真(上が南西)	図版10	SD19出土遺物4
図版2	T1502調査前状況(南東より) T1502調査状況(北より) 攪乱溝断面検出の竪堀跡SD19(東より)	図版11	SD19出土遺物5, T1501～1503遺構外出土遺物
図版3	T1503調査前状況(南より) T1503遺構検出状況(南より) 古墳時代首長居館壕跡SD01とSD19の重複状 況(南より)	図版12	T1502航空写真(上が西) T1502遺構検出状況(北より)
図版4	SD19調査状況1(北より) SD19調査状況2(北より)	図版13	SD19検出状況(南より) SD19土層断面及び底面検出状況(北より)
図版5	SD19調査状況3(南より) T1503東壁土層断面(北西より)	図版14	溝跡SD20検出状況(東より) 16次調査区遠景航空写真(北より)
図版6	SD01とSD19の重複状況(南より) T1505遺構検出状況航空写真(南より)	図版15	1601区遺構検出状況航空写真(北西より) 1601区調査前状況(西より)
図版7	T1505表土除去状況(北より)	図版16	1601区遺構検出状況(東より) 竪堀跡SD18・溝跡SD21検出状況(南より) SD18土層断面(南より) SD18礫群出土状況(西より) 1601区調査状況(東より)
		図版17	1602区調査状況航空写真(上が南) 1602区調査前状況(南より) 1602区調査状況(北西より)
		図版18	1603区調査状況航空写真(北より) 1603区調査前状況(北東より)
		図版19	1603区遺構検出状況(北より) 柱列跡検出状況(北より)

- 図版20 横堀跡SD06検出状況（北より）  
SD06土層断面（北より）
- 図版21 遺構出土遺物（SD19, SD18, 1602区P1,  
SD06, SD02）  
T1502遺構外出土遺物
- 図版22 T1502・1601～1603区遺構外出土遺物
- 図版23 17次調査区遠景航空写真（南西より）  
1701区調査前状況（南より）
- 図版24 1701区調査前状況（北より）  
1701区遺構検出状況（南より）  
1701区遺構調査状況航空写真（上が東）
- 図版25 1701区遺構調査状況（北より）  
1701区遺構調査状況（南より）  
堅堀跡SD22調査状況（南西より）
- 図版26 SD22調査状況（北より）  
SD22出土礫群（北より）  
SD22堀底内突出部検出状況（南東より）
- 図版27 1702区調査前状況（北東より）  
1702区調査状況航空写真（北東より）
- 図版28 1702区調査状況（南西より）  
1702区調査状況（北東より）  
1703区調査前状況（南東より）
- 図版29 1703区調査状況（南東より）  
道路状遺構SF02調査状況（南より）  
1703区南東壁土層断面（北西より）
- 図版30 SD22・SF02出土遺物  
1701～1703区遺構外出土遺物



# 第1章 序 章

## 第1節 調査に至る経緯と経過（表1）

昭和49（1974）年1月、宇土市立鶴城中学校の改築移転計画に伴い、その移転用地として宇土城跡<sup>1)</sup>が所在する独立丘陵（通称：西岡台）をあてることが市関係機関の協議で決定した。当地は「宇土城跡（西岡）」として昭和47年12月23日に市の史跡に指定されていたため、宇土市教育委員会が主体となり49年3月から51年3月まで発掘調査を実施した。

調査の結果、古墳時代前期の首長居館を囲む大規模な壕跡、主郭・千畳敷を圍繞する横堀跡や掘立柱建物跡をはじめとする数多くの遺構を検出し、古墳時代や中世を中心とする多量の遺物が出土した。これを受けて遺跡保存の気運が高まった結果、宇土城跡は恒久的に保存されることとなり、中学校移転は中止されて史跡公園として整備・活用する方針が打ち出された。

昭和54（1979）年3月12日の官報告示によって国史跡に指定され、56年度には保存整備の基本計画である『史跡宇土城跡環境整備計画』を策定し、同年、保存整備工事に着手した。本計画では宇土城跡を第1～5ブロックに地区割し、ブロックごとに遺構表示・休憩施設などを計画立案した。

第1ブロック（西岡神宮北側地区）では、掘立柱建物跡の遺構表示やベンチ設置（昭和57年度）、東屋整備（58年度）などの整備工事を行い、平成元年度におおむね完了した。

第2ブロック（千畳敷及び周辺地区）の保存整備に関しては、平成元年度より着手したが、その動きが本格化したのは9年度からである。学識経験者や文化庁、県文化課担当職員などで構成される史跡宇土城跡保存整備検討委員会が平成9年度に発足し、10年度には主に第2ブロックの整備方針を定めた『史跡宇土城跡保存整備基本計画書』、20年度には第3ブロック（三城及び周辺地区）を中心とする基本計画書を策定した。現在、同委員会の指導のもと、宇土城跡の調査成果や歴史的背景、歴史公園としての位置付けを考慮した整備を進めている。

第2ブロックの主な整備施設を列举すれば、千畳敷を圍繞する堀の復元（9・10・13・15・17年度）、16・17号建物跡の平面表示（11年度）、休憩施設を兼ねた19号建物跡の整備（12年度）、トイレ（14年度）、案内板（15年度）、城門・柵（17年度）などで、17年度に同地区の整備をおおむね完了した。

また、平成19年度からは第3ブロック（三城及び周辺地区）の保存整備工事に着手した。当該ブロックについては、北側や南側に民家が隣接することから、当初の3ヵ年度は雨水排水処理などの防災的な工事を優先的に実施した。22年度からは遺構表示の整備を開始し、掘立柱建物跡（22・23年度）、導水状遺構（23年度）、土塁跡（23年度）などの遺構表示工を実施するとともに、解説板の設置や植栽（張芝）を行った。なお、第4・5ブロックの整備は、平成26年度以降の長期計画に位置づけられており、今後、具体的な整備手法について検討を行う予定である。

史跡整備を目的として第2ブロックの発掘調査を開始したのは、平成2年度の第4次調査からである。現在までほぼ毎年調査を行っており、千畳敷において多数の掘立柱建物跡を検出したほか、虎口や城門跡、横堀跡、竪堀跡の調査を実施した。また、千畳敷の横堀跡が未完成であることや、虎口周辺部で石塔を用いた城破り跡を確認するなど注目すべき成果が得られており、その成果については報道機関への発表や現地説明会の開催、発掘調査報告書などで一般に公開している。

本書はこれまで実施した計24次にわたる発掘調査（平成23年度現在）のうち、史跡宇土城跡保存整備

表1 宇土城跡（西岡台）発掘調査の経過（アミ部分は今回報告、図6参照）

年度	回数	調査地点	主な検出遺構	特記事項
昭和49・50年度	1次	千畳敷周辺、三城周辺ほか	壕跡（古墳時代）、横堀跡・溝跡・掘立柱建物跡・柵跡・門跡・土墳墓（中世）	市立鶴城中学校移転計画に伴う発掘調査。古墳時代の首長居館と中世城跡の重複を確認。古墳時代首長居館の確認は全国で2番目。調査成果を受けて中学校の移転中止。
51年度				『宇土城跡（西岡台）』本文編・史料編刊行。
62年度	2次	三城周辺	柵跡・溝跡（中世）	遺跡状況把握のための発掘調査。『宇土城跡（西岡台）』II刊行。
63年度	3次	三城周辺	掘立柱建物跡（中世）	遺跡状況把握のための発掘調査。
平成2年度	4次	千畳敷北東側、同東側登道	掘立柱建物跡・溝跡（中世）	保存整備に伴う発掘調査開始。以後継続する7次までの千畳敷の調査で、重複する多数の掘立柱建物跡を検出。
3年度	5次	千畳敷南側	掘立柱建物跡・虎口跡（中世）	千畳敷において、平面プラン「Lの字形」の切通し状を呈する虎口を確認。
4年度	6次	千畳敷北西側、同南西側帯曲輪	壕跡（古墳時代）、掘立柱建物跡（中世）	
5年度	7次	千畳敷西側、同東側及び北側帯曲輪	横堀跡・溝跡（中世）	虎口前面の横堀跡から大量の石塔残欠出土。
6年度	8次	千畳敷東側、同西側及び東側帯曲輪	虎口跡	
9年度	9次	千畳敷南側平場、同西側帯曲輪	壕跡（古墳時代）、横堀跡（中世）	千畳敷及び周辺地区の遺構表示開始。
10年度	10次	千畳敷北側帯曲輪	横堀跡・開渠跡・竪堀跡（中世）	千畳敷北側横堀跡で小間割（掘削単位）確認。掘削途中で中止されたことが埋土の堆積状況から判明。掘削途中の中世城の堀跡が確認されたのは全国初。宇土城跡で初めて鉄砲玉出土。竪堀跡を初めて検出。
11年度	11次	千畳敷東側帯曲輪	横堀跡・竪堀跡（中世）	大規模な竪堀跡を検出。『宇土城跡（西岡台）』III刊行。
12年度	12次	千畳敷東側帯曲輪	竪堀跡・虎口跡・門跡（中世）	千畳敷の切通状虎口の路面は、地山掘削面をそのまま路面とするI期と盛土整地上面とするII期の2時期存在ことが判明。II期に伴う門跡を確認。『宇土城跡（西岡台）』IV刊行。
13年度	13次	三城南側平場	溝跡（近世以降?）	史跡指定地に隣接する個人住宅建設に伴う発掘調査。
	14次	千畳敷北東側、同南東側帯曲輪	壕跡・方形張出し（古墳時代）、横堀跡（中世）	虎口前面の堀から多量の石塔残欠出土。これを意図的に地山土を多量に含んだ土砂で虎口周辺の堀を埋めていることが判明。5・12次調査の成果をあわせ、虎口周辺で行われた城破りと考えられる。石塔を用いた城破りを九州では初めて確認。また、1次調査で確認された千畳敷南西側の張出しと同規模・同形態の張出しを同南東側で確認。『宇土城跡（西岡台）』V刊行。
14年度	15次	千畳敷北東側、同南側帯曲輪	壕跡（古墳時代）・竪堀跡（中世）	古墳時代の首長居館の規模をほぼ確定。千畳敷北東側の竪堀跡が丘陵裾部まで延びる可能性高まる。『宇土城跡（西岡台）』VI刊行。
15年度	16次	千畳敷北側、同南東側、南西側帯曲輪	竪堀跡・横堀跡（外堀）（中世）	10次調査で検出した竪堀は千畳敷北側に向かって延びることが判明。同北東側の竪堀の規模・深さをトレンチ調査で確認。『宇土城跡（西岡台）』VII刊行。
16年度	17次	千畳敷北西側帯曲輪	竪堀跡（中世）	千畳敷北西側で大規模な竪堀跡を検出。『宇土城跡（西岡台）』VIII刊行。
17年度	18次	千畳敷南側平場、同東側帯曲輪	横堀跡・竪堀跡（中世）	千畳敷東側で竪堀跡を検出。
18年度	19次	三城南東側帯曲輪、同南東側帯曲輪	道路跡・溝跡（中世）	三城南東側で側溝を伴う道路跡、同東側平場で三城から段下の帯曲輪へ続く溝跡を検出。『宇土城跡（西岡台）』IX刊行。
19年度	20次	三城南西側帯曲輪	ピット（中世）	
20年度	21次	三城東側帯曲輪	掘立柱建物跡（中世）	三城東側に隣接する帯曲輪で掘立柱建物跡を検出。『宇土城跡（西岡台）』X刊行。
21年度	22次	三城北側帯曲輪	土坑（中世?）	
22年度	23次	三城北西側帯曲輪	ピット（中世?）	21～23次調査の結果、三城直下の帯曲輪は東側が遺構密度が高く、西側に向かって低くなることが判明。
23年度	24次	三城東側帯曲輪	堀状遺構（中世）	北東方向に延びる堀状遺構を検出。『宇土城跡（西岡台）』XI刊行。



# 宇土市・西岡台遺跡「首長居館」 九州最大級の規模

古墳時代 東西80m、南北93m



九州最大級の首長居館があったことが分かった西岡台遺跡。白線部分が居館を囲んだV字溝の跡の一部＝宇土市神馬町

宇土市教委は十一日、同市神馬町の西岡台遺跡で見つかった古墳時代の豪族の住まい「首長居館」が九州最大級の規模であることが分かったと発表しました。

同市教委は一九七四（昭和四十九）年度から同遺跡を調査。本年度の第十五次調査で、首長居館は二・七―三・五mの深さで断面が「V」字形の溝（V字溝）に囲まれていたことが判明しました。

積は約七千六百平方m。九州では福岡市の比恵遺跡の約八千平方mに次ぐ大きさだった。

全国で確認されている古墳時代の居館は百以上あり、九州には約二十例あり、西岡台遺跡の居館は、出土した土師器（はじぎ）の年代から三世紀末ごろから五世紀後半ごろまで使われたと推定される。

遺跡近くには、県内で最も早い時期の前方後円墳として知られ、三角縁神獣鏡も出土した城ノ越をはじめ、追ノ上、スリバチ山、天神山、神合、猫ノ城の六古墳が集中している。いずれも首長居館が使われた時期と重な

り、居館の主だった歴代首長の墓とみられる。複数の古墳と居館との関係を特定し、詳しい調査ができるケースは全国でもまれで、市教委は「居館は地域の支配、経営の拠点としての性格も備え、当時の社会体制や文化を解明する重要な手がかりになる」と話している。

同遺跡は十四世紀には中世宇土城が築かれていた。

図1 九州最大級であることが判明した古墳時代「首長居館」  
(熊本日日新聞, 平成14年〔2002年〕11月12日付)

事業に伴い平成14～16年度に実施した第15～17次発掘調査の報告書である（図1）。

## 第2節 調査の組織（敬称略、役職は当時）

### －第15～17次発掘調査－（平成14～16年度）

- 調査主体 宇土市教育委員会
- 調査責任者 坂本光隆（宇土市教育長：14～16年度）、根本忠昭（同：16年度）
- 調査事務局 教育部長 町田圭吾（14年度）、吉永栄二（15・16年度）
- 文化振興課長 高木恭二（14～16年度）
- 文化財係 山本和彦（係長：14・15年度）、船田貞明（課長補佐兼係長：16年度）、松田安代（参事：14～16年度）、下田志穂里（参事：15・16年度）、一安隆正（主事：14年度）、藤本貴仁（技師：14～16年度 ※調査担当）

### 発掘調査作業員

本田亘、村山初夫、野添重友、田中國義、芥川一由、松船種雄、中川道治、宇野富士雄、平野護、旭哲男、尾尻重美、本田栄子、村山艶子、橋本チエ子、小畑律子、古山節子、福田フミエ、山田敏江、山形ユキコ、釜賀ヨウ子、白石節子、石上春代、奥村美栄子、岡本逸子、出口マツ子

### －整理作業・報告書作成－（整理作業：平成15～18年度，報告書作成：23年度）

責 任 者 教育長 坂本光隆（15・16年度），根本忠昭（16～18年度），木下博信（23年度）

事 務 局 教育部長 吉永栄二（15～17年度），宮田嗣友（18年度），山本桂樹（23年度）

文化（振興）課長 高木恭二（15～18年度），坂本純至（23年度）

文化財係 山本和彦（係長：15年度），船田貞明（課長補佐兼係長：16～18年度），松田安代（参事：15～17年度，係長：23年度），下田志穂里（参事：15・16年度），宮田尚子（参事：18年度），藤本貴仁（技師：15～17年度，参事：18・23年度 ※整理作業・報告書作成担当），村上淳子（主事：18年度），平田睦美（主事：23年度），芥川博士（技師：23年度）

### 整理・報告書作成作業員

境美和、田中由美、春川香子、林和美、平木君代、淵上幸恵、森川美和子、山口陽子（文化財係非常勤職員）

### －史跡宇土城跡保存整備検討委員会－（平成14～18・23年度）

北野隆（委員長，熊本大学工学部），服部英雄（九州大学大学院比較社会文化研究科：14～18年度），千田嘉博（奈良大学文学部文化財学科），高野茂（熊本中世史研究会：14年度），稲葉継陽（熊本大学文学部附属永青文庫研究センター：23年度）

### －調査指導及び協力者－（平成14～18・23年度）

村田修三（大阪大学名誉教授），小田富士雄（福岡大学名誉教授），本中眞・市原富士夫・白崎恵介・加藤允彦（文化庁記念物課），大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館），宇野慎敏（北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室），大田幸博・木村元浩・帆足俊文・丸山伸治・坂井田端志郎・能登原孝道・木庭真由子・福田匡朗（熊本県教育委員会），美濃口雅朗（熊本市教育委員会），鶴嶋俊彦（人吉市教育委員会），中山圭（天草市教育委員会），黒田裕司（和水町教育委員会），濱口俊夫・吉田恒・根本なつめ・辻誠也・佐藤伸二（宇土市文化財保護審議会）

### 註

1) 西岡台の東約500mには，キリシタン大名・小西行長が築城した近世宇土城跡（城山）が所在しており，混同を避けるため，通常，中世の宇土城跡は「宇土城跡（西岡台）」や「宇土古城」などと呼ばれている。本書では特別のことわりが無い限り，「宇土城跡」とは「中世の宇土城跡」を指すこととする。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境と歴史的環境

#### (1) 地理的環境 (図2・3)

熊本県宇土市は、県西側沿岸部のほぼ中央から西に向かって突出する宇土半島北部から基部にかけて位置する。市域の規模は、東西約24.8km、南北約7.6km、面積は約74.19㎡である。

宇土半島は北に有明海、南に八代海と面し、半島先端には天草諸島が連なる。半島内は山がちで、平地の割合は少ない。半島を構成する山地は、主峰の大岳(477.6m)を中心とする大岳火山系山地と三角岳火山系山地とに分けられる。また、半島基部には若干の平地を挟んで木原山(雁回山, 314.4m)が存在する。周辺の基盤となる地質は、安山岩類や凝灰角礫岩などの大岳由来の火山岩類が主である。

市の北側には、熊本県三大河川の一つである緑川と、その支流である浜戸川が東西に流れており、流域には両河川によって形成された沖積平野が広がっている。宇土半島基部は、東西から迫る山塊によって平野が狭まり、南の八代平野に抜ける道に限られることや緑川の河口に近いことなどから、古来より陸上・海上ともに交通の要衝であった。

宇土城跡は、この沖積平野南西部の通称「西岡台」と呼ばれる独立丘陵(標高約40m、東西約750m、南北約400m)を利用して築かれている。周辺部には縄文時代から歴史時代まで数多くの遺跡が分布している。

#### (2) 歴史的環境 (図3)

宇土城跡(1)周辺には、縄文時代から歴史時代まで数多くの遺跡が残されている。宇土城跡周辺の主な縄文時代の貝塚・遺跡として、石ノ瀬遺跡(2)、轟貝塚(3)、西岡台貝塚(4)、馬場遺跡(5)、北園遺跡(6)がある。

石ノ瀬遺跡では、道路建設に伴う発掘調査で縄文時代早期の押型文土器(早水台式)が出土しており(高木・木下ほか2001)、近くに集落の存在が想定されている。轟貝塚は縄文早期末から前期の轟式土器の標式遺跡として著名である。発掘調査によって縄文時代から中世にかけての土器・陶磁器、人骨、貝製品、石器、漁具、骨角器など多種多様な遺物が出土している。

また、轟貝塚の東約60mの距離にある西岡台貝塚は、西岡台西側裾部に位置している。貝層は2つに大別され、下層が轟・曾畑式土器など前期の土器を主体とし、上層は出水式や北久根山式などの後期前半の土器を主体とする。1983・1984(昭和58・59)年の発掘調査で、堅果類の貯蔵穴が5基検出された(木下・高木ほか1985)。馬場遺跡からは曾畑式土器が出土しており、北園遺跡は縄文時代から中世にかけての包蔵地である。また、時期は明確でないものの、野鶴貝塚(7)や椿原貝塚(8)がある。

続く弥生時代の遺跡として、中期後半の黒髪式甕形土器が出土した北平遺跡(9)、後期の集落とみられる下松山遺跡(10)がある。また、城山遺跡(11)は、前期から後期まで継続する拠点集落の可能性が高く、前期の環濠や中期の甕棺墓が発見されており、終末期の土器群が多量に出土している(富樫ほか1982、高木・木下1985)。

古墳時代になると、宇土城跡の主郭・千畳敷とほぼ重複する範囲に大規模な首長居館が築かれた西岡台遺跡(1)が立地し、そこから程近い城山遺跡には、当該居館と同時期に一般成員の集落が形成されていたとみられる。さらに首長居館と対応するように、本県最古の前方後円墳であり舶載三角縁神獣鏡

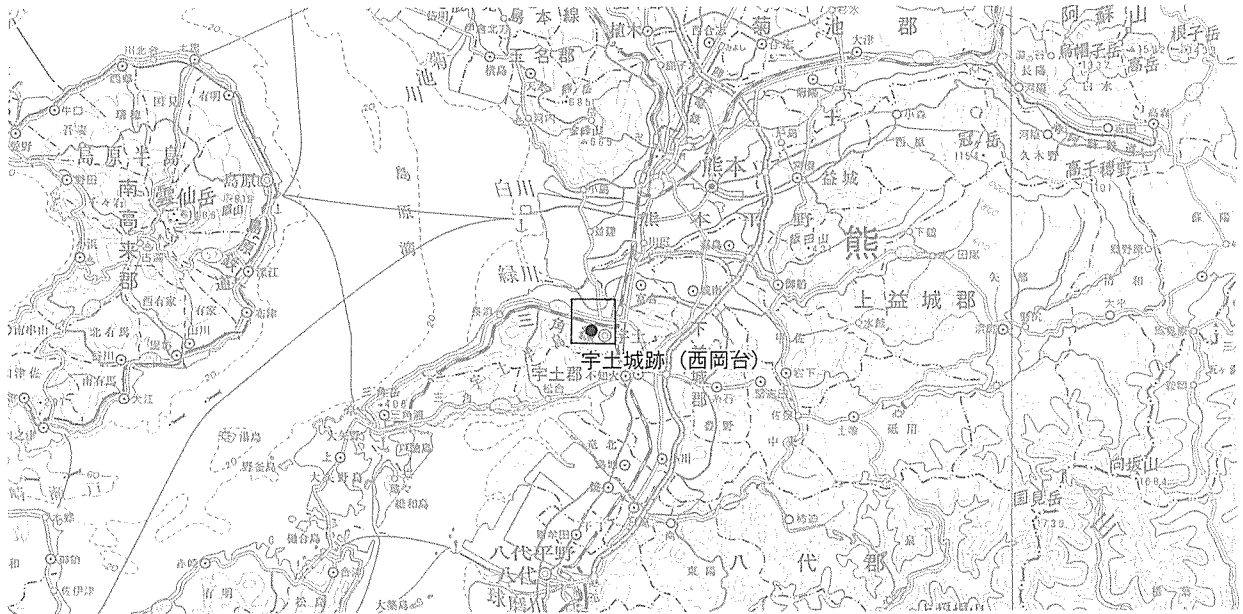


図2 宇土城跡(西岡台)の位置(1/600,000)

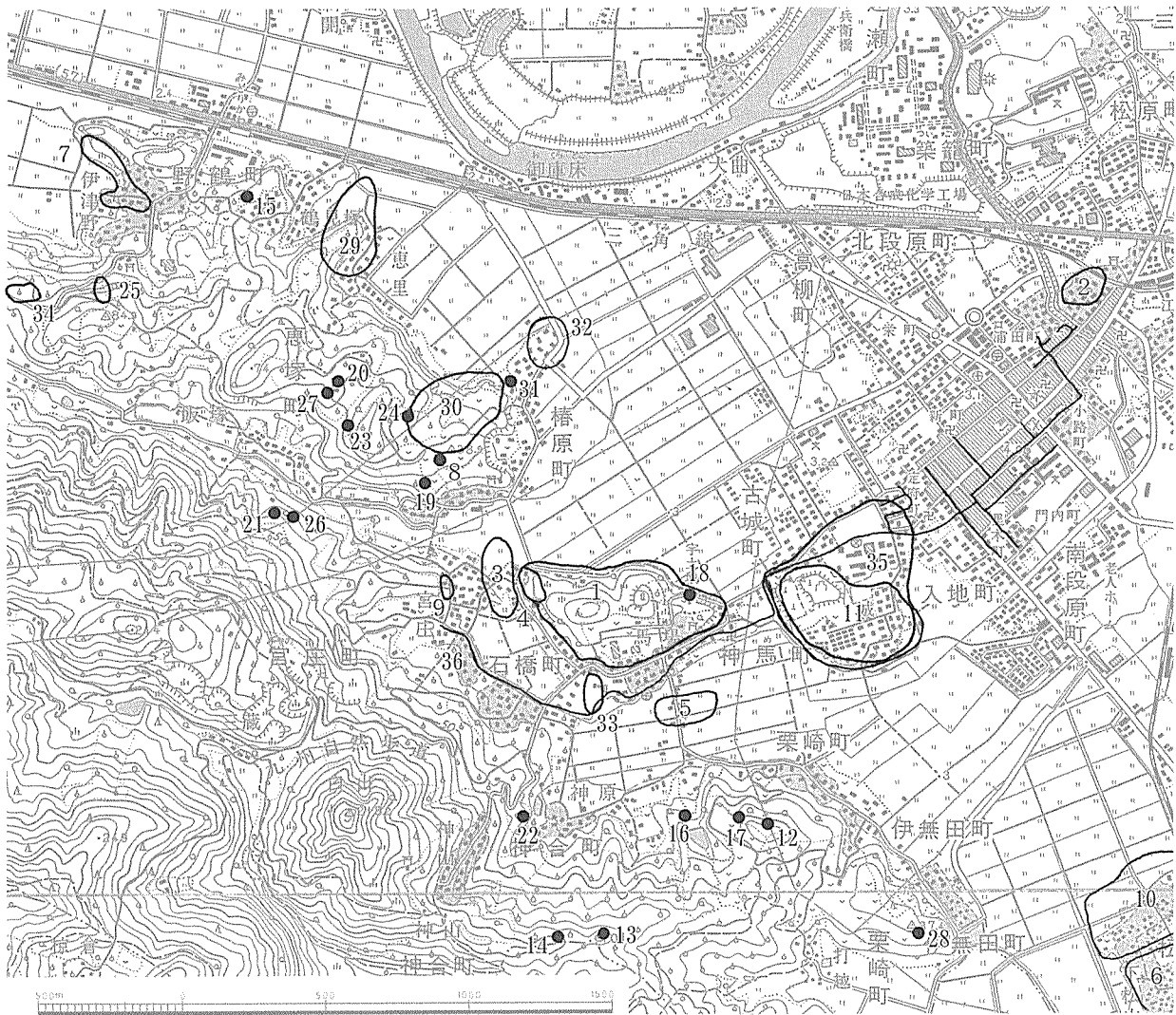


図3 宇土城跡周辺遺跡分布図(1/25,000, 図中番号は本文と対応)

が出土した城ノ越古墳(12)、迫ノ上古墳(13)、スリバチ山古墳(14)、天神山古墳(15)など、前期の前方後円墳が相次いで築造された。これらの前方後円墳群は、西九州を代表する前期の首長墓系譜であり、当時、宇土半島基部が肥後地域の政治的中心地であったことをうかがわせる。

しかし、中期以降に本首長墓系譜は断絶し、前方後円墳の築造が停止する。前方後円墳以外では、前期の円墳とみられる神合古墳(16)、猫ノ城古墳(17)、西岡台箱式石棺(18)、中期の所産とみられる椿原石蓋土壙墓(19)がある。

後期から終末期になると横穴式石室を主体部とする東畑古墳(20)、仮又古墳(21)、山王平古墳(22)、金嶽山古墳(23)などの円墳や、県内唯一の終末期の方墳である椿原古墳(24)などが築造された。多量の須恵器が出土した神ノ木山古墳群(25)、仮又2号墳(26)、東畑2号墳(27)も後期の円墳と考えられる。その他、築造時期が不明のものに久保1・2号墳(28)があり、古墳時代の包蔵地として恵里遺跡(29)、椿原遺跡(30)がある。

古代の遺跡は須恵器・土師器が出土した西岡台遺跡、城山遺跡がある。特に前者では故意に破壊された土馬が出土しており、遺跡の性格が注目される。

中世になると西岡台の丘陵上に宇土氏・名和氏が居城とした中世宇土城跡(西岡台)が築かれた。千畳敷と三城と呼ばれる二つの曲輪とその周辺の帯曲輪における発掘調査で、多くの掘立柱建物跡・横堀跡・門跡などの城郭遺構を検出し、大量の土師質土器や瓦質土器、青磁・白磁・染付などの貿易陶磁器が出土した(平山・高木ほか1977)。椿原遺跡では、方形居館を圍繞するとみられる箱堀跡が検出され、隣接する名和家菩提寺の曹洞宗宗福寺跡(31)には、中世宇土城主だった名和武顕・行興の位牌や名和行直の墓石が残されている。さらに眼下の椿原町字船津には、中世の港湾施設である宇土津(32)が存在したとみられる。陳の前遺跡(33)、伊津野遺跡(34)でも中世の土器・陶磁器が出土している。

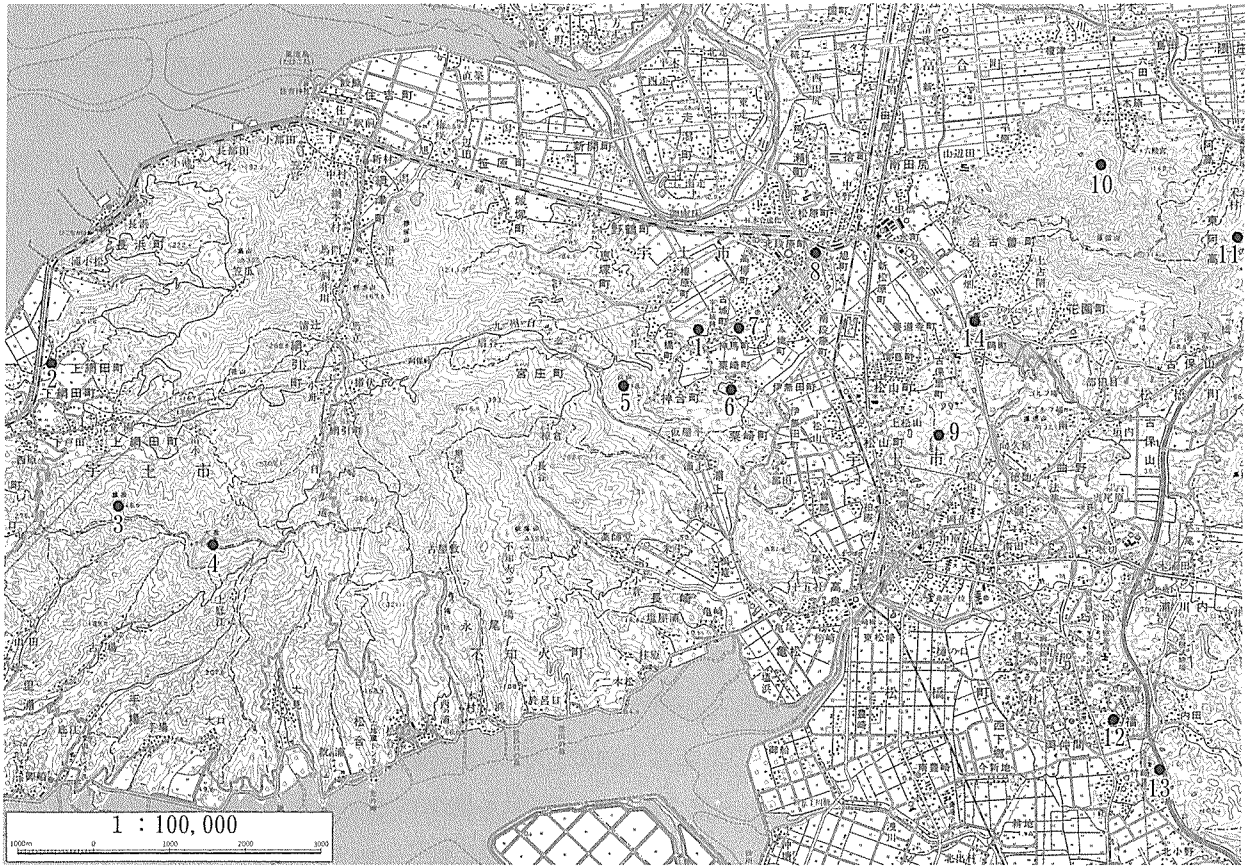
近世初頭、キリシタン大名・小西行長によって近世宇土城跡(城山)(35)が築城されるが、慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いに伴って刑死し、以後、加藤清正に領有・改修された。本丸や堀跡の発掘調査で、城破りに伴うとみられる故意に破壊された石垣や門跡を検出し、大量の瓦や貿易陶磁器が出土した(木下1981・1982, 高木・木下1985)。

加藤氏改易後、宇土を治めた初代宇土藩主の細川行孝によって、1663(寛文3)年、轟泉水道(36)が敷設された。松橋焼の瓦質管を用い、轟水源から陣屋があった宇土町まで総延長約4.8kmの区間に敷設されたもので、約100年後の明和6(1769)年、第五代藩主・細川興文によって馬門石製水道管に総替えされた。本水道は現在まで使われ続けている上水道としては日本最古として知られている。

## 第2節 宇土城跡に関する歴史(図4・5, 表2・3)

宇土城跡は中世宇土に拠点を置いた在地領主の宇土氏・名和氏の居城である。「三宮社記録」によれば、永正3(1048)年に築城され、以後、菊池氏の一族が相次いで宇土城にいるとの伝承があるが、それを証明する同時代の文献や考古学的根拠は残されていない。一方、廃絶時期は小西行長が宇土城主になった翌年、近世宇土城跡(城山)の工事に着手した天正17(1589)年から関ヶ原の戦いで敗死した慶長5(1600)年の間と推察され、発掘調査で出土した陶磁器の年代ともほぼ対応している。

宇土氏は宇土荘の荘官だった菊池氏の一族と伝えられる在地武家領主であり、宇土高俊が文献上での初見である。正平3(1348)年、征西将軍懐良親王を宇土津に迎え入れており、南朝方として活動した。南北朝の合一後も引き続き本拠を維持したとみられる。幾度かの戦いの末文亀元(1501)年、菊池武運



宇土市管内図5万分の1地形図(承認番号:平6九復第57号)を使用

- 1 宇土城跡(西岡台) 2 田平城跡 3 雄岳城跡 4 大岳城跡 5 白山 6 城ノ越(陣跡) 7 宇土城跡(城山) 8 石ノ瀬城跡 9 高城跡 10 木原城跡 11 阿高城跡 12 豊福城跡 13 竹崎城跡 14 花園山城跡

図4 宇土半島基部の中・近世城跡(1/100,000)

表2 宇土城跡(西岡台)における名和家当主と歴史的事象

当主 (家督相続時期)	年	歴史的事象
名和 顕忠 (1504-1516)	文亀4 (1504) 永正8 (1511)	宇土城に入る。 相良長毎, 豊福城で宇土の兵・豊福の守兵と久具川を隔てて防ぐ。
名和 重年 (1516-1517?)		※重年の家督継承は疑問。
名和 武顕 (1517-1546)	大永7 (1527) 天文4 (1535) 天文5 (1536) 天文7 (1537) 天文11 (1542)	相良氏, 豊福城を退出し, 家臣の皆吉伊豆守が豊福城に入城。 相良氏との和解直後, 豊福・大野の合戦に名和氏の兵数百人討ち死し, 豊福城落城。 皆吉伊豆守は宇土に退散し, 相良氏, 豊福城に入城。 相良・名和両家の婚儀執り行われる。 宇土城焼ける。 宇土城再び焼け, 城下段原も類火にあう。
名和 行興 (1546-1562)	天文18 (1549) 天文19 (1550) 天文20 (1551) 天文22 (1553)	名和行興, 木原六殿宮楼門を建築。領内長浜に天満宮三社, 神山に白山権現を建立。 豊福城代皆吉武真が, 宇土城を攻め, 行興敗走し, 武真宇土城に入るが, その後退去し, 行興は宇土城に帰る。 大友義鎮, 肥後に侵攻。竹迫城・隈本城を降し, 宇土城を攻める。 名和氏, 宇土氏を称す。
名和 行憲 (1562-1564)	永禄7 (1564)	行憲9歳で死亡。
名和 行直 (1564-1571)	永禄7 (1564) 永禄8 (1565)	豊福城代・名和行直, 宇土城に討ち入り, 当主を継承。 相良氏, 豊福城を攻める。
名和 顕孝 (1571-1587)	天正7 (1579) 天正14 (1586) 天正15 (1587)	川尻を領する。 顕孝, 筑前岩屋城攻めに参戦。 豊臣秀吉, 九州平定のため大坂城を出発。顕孝, 宇土城を開城し退去。

から肥後守護職を奪った宇土為光は、文亀3年、能運と再び争ったが敗れ滅亡した。

名和氏は代々伯耆国長田邑（鳥取県西部）を領した有力武家である。名和長年の孫顕興は正平13（延文3, 1358）年、伯父義高が建武の恩賞として得た肥後国八代庄に一族を伴って移り、南朝方として活動した。以後、八代を中心として南北に勢力を伸ばしたが、文亀4（1504）年、名和顕忠は居城である古麓城（八代市）を相良氏によって追われ、一時木原城（熊本市富合町）に移るが、後に宇土氏滅亡後の宇土城に入った。以後、名和氏は木原城のほか田平城（宇土市）・阿高城（熊本市城南町）・豊福城（宇城市松橋町）・矢崎城（宇城市三角町）など陸上・海上交通の要衝に支城を配した。

名和氏が宇土城に入った後も相良氏との間に争いは絶えず、相良領と名和領の境目である豊福城をめぐる幾度となく争ったことが、相良氏八代支配時代の記録物である「八代日記」から知ることができる。豊福城の帰属は、長享元（1487）年から永禄8（1565）年まで、80年足らずの間に名和氏と相良氏との間で9回も入れ替わっており、その攻防の激しさがうかがえる。豊福の位置は、名和氏の宇土、阿蘇氏の益城、相良氏の八代と3つの郡の境目に位置し、また甲佐と宇土半島を結ぶ道と八代から隈本へ向かう薩摩街道とが交錯する場所でもあり、軍事・交通の要所だったことがその争いの背景とみられる。

「八代日記」には、天文19（1550）年に名和行興と家臣で豊福城代だった皆吉武真との間に内紛があったことや、永禄5（1562）年の行興死去後、その弟で豊福城代・行直と幼主行憲の後見役だった内河氏との対立があり、行直は宇土城に討入って名和氏を継承し、内河氏は堅志田城に逃れたことが記されている。さらに永禄9（1566）年には行直と家臣の賀（加）悦氏との間に争いが起こり、「宇土取乱」れたとの記述もある。

天正15（1587）年、豊臣秀吉の九州平定によって名和顕孝は宇土城を開城した。その後、顕孝は筑前国に所領を得て小早川氏の家臣となり、江戸時代にはその子孫が柳河立花藩士として存続した。顕孝による宇土城開城の翌年、天正16（1588）年に小西行長が肥後南半部の領主として宇土城に入ったが、翌年には隣接する台地上において新城の築城（近世宇土城跡）に着手し、その後、西岡台の中世宇土城は廃城になったとみられる。

### 第3節 縄張りとは発掘調査について（図5・6）

宇土城跡の主な曲輪は、西岡台丘陵の東西に並んだ二つの高位部に所在する。

東側が「千畳敷」と呼ばれる曲輪で、その規模や城郭遺構の密度などから当該曲輪は主郭に位置づけ

表3 15世紀末から16世紀中頃における豊福領の領有変遷（稲葉2007）

豊福氏知行期	～1487年（長享元）
相良氏知行第1期	1487年（長享元）～1499年（明応8）
菊池氏知行期	1499年（明応8）～1504年（永正元）
菊池氏・阿蘇氏係争期	1504年（永正元）～1510年（永正7）
名和氏知行第1期	1511年（永正8）～1516年（永正13）
相良氏知行第2期	1516年（永正13）～1527年（大永7）
名和氏知行第2期	1527年（大永7）～1535年（天文4）
相良氏知行第3期	1535年（天文4）～1544年（天文13）
名和氏知行第3期	1544年（天文13）～1550年（天文19）
相良氏知行第4期	1550年（天文19）～1559年（永禄2）
名和氏知行第4期	1559年（永禄2）～1565年（永禄8）
相良氏知行第5期	1565年（永禄8）～

られている。標高約37m、東西約50m、南北約65mの規模を有する。曲輪やその周辺の、発掘調査によって多くの掘立柱建物跡・門跡・柵列跡・虎口跡・横堀跡・竪堀跡を検出した（平山・高木ほか1977, 藤本2003～2005・2007・2009）。

一方、西側の曲輪は「三城」と呼ばれ、標高約39m、東西約80m、南北約35mの規模を有する曲輪である。発掘調査により掘立柱建物跡・門跡・道跡、溝跡を検出している（平山・高木ほか1977, 木下・元松1988）。これ

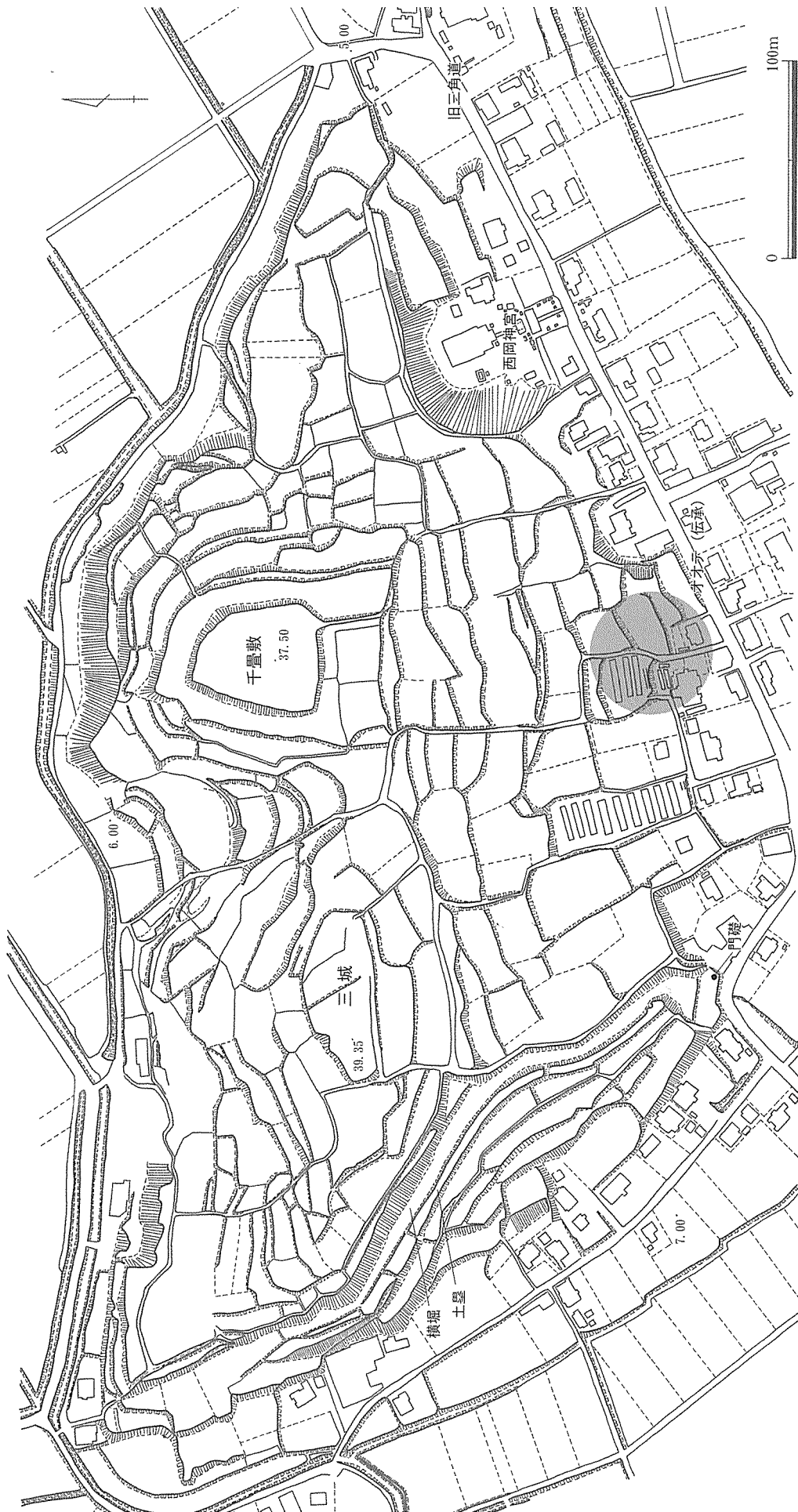


図5 宇土城跡縄張り図 (1/3,000, 1974年測量)





図6 千畳敷周辺検出遺構集成図 (17次調査まで, 1 / 1,000)

らの曲輪は、周囲に堀を配したり、あるいは土地を削り出し、急峻な崖状地形や帯曲輪を造り出して防御性を高めている。

千畳敷や三城周辺の発掘調査によって、大量の土師質土器や播鉢・火鉢などの瓦質土器、備前焼・瀬戸焼などの国産陶器、中国製の白磁・青磁・染付や華南三彩、タイや朝鮮半島製の陶磁器など、13～16世紀代を中心とする遺物が出土している。

三城の西側約50mには、地元で「カラホリ」と呼ばれている大規模な横堀跡が南北方向に配置されている。規模は長さ約310m、幅約10～15m、深さ約5～7mで、その西側に平行して高さ約2mの土塁がある。この横堀跡は、堀底に側溝を有し、南端付近から門礎とみられる巨石が出土していること、中世以来の古道である三角道と交わることから、平時には堀底道として機能していたと推測される。現在のカラホリは道路で途切れているように見えるが、現地踏査の結果や昭和49年の地形図から判断すると、現在より南へ100m程度延びていたと推定され、カラホリ東側の防御を考慮しての造作とみられる。

カラホリが三城付近だけでなく、西岡台南麓まで延びていることは注目すべきであり、特定の曲輪に限らず城全体を意識した堀の配置は、いわゆる「惣構え」の考え方に通じるものといえよう。カラホリの東側には陳の前遺跡（弥生時代～中世）があり、宇土城に関連した遺跡と推定される。おそらく曲輪南側の神馬町字西岡、同字日平、同字馬場下、石橋町字陳の前周辺に、領主や家臣団の居住域が形成されていたとみてよいだろう。

千畳敷や三城で検出された建物跡は全て掘立柱建物跡であり、礎石建物跡は発見されていない。また、2間×数間程度の建物が多数を占めており、小規模かつ等質的で瓦も出土していない。このことから、領主が生活した屋敷が千畳敷や三城に立地していたとはやや考え難いことから、名和氏の居館は丘陵南側の緩傾斜地周辺に存在したと考えられる。

#### 引用・参考文献

- 阿蘇品保夫 1977「肥後における名和氏と宇土氏」『宇土城跡(西岡台)』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 宇土市教育委員会
- 稲葉継陽 2007「戦国期の城と地域社会」『新宇土市史』通史編第2巻 中世・近世 宇土市
- 宇土市史編纂委員会編 2002『新宇土市史』資料編第2巻 同上
- 宇土市史編纂委員会編 2003『新宇土市史』通史編第1巻 同上
- 木下洋介 1981『宇土城跡(城山)』宇土城跡城山調査概報Ⅰ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第4集 宇土市教育委員会
- 木下洋介 1982『宇土城跡(城山)』宇土城跡城山調査概報Ⅱ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第7集 同上
- 木下洋介・高木恭二ほか 1985『西岡台貝塚』 宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集 同上
- 木下洋介・元松茂樹 1988『宇土城跡(西岡台)』Ⅱ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集 同上
- 高木恭二・木下洋介 1985『宇土城跡(城山)』 宇土市埋蔵文化財調査報告書第10集 同上
- 高木恭二・木下洋介ほか 2001「石ノ瀬遺跡」『新宇土市史基礎資料』第9集 同上
- 富樫卯三郎ほか 1982『宇土城跡三ノ丸跡』弥生時代前期のV字溝と近世城郭遺構の調査 宇土城跡三ノ丸跡発掘調査団
- 平山修一・高木恭二ほか 1977『宇土城跡(西岡台)』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 宇土市教育委員会
- 藤本貴仁 2003『宇土城跡(西岡台)』Ⅵ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第24集 同上
- 藤本貴仁 2004『宇土城跡(西岡台)』Ⅶ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第25集 同上
- 藤本貴仁 2005『宇土城跡(西岡台)』Ⅷ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第26集 同上
- 藤本貴仁 2007『宇土城跡(西岡台)』Ⅸ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第29集 同上
- 藤本貴仁 2009『宇土城跡(西岡台)』Ⅹ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第31集 同上

## 第3章 平成14年度(第15次)発掘調査

### 第1節 調査の概要

#### (1) 調査の概要 (図7)

第15次調査は、平成14年6月から同年10月にかけて実施し、T1501～1507の計7地点で発掘調査を行った。調査面積は計298㎡で、内訳はT1501：約18㎡、T1502：約56㎡、T1503：約102㎡、T1504：約3㎡、T1505：約116㎡、T1506：約1㎡、T1507：約2㎡である。

当該調査の主たる目的は、第11次調査（平成11年度）で検出した竪堀跡SD19の範囲の確定と、その性格に関する資料を得ることであった。11次調査結果より判断すれば、本遺構は北東方向に延びると想定されることから、11次調査確認地点より北東側へ約20m地点にT1502を設定するとともに、14次調査区に隣接してT1503を設定し、発掘調査を実施した。

調査の結果、T1502では、攪乱溝の断面からSD19を検出したが、調査期間の都合により遺構規模の

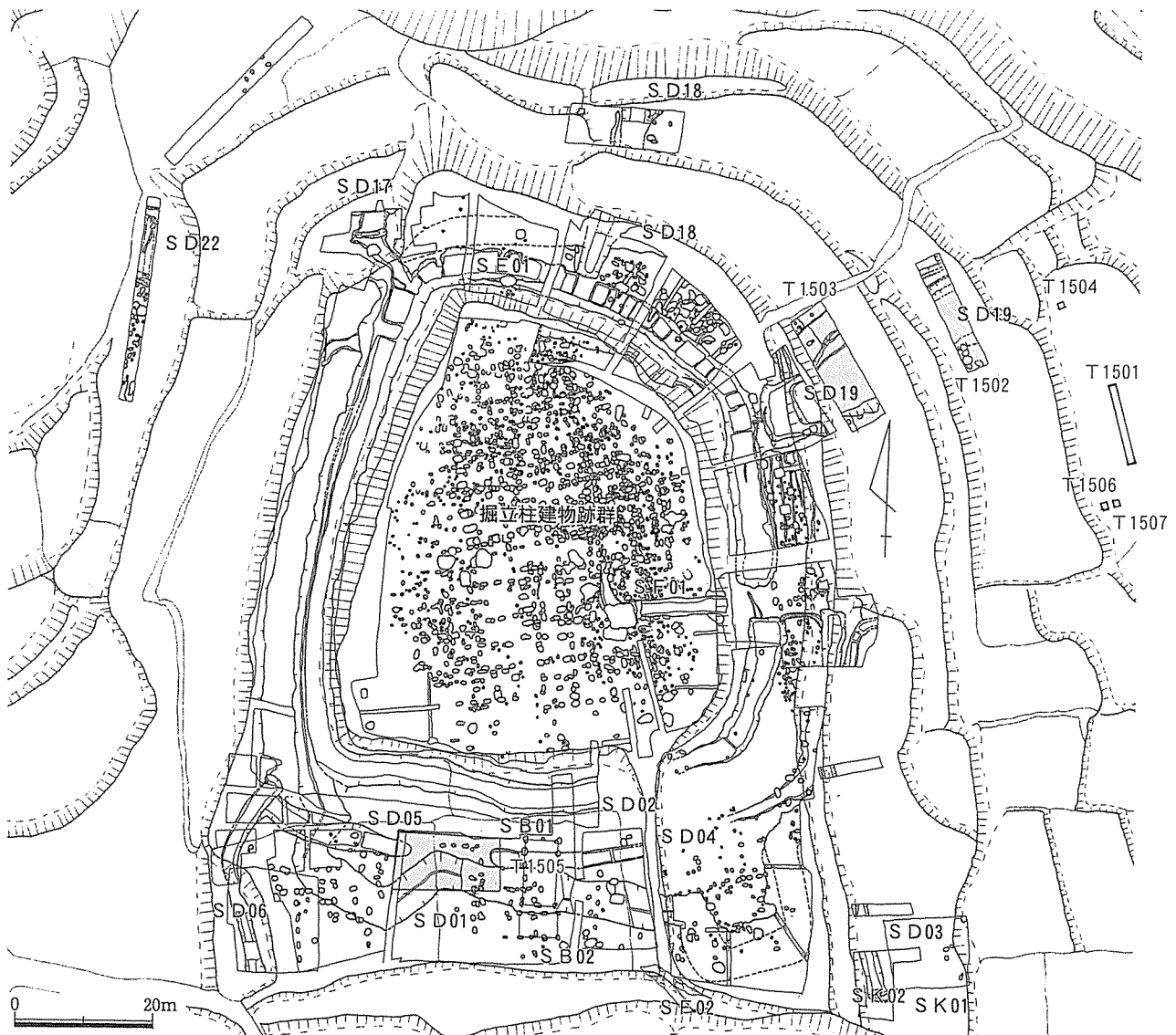


図7 15次調査区配置図 (1/1,000, アミ部分：15次調査地)

詳細までは確認できなかったことから、翌年度の調査に持ち越した。一方、T1503ではSD19の内容を把握するため埋土までほぼ完掘し、遺構の形状や規模などを明らかにした。また、SD19の調査中に古墳時代前期の首長居館を圍繞する壕跡SD01を検出し、宇土城跡が築城される以前、同地に存在した古墳時代首長居館の規模がほぼ判明するという重要な成果が得られた。

その他、千畳敷南側の帯曲輪に設定したT1505では、門跡などの遺構の有無について確認調査を実施した。SD02は東側の虎口を除いて千畳敷を全周しているが、千畳敷南側から東側にかけてはSD02のさらに外側に小規模な横堀跡（SD04～SD06）の存在が明らかになっている。SD02が内堀、SD04～SD06が外堀に相当するが、後者については1次調査（昭和49・50年度）において千畳敷南側で約10mにわたり途切れて土橋状を呈することを確認している。当該地点は、西岡台南側の「オオテ」（大手）と伝えられる地点と千畳敷とを結ぶライン上に位置し、門跡などの遺構が存在する可能性が想定されたため、その有無を確認する目的でT1505を設定し、1次調査後の埋め戻し土を除去後、遺構検出作業を行った。その結果、数個のピットを新たに検出したものの、門跡や建物跡などの新たな遺構を確認することはできなかった。

また、千畳敷から約80m東側のトイレ建設予定地（平成14年度工事）の平場についても遺構面までの深さなどを確認するためにトレンチ調査を行った（T1501・1504・1506・1507）。調査の結果、遺構は確認されなかったが、地表面から基盤層（地山）までの深さが最も浅いところで約0.6mだったことから、建物基礎工事によって遺構に影響がないよう約1mの盛土を施したうえで工事を実施した。

以上の調査の結果、遺構埋土や遺構外より土師質土器の坏や瓦質土器の播鉢や火鉢、国産や中国製の陶磁器などが出土した。

## （2）調査日誌抄

平成14（2002）年		やかに下降することを確認。
6月3日	T1501・1502の表土除去開始。	7日 SD19底面や壁面でSD01を検出。
4日	T1503の表土除去開始。	9日 SD19調査状況写真撮影。
12日	T1501調査終了。調査状況写真撮影。	16日 T1505表土除去開始。
25日	T1503でSD19を検出。T1504表土除去開始。	20日 T1505遺構検出作業開始。
26日	T1504調査終了。	9月2日 T1505調査状況写真撮影。
7月3日	T1503北側を拡張、SD19北側掘り方を検出。	3日 T1502攪乱溝埋土掘り下げ。T1503北・南壁土層断面図作成。
4日	SD19検出状況写真撮影（T1503）。	4日 T1502北側でSD19を検出。
5日	T1503でSD01検出、SD19との重複を確認。	12日 空撮に伴う調査区清掃。
11日	T1501東壁及び北壁、T1504東壁土層断面図作成。	14日 15次調査区空中写真撮影。
31日	SD19底面を一部で検出。	10月28日 トイレ建設予定地発掘調査（T1506・1507）。
8月6日	SD19底面をほぼ検出。西から東に向かって緩	29日 T1506・1507調査終了。

## 第2節 検出遺構

### SD01（図11・13・15、図版3～7）

千畳敷とほぼ重複する範囲に存在した古墳時代首長居館を圍繞する壕跡である。本遺構については、1次調査でその存在が明らかになったもので、以後、6次（千畳敷南東側）・10次（同北西側）・12次（同北側）・14次調査（同南東側）で確認した。このうち、千畳敷南東側では1次調査と同規模・同形態の張り出し部、千畳敷北側では縦堀跡SD18との重複を確認している。

15次調査ではT1503とT1505で検出したが、後者については1次調査範囲に含まれているため報告を

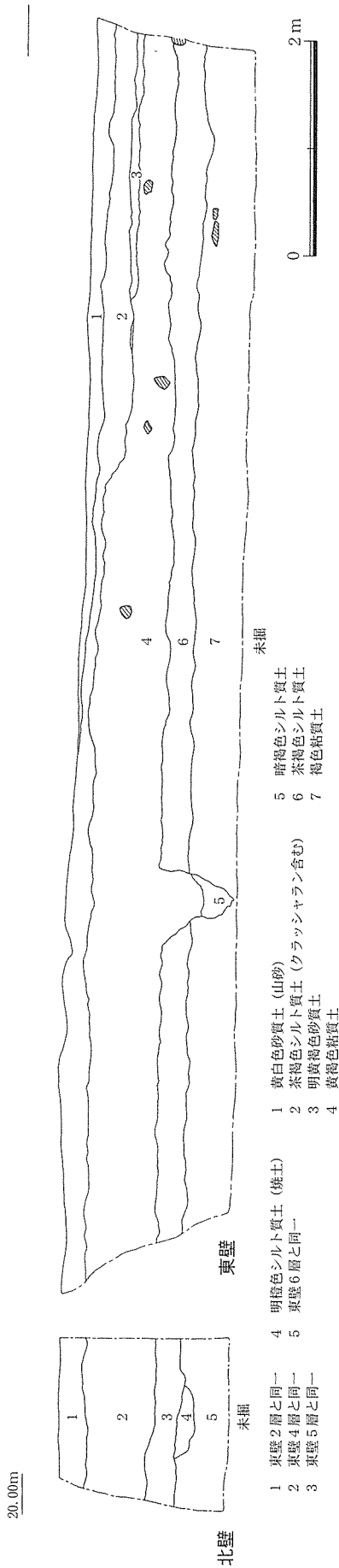


図8 T1501土層断面図(1/60)

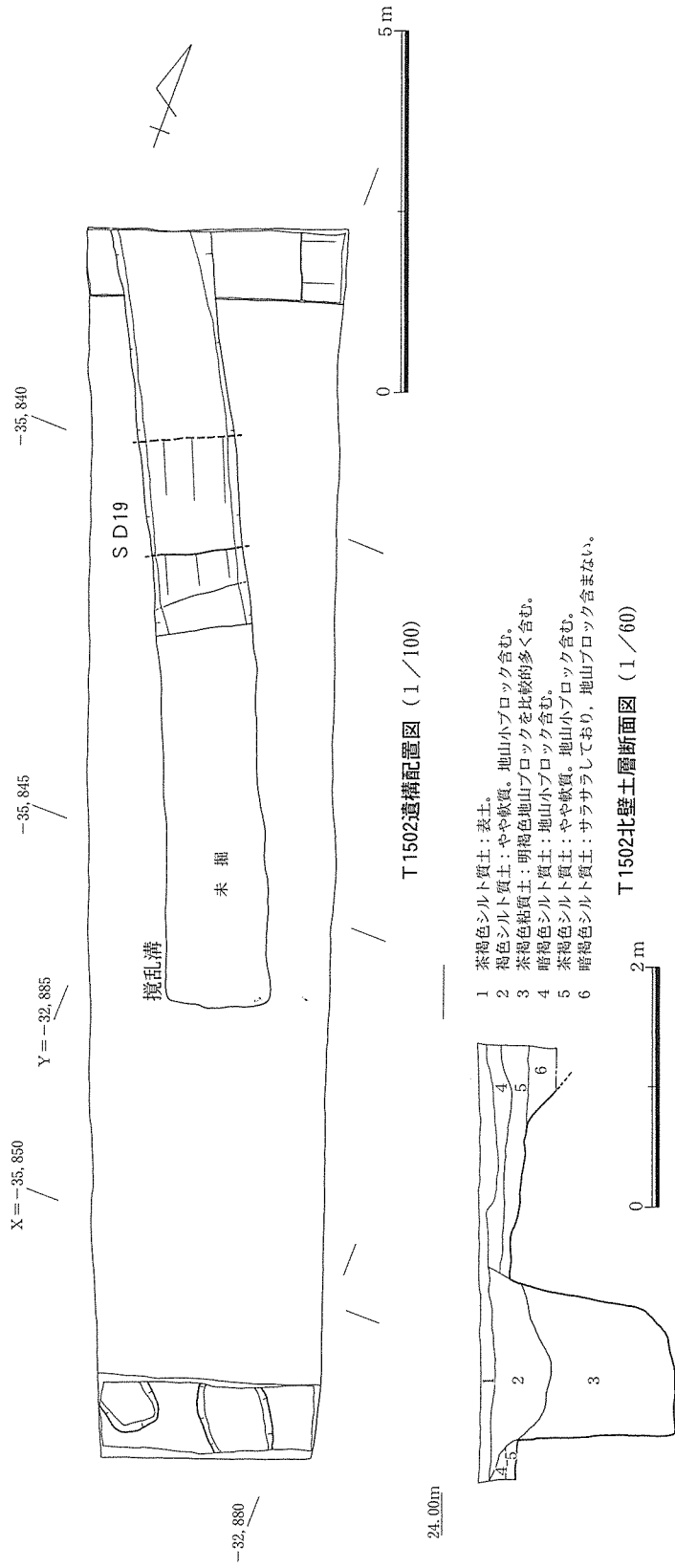


図9 T1502遺構配置図及び同北壁土層断面図(1/100, 1/60)

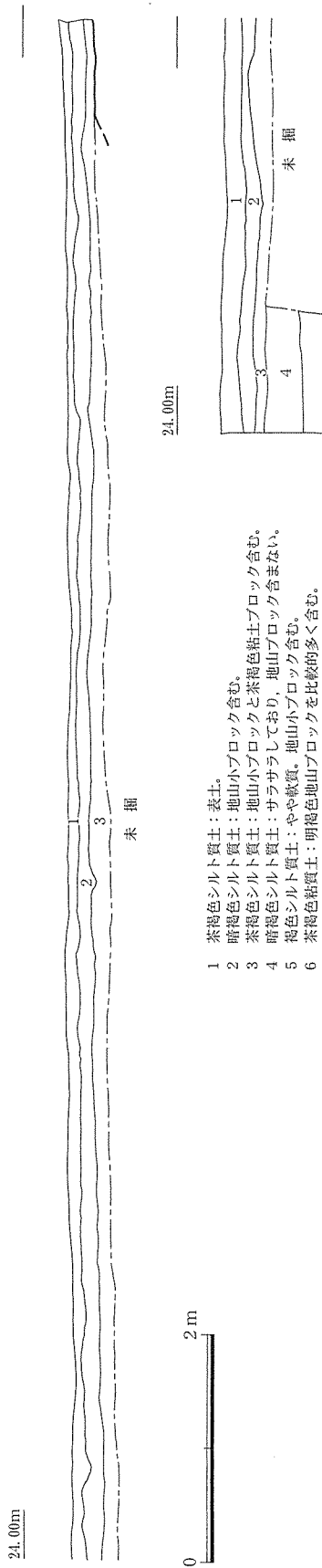


図10 T1502西壁土層断面図 (1/60)

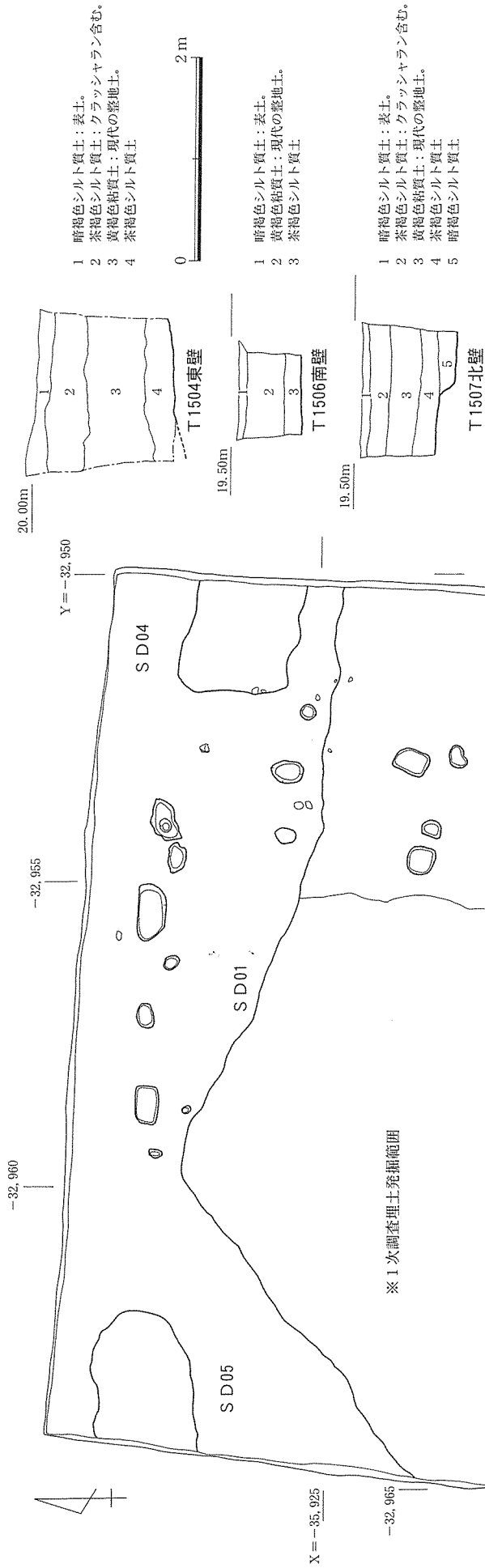


図12 トイレ建設予定地周辺確認調査  
トレンチ土層断面図 (1/60)

図11 T1505遺構配置図 (1/100)

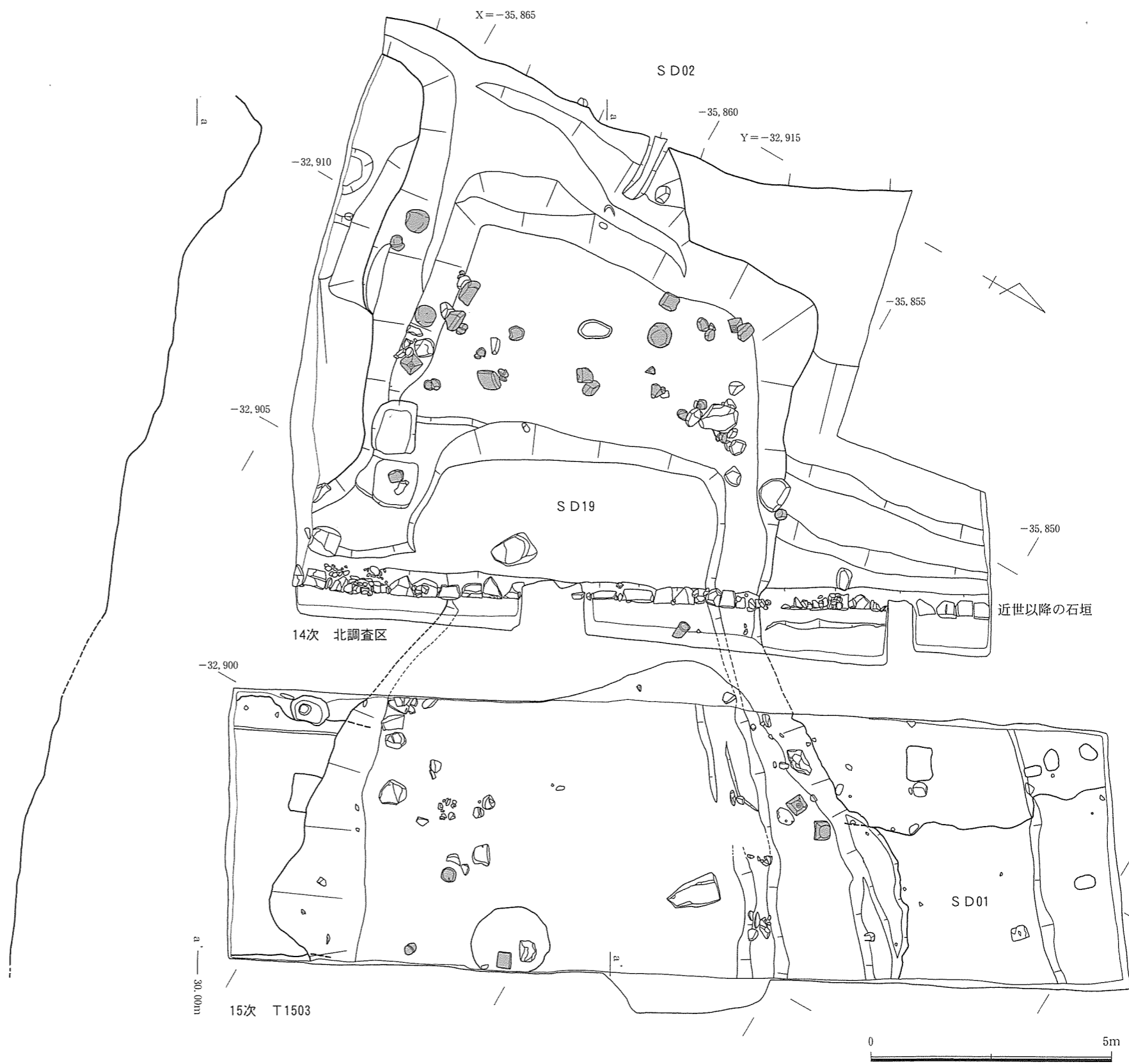


図13 SD19周辺遺構配置図(1/100, アミは凝灰岩製石塔)

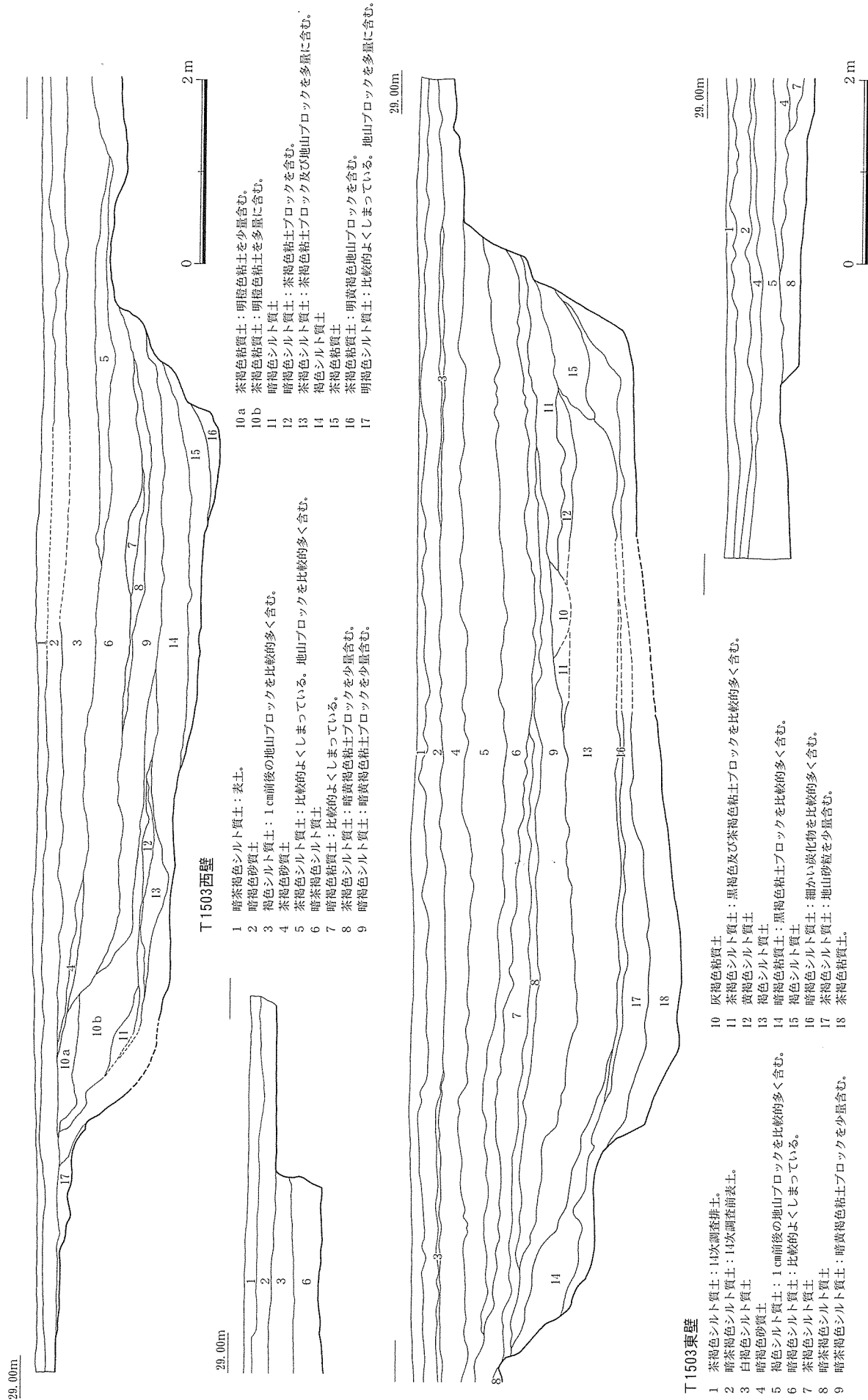


図14 T1503西壁・東壁土層断面図 (1/60)



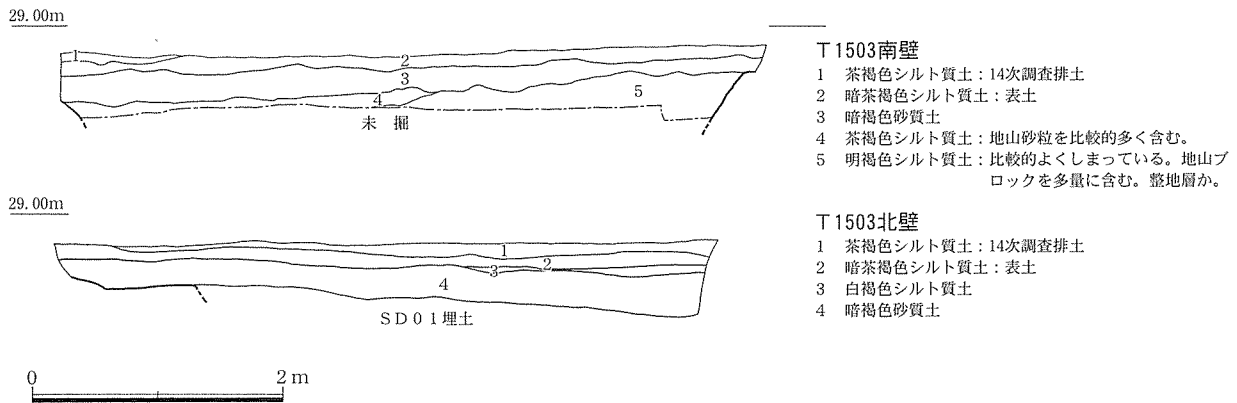


図15 T 1503南壁・北壁土層断面図 (1/60)

省略する。また、過去の調査で幅や深さなどの遺構規模や出土遺物の様相がおおむね判明していること、中世城としての整備に伴う発掘調査であることなどから、遺構埋土の掘り下げは基本的に行わなかった。

当該調査では、千畳敷北側の曲輪面から2段下の帯曲輪において検出した。竪堀跡SD19とは直交方向に重複しており、SD19の両壁面や底面で断面を確認した。断面Vの字形を呈し、検出規模は最大幅約5.3m、底幅約0.3m、深さ約1.7m。底部から千畳敷までの比高差は約11mである。埋土より古墳時代須恵器の坏蓋が出土した。

#### SD19 (図9・13・14, 巻頭図版3, 図版1～6)

千畳敷北東側に位置し、北東-南西方向に主軸をもつ竪堀跡である。T1502では、攪乱溝埋土の掘削過程で断面を検出するとともに、北側の掘り方を確認したが、前述のように調査期間の都合により遺構規模の確認作業は次年度調査に持ち越した。

一方、T1503における検出規模は、長さ5.5m、幅8.7～13.1m、底幅7.1～8.1m、平場(帯曲輪)面との最大比高差2.5m、壁面の傾斜角度約40°～50°である。上面幅および底幅は北東側ほど幅広になり、底面は南西側から北東側に向けて約15°で下降している。北側にはSD19に付随するように幅約2.6～4.4m、検出面からの深さ約0.2mの帯状の平坦面がみられる。

出土遺物については、14次調査と同様に下層から主に14世紀代とみられる石塔残欠が出土したが、その数は14次調査より少ない。出土層位から14次調査で出土したものと同時期に投棄された可能性が高く、千畳敷虎口周辺で確認された石塔を大量投棄する「城破り」に関連したものと想定される。このことから、今回の調査では遺構的な取り扱いを行ったため取り上げ作業は実施せず、部位の確認のみにとどめて調査後に埋め戻しを行った。

石塔以外では、土師質土器の坏・火鉢、瓦質土器の播鉢・火鉢、青磁や白磁、染付などの中国製陶磁器や朝鮮製の刷毛目皿などが出土した。

### 第3節 出土遺物

#### SD01 (図16, 図版7)

1は古墳時代後期の須恵器の坏蓋である。~~立ち土がりや受け部を欠損している~~。内面は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリを施す。

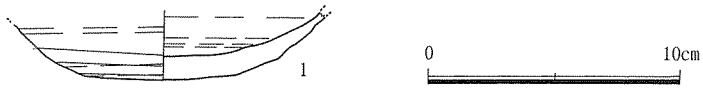


图16 SD01出土遺物 (1/3)

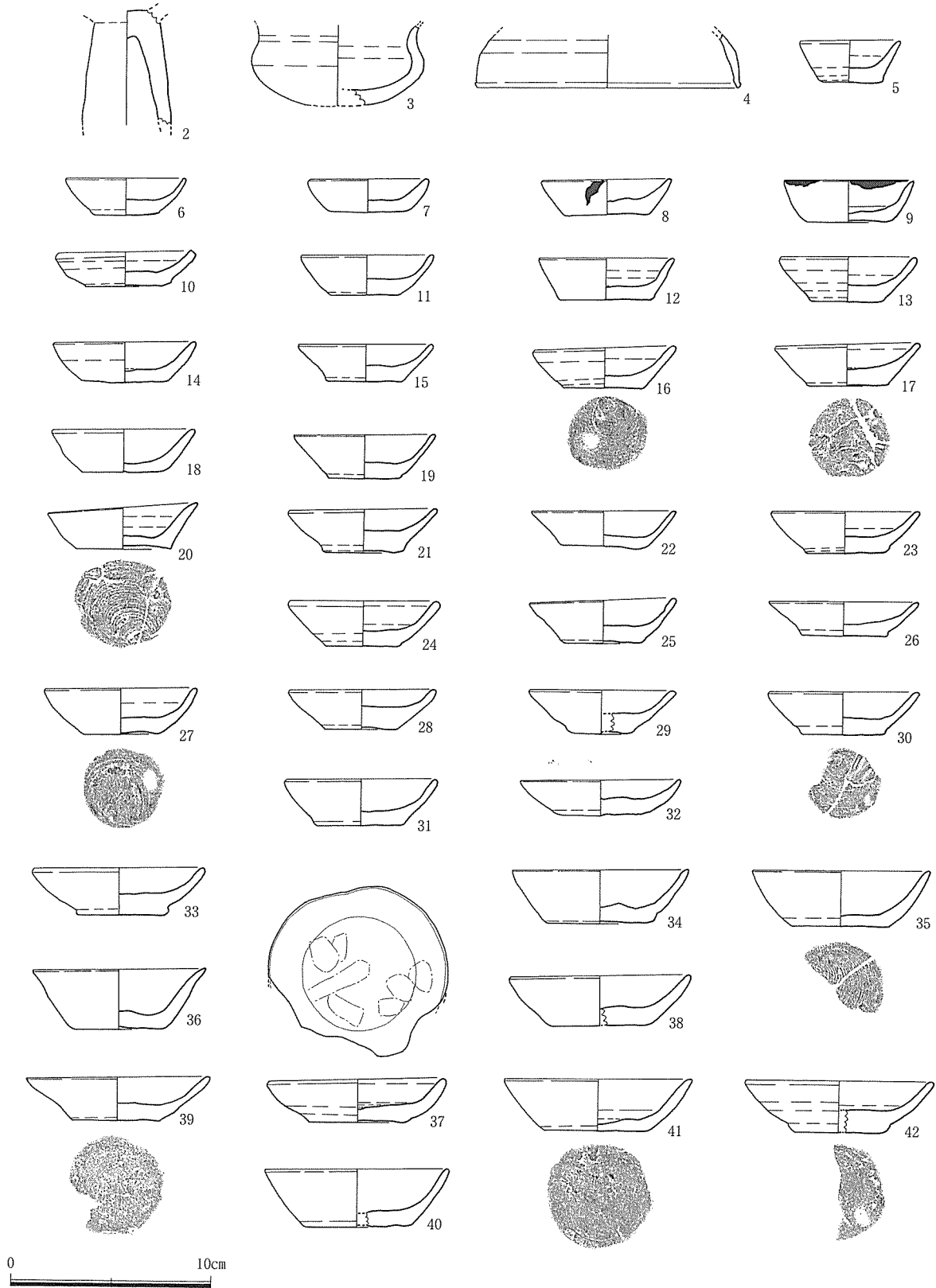


图17 SD19出土遺物 1 (1/3)

## SD19 (図17~21・23, 図版7~11)

2~4は古墳時代の土器。2・3は前期の土師器で、2が高坏の脚部、3は小型丸底壺である。器面調整はいずれも磨耗のため不明。4は後期の須恵器の坏蓋で、口縁部端部に段を有する。

5~78は土師質土器。5~74は坏で、磨耗により器面調整が不明なものを除き、法量の大小に関係なく全て内外面は回転ナデ、底部は糸切り離しと共通点がある。5~31は口径が8cm未満の小型のもので、16・27の底部には指頭押圧痕がある。8・9の口縁部には油痕があり、灯明皿として使用されたとみられる。また、10・18は二次的に被熱している。32~61は口径が8~10cm未満と中型のもの。33・42・46・49・53の底面には指頭押圧痕がある。62~71は口径が10cmを越える大型のもので、63・70・71の底部には指頭押圧痕がある。72・74の見込み部分には、渦巻状の沈線を施す。75は甕で、口縁部が外反する。内外面ともヨコナデを施す。76は浅鉢、77・78は火鉢である。78の外面には突帯が巡り、口縁部外面に菊花文のスタンプを施す。

79~88は瓦質土器。79・82は播鉢、80は甕、81は捏鉢、83~88は火鉢である。79・82はともに5本単位の播目を施し、内面は使用によるとみられる摩滅が認められる。80は口縁部が外反し、外面に格子状タタキを施す。81の外面には爪による刺突痕がある。83・85~88は深鉢形の火鉢で、外面には突帯が1~数条巡り、83の口縁部外面にはX字状、85には菊花文のスタンプ文を施文する。86の突帯下には突帯貼付けの際に目印にしたとみられる横位の沈線が残る。87・88は脚部から底部の破片で、本来は3本の脚部を有していたとみられる。87の底部は上げ底状を呈する。88の外面にはX字状のスタンプ文が残る。84は口縁部が強く外反し、口縁部内面の平坦面にスタンプ文を施文する。

89・90・92~97・136は青磁。89・90は13~14世紀前半の龍泉窯系の碗で、外面に片切彫による鎬連弁文を施す。92は15~16世紀代の中国製とみられる粗製の青磁碗。93は12~13世紀代の龍泉窯系の碗で、見込みに片切彫により画花文を施す。94は16世紀代の福建系の小皿、95は15~16世紀前半の龍泉窯系の碗。96は14世紀末~15世紀中頃の龍泉窯系の盤で、内面に文様を施す。97は14世紀後半~15世紀中頃の龍泉窯系の香炉である。136は16世紀代の福建系の碗で、外面に退化した蓮弁文を施文する。

91・98~100・111は白磁。91は15~16世紀代の焼成不良の碗で、胎土の土が粗く、白色化粧土を内外面に施す特徴があり、東南アジア製(ベトナムか)の可能性もある。98・100は16世紀代の景德鎮窯系の皿、99も同じく景德鎮窯系の小杯で16世紀後半のもの。111は14世紀後半~15世紀代の中国製白磁皿である。

101~110・138は染付。101は16世紀代の景德鎮窯系ないし福建系の粗製碗で、外面に不明瞭な蕉葉文を施す。102は16世紀前半~中頃の景德鎮窯系の碗で、二次的に被熱している。103は口縁部が短く外反する16世紀後半~17世紀初頭の景德鎮窯系の碗で、口縁部内面に四方禪文を施す。104は16世紀後半~17世紀初頭の景德鎮窯系の碗で、器壁が薄く上質のものである。外面に牡丹唐草文、口縁部内面に四方禪文を描く。105は16世紀前半~中頃の景德鎮窯系蓮子(レンツウ)碗で、外面に蕉葉文、内面に蓮花状の文様を描く。106は16世紀前半~中頃の景德鎮窯系の碗。107・108は口縁部端部が外反する16世紀後半~17世紀初頭の景德鎮窯系の皿で、口縁部内面に四方禪文を施す。109は16世紀後半の福建系の皿で、呉須の発色が悪い。110は16世紀代の景德鎮窯系の皿である。138は16世紀後半の景德鎮窯系の碗で、外面に唐草文を描く。

112~114は陶器。112は明代の中国製(広東系か)と推定される褐釉陶器の蓋で、本来は鉢とセットで使用されたとみられる。外面のみ褐色釉を施す。113は14~15世紀代の中国製天目茶碗で、1~2mm

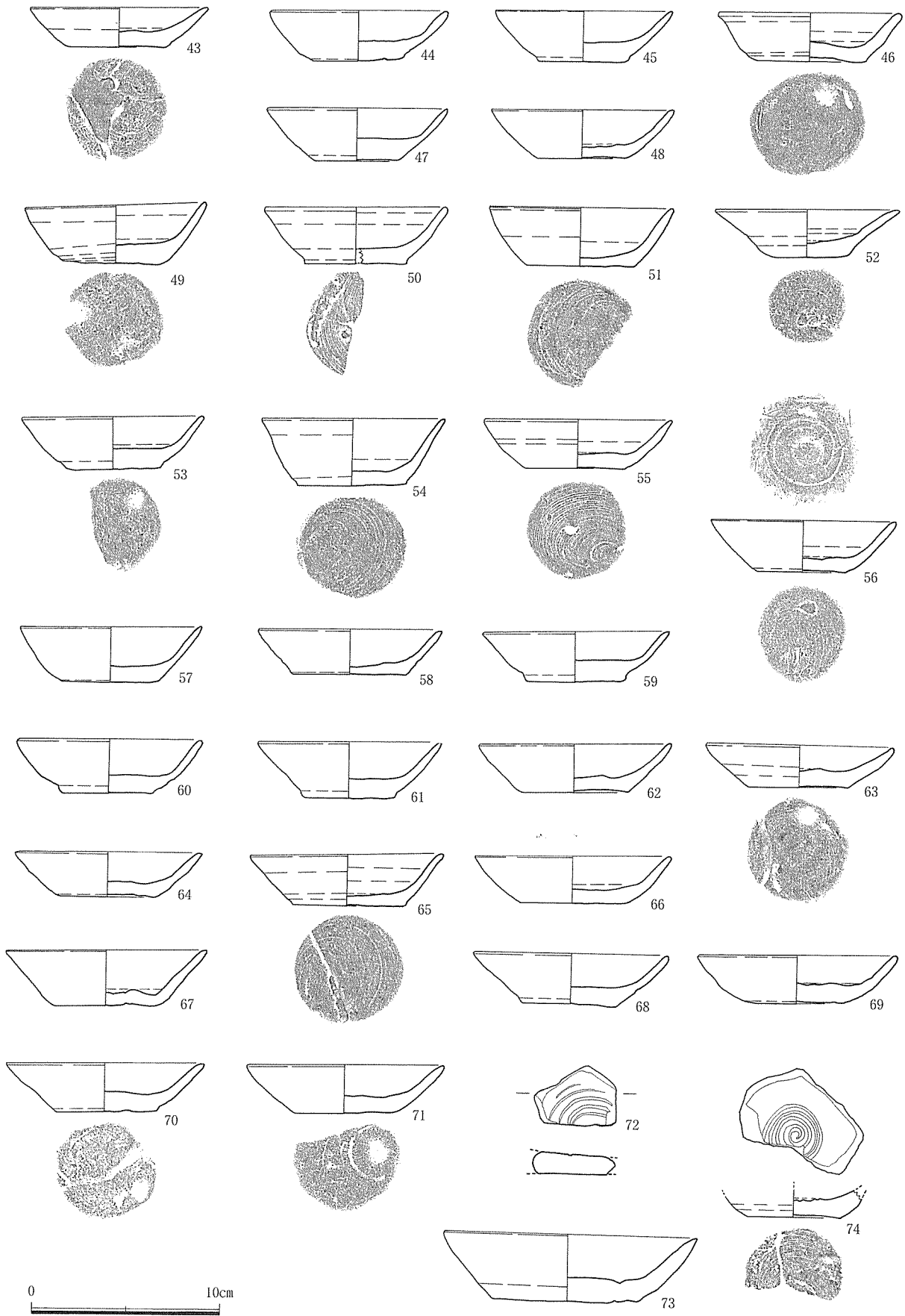


図18 SD19出土遺物2 (1/3)

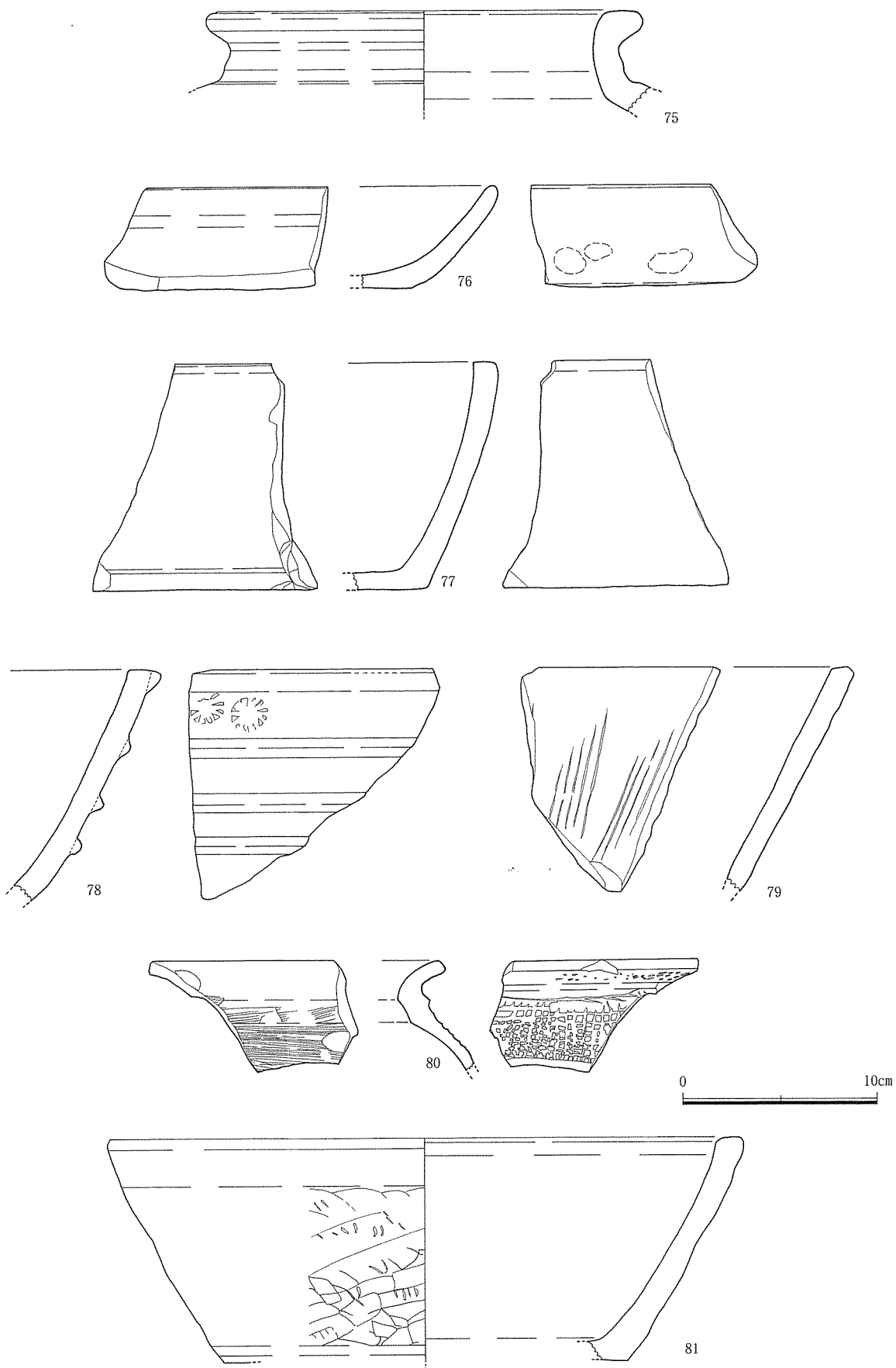


圖19 SD19出土遺物3 (1 / 3)

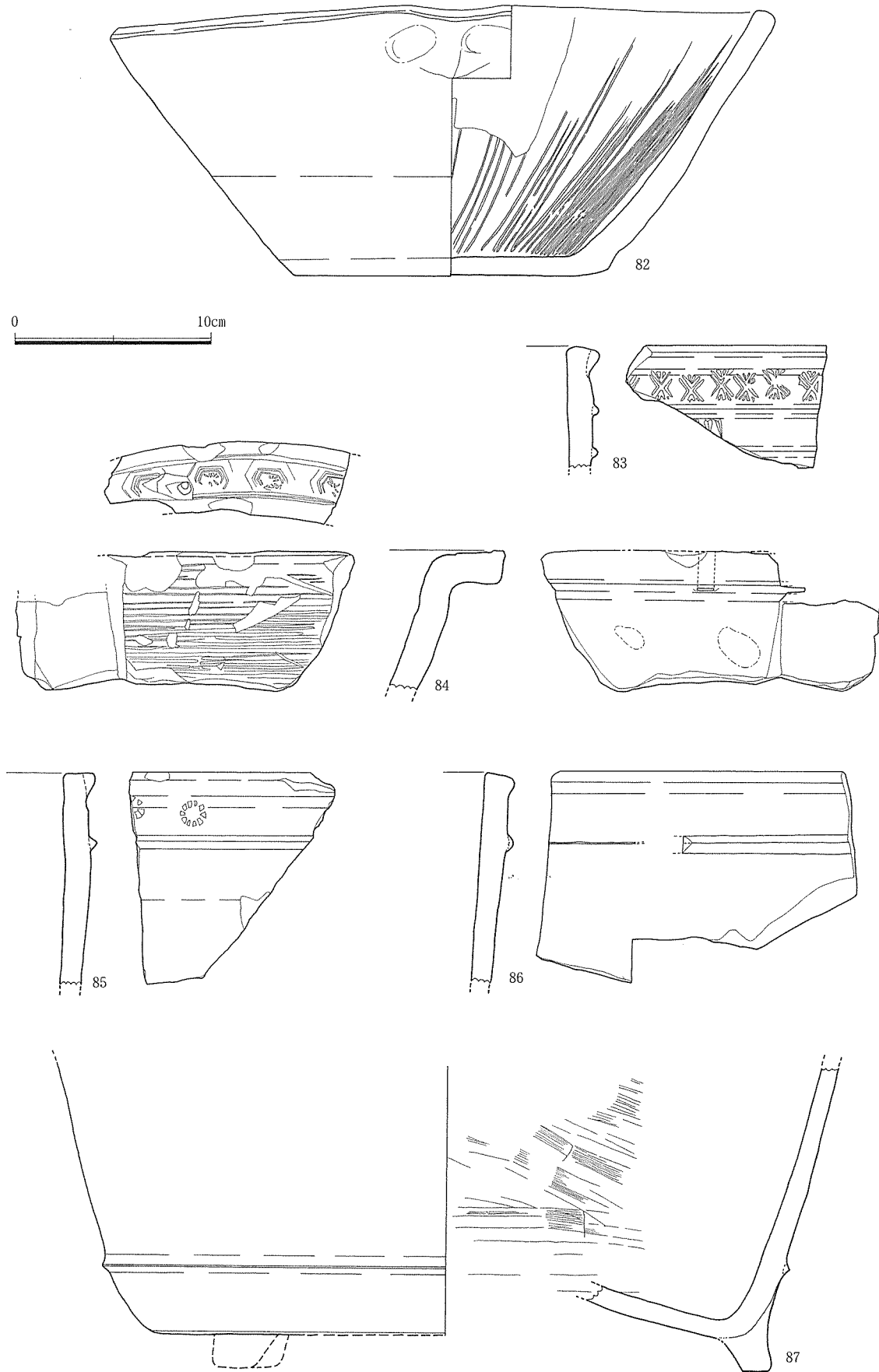


図20 S D19出土遺物4 (1/3)

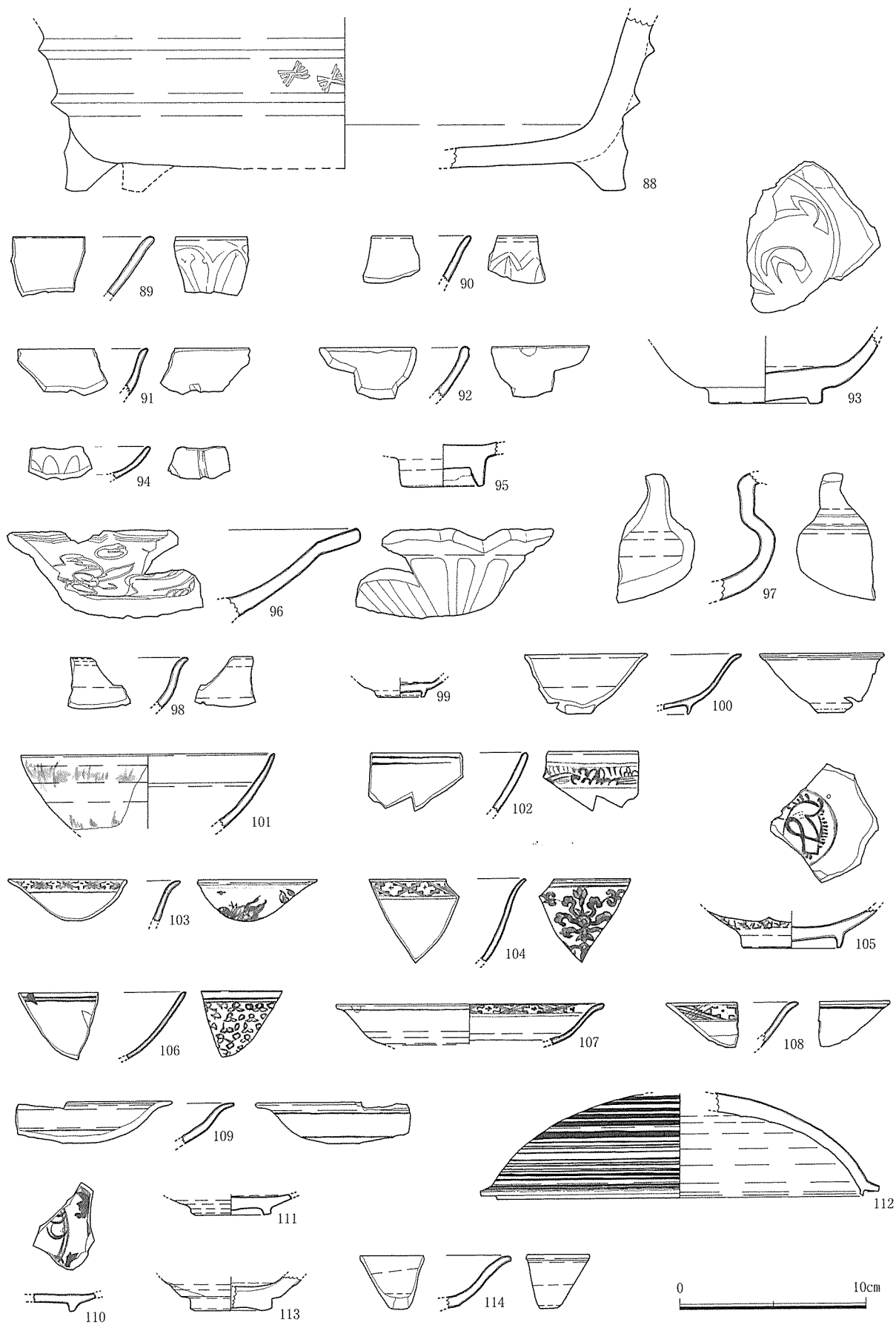


图21 SD19出土遺物5 (1/3)

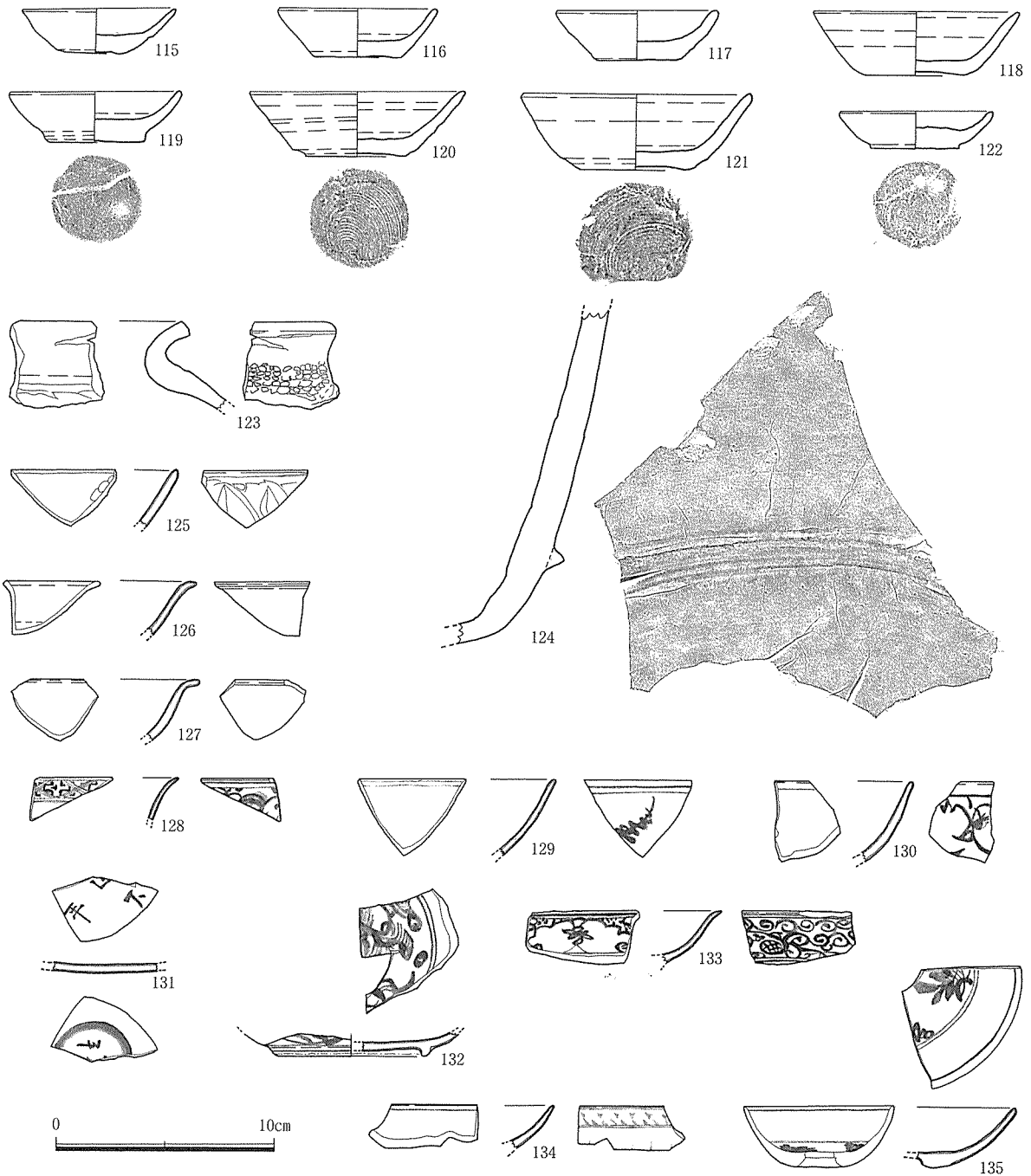
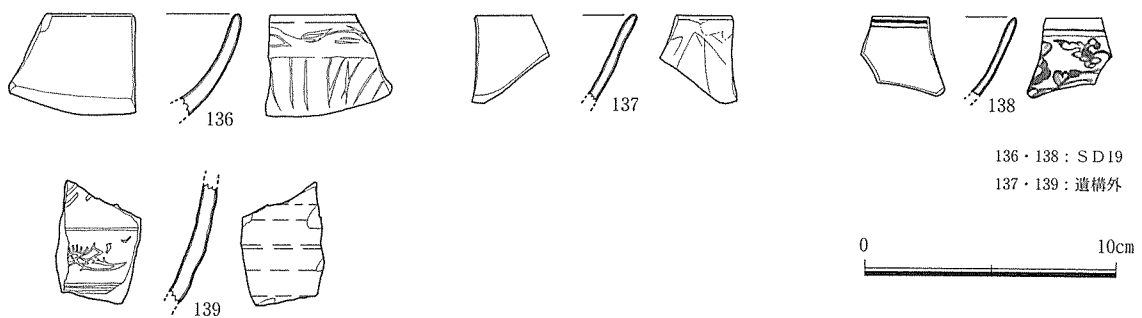


図22 T1501遺構外出土遺物 (1 / 3)



136・138：SD19  
137・139：遺構外

図23 T1502出土遺物 (1 / 3)



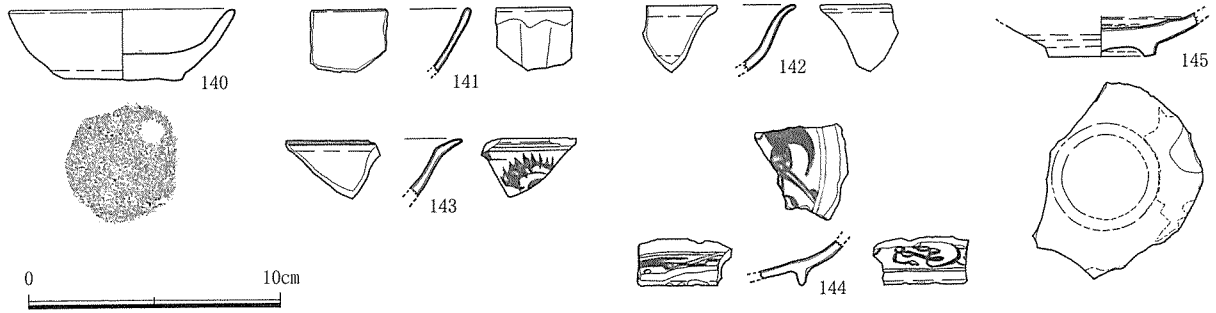


図24 T1503遺構外出土遺物（1 / 3）

程の厚い黒色釉を施す。114は15～16世紀代の朝鮮製施釉陶器の皿で、内外面に白色の化粧土を施している。

#### 遺構外出土遺物（図22～24，図版11）

115～135はT1501出土。115～122は土師質土器で、122は皿，それ以外は坏である。磨耗により器面調整が不明なものを除き，法量の大小に関係なく全て内外面は回転ナデ，底部は糸切り離しと共通している。119の底部には指頭押圧痕跡がある。123・124は瓦質土器。123が甕で，外面に格子目状タタキを施す。124は火鉢で，底部に一条の突帯が巡る。

125～135は中国製陶磁器。125は13～14世紀前半の龍泉窯系青磁碗で，外面に片切彫による鎬蓮弁文を施文する。126・127は16世紀代の景德鎮窯系白磁碗で，口縁端部が短く外反する。128～135は染付で，推定を含め全て景德鎮窯系のものである。128は16世紀後半～17世紀初頭の碗で，内面に四方禪文を描く。129は16世紀代の碗，130は16世紀後半～17世紀初頭の景德鎮窯系と推定される碗で，外面に唐草文を描く。131～135は皿。131は見込みと高台内にそれぞれ「下」「平」，「平」の銘があり，「天下太平」の銘を有する皿とみられる。132は16世紀前半～中頃のもので，見込みに玉取獅子を描く。二次的に被熱している。133は16世紀代のもので，内面に如意頭文様，外面に唐草文を描く。これも二次的に被熱している。134・135は碁笥底の皿で，16世紀代のものである。

137・139はT1502，140～145はT1503出土。137は13世紀～14世紀前半の龍泉窯系青磁碗で，外面に片切彫による鎬蓮弁文を施す。139は17世紀後半頃の内面に象嵌を施した肥前系（三島手）陶器で鉢とみられる。140は土師質土器の坏である。141は15世紀中頃～16世紀初頭の龍泉窯系青磁碗で，外面に剣先蓮弁文を施す。142は16世紀代の景德鎮窯系白磁皿で，口縁端部が短く外反する。143・144は景德鎮窯系染付皿。143は16世紀前半～中頃，144は16世紀後半のもので，後者は二次的に被熱している。145は1590～1630年代の肥前系灰釉皿である。

表4 15次調査出土遺物観察表(カッコ内の数字は復元値を示す)

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調		器面調整 (内面/外面)	調査 地点	層位	法量 (cm)		備考	
					(内面/外面)	(内面/外面)				口径	器高 底径		
1	15-105	須恵器・坏蓋	1~2mmの砂粒	良好	灰/灰		回転ナデ/回転ヘラケズリ	T1503	上層	-	残2.8	-	SD19挿図番号4と同一個体
SD19 (土器) ※層位はT1503西壁の土層													
2	15-86	土師器・高坏	1~2mmの砂粒	良好	橙/橙、褐灰		磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	6	-	残5.7	-	胴部
3	15-28	土師器・小壺	1mm程度の砂粒	やや不良	橙/橙		磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	4	-	残4.0	-	
4	15-147	須恵器・坏蓋	1mm以下の砂粒	良好	褐灰/褐灰		回転ナデ/回転ヘラケズリ、回転ナデ	T1503	10	(13.3)	残2.7	-	SD01挿図番号1と同一個体
5	15-4	土師質土器・坏	1~2mmの砂粒	良好	橙/橙		ナデ?/磨耗のため不明	T1503	10	4.9	2.2	3.2	
6	15-130	土師質土器・坏	1~2mmの砂粒	良好	橙/橙		磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	8	(6.0)	1.9	3.4	
7	15-134	土師質土器・坏	1mm未満の砂粒	良好	橙/橙		磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	5	(6.0)	1.7	3.8	
8	15-116	土師質土器・坏	角閃石, 1mm程の砂粒	良好	橙/橙		磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	10	(6.4)	1.8	4.2	外面一部に油痕
9	15-126	土師質土器・坏	1mm未満の砂粒	良好	にぶい黄橙/明黄褐		磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	5	(6.4)	2.1	4.4	外面一部に油痕
10	15-2	土師質土器・坏	長石, 1~4mmの砂粒	良好	橙/橙		磨耗のため不明/回転ナデ、底部糸切り離し?	T1503	10	6.6	1.8		二次的に被熱
11	15-133	土師質土器・坏	角閃石, 長石, 1mm程の砂粒	良好	橙/橙		磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	6	(6.6)	2.0	3.4	
12	15-82	土師質土器・坏	1~2mmの砂粒	良好	浅黄橙/浅黄橙		回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	6	(6.6)	2.1	4.6	
13	15-14	土師質土器・坏	1~2mmの砂粒	良好	橙/橙		磨耗のため不明/回転ナデ?	T1503	6	(6.7)	2.3	3.4	
14	15-8	土師質土器・坏	1~2mmの砂粒	良好	にぶい黄橙/橙		磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	8・9	6.8	2.1	4.2	
15	15-124	土師質土器・坏	角閃石, 長石, 1~2mm程の砂粒	良好	橙/橙		回転ナデ/磨耗のため不明、底部糸切り離し	T1503	9	(6.8)	1.9	4.0	
16	15-19	土師質土器・坏	1~2mmの砂粒	良好	橙/橙		回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	6・7	6.9	2.0	3.9	底部に指頭押圧痕
17	15-6	土師質土器・坏	1~2mmの砂粒	良好	橙/橙		ナデ、回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	10	7.0	2.1	4.1	
18	15-11	土師質土器・坏	角閃石, 1~2mmの砂粒	良好	浅黄橙/にぶい黄橙		磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	5	(6.9)	2.2	4.0	口縁部が二次的に被熱
19	15-125	土師質土器・坏	角閃石, 1mm程の砂粒	良好	橙/橙		磨耗のため不明/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	6	(7.0)	2.2	3.9	底部に指頭押圧痕
20	15-10	土師質土器・坏	1mm程度の砂粒	良好	橙/橙		磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	11	7.3	2.1	4.7	
21	15-15	土師質土器・坏	1~2mmの砂粒	良好	橙/橙		磨耗のため不明/回転ナデ?	T1503	6	7.3	2.2	4.2	
22	15-110	土師質土器・坏	1mm以内の砂粒	良好	橙/橙		磨耗のため不明/磨耗のため不明、底部糸切り離し	T1503	10	(7.2)	1.9	4.4	
23	15-17	土師質土器・坏	1~2mmの砂粒	良好	橙/橙		磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	10	7.2	2.2	3.9	
24	15-68	土師質土器・坏	1~2mmの砂粒	良好	橙/橙		ナデ、回転ナデ/回転ナデ?、底部糸切り離し	T1503	6	(7.3)	2.3	3.6	
25	15-120	土師質土器・坏	角閃石, 長石, 1~2mm程の砂粒	良好	橙/橙		回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	10	(7.3)	2.5	4.2	
26	15-109	土師質土器・坏	角閃石, 1~2mm程の砂粒	良好	橙/橙		磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	10	(7.4)	1.7	4.3	
27	15-18	土師質土器・坏	1mm程度の砂粒	良好	橙/橙		磨耗のため不明/回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	10	(7.4)	2.3	3.8	底部に指頭押圧痕
28	15-106	土師質土器・坏	角閃石, 長石, 1mm前後の砂粒	良好	橙/橙		磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	4	7.4	2.0	3.8	
29	15-123	土師質土器・坏	角閃石, 1~2mm程の砂粒	良好	浅黄橙/浅黄橙		回転ナデ/回転ナデ、底部に底部糸切り離し	T1503	6	(7.4)	2.2	3.4	
30	15-27	土師質土器・坏	1~3mmの砂粒	良好	橙/橙		磨耗のため不明/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	6	(7.4)	2.2	4.0	
31	15-114	土師質土器・坏	角閃石, 1mm程の砂粒	良好	橙/橙		磨耗のため不明/磨耗のため不明、底部糸切り離し	T1503	10	(7.6)	2.3	4.4	
32	15-129	土師質土器・坏	角閃石, 1~3mm程の砂粒	良好	橙/橙		磨耗のため不明/磨耗のため不明、底部糸切り離し	T1503	3・4	(8.0)	1.8	4.4	
33	15-72	土師質土器・坏	1~3mmの砂粒	良好	橙/橙		回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	6・7	(8.4)	2.3	4.4	底部に指頭押圧痕

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調		器面調整 (内面/外面)	調査 地点	層位	法量 (cm)		備考
					(内面)	(外面)				口径	器高 底径	
34	15-132	土師質土器・坏	角閃石、1mm程の砂粒	やや不良	浅黄橙/浅黄橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	6	(8.8)	2.6	5.4	
35	15-23	土師質土器・坏	1~2mmの砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明、底部糸切り離し	T1503	6	(8.8)	2.8	4.8	
36	15-141	土師質土器・坏	角閃石、1mm程の砂粒	良好	浅黄橙/浅黄橙	回転ナデ/磨耗のため不明、底部糸切り離し	T1503	10	(8.6)	3.1	4.6	内面に煤付着
37	15-67	土師質土器・坏	1~2mmの砂粒	良好	橙/橙	ナデ、回転ナデ/?/磨耗のため不明、底部糸切り離し	T1503	6	8.8	2.2	4.8	
38	15-138	土師質土器・坏	角閃石、長石、1~3mm程の砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	8・9	(9.0)	2.5	4.8	
39	15-112	土師質土器・坏	角閃石、1~3mm程の砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	10	(9.2)	2.2	4.4	
40	15-107	土師質土器・坏	角閃石、1mm前後の砂粒	良好	橙/橙	ナデ、磨耗のため不明/磨耗のため不明、底部糸切り離し	T1503	6・7	(9.2)	2.9	5.4	
41	15-24	土師質土器・坏	1mm程度の砂粒	やや不良	黄橙/黄橙	回転ナデ/磨耗のため不明、底部糸切り離し	T1503	10	9.2	2.6	5.0	底部に指頭押圧痕
42	15-85	土師質土器・坏	1~4mmの砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	6・7	(9.3)	2.6	4.4	
43	15-7	土師質土器・坏	1~4mmの砂粒	良好	橙/橙	ナデ、回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	8・9	9.4	2.2	5.4	
44	15-127	土師質土器・坏	角閃石、長石、1~3mm未満の砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	5	(9.4)	2.7	4.7	
45	15-111	土師質土器・坏	角閃石、長石、1~3mm程の砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	6	(9.4)	2.7	4.8	
46	15-83	土師質土器・坏	角閃石、長石、1~2mmの砂粒	良好	浅黄橙/褐灰	磨耗のため不明/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	10	9.5	2.6	5.5	底部に指頭押圧痕
47	15-137	土師質土器・坏	石英、1~2mmの砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	5	(9.6)	2.7	4.7	
48	15-21	土師質土器・坏	角閃石、1~4mm程の砂粒	良好	橙/黄橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	6・7	(9.6)	2.7	4.8	
49	15-16	土師質土器・坏	1mm程度の砂粒	良好	橙/黄橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	8・9	9.5	3.1	5.3	底部に指頭押圧痕
50	15-29	土師質土器・坏	角閃石、1~5mmの砂粒	良好	にぶい黄橙/橙	磨耗のため不明/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	8	(9.5)	3.1	5.4	
51	15-5	土師質土器・坏	角閃石、1~2mmの砂粒	良好	浅黄橙/黄橙	ナデ、回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	8・9	9.6	3.2	5.7	
52	15-84	土師質土器・坏	角閃石、1~2mmの砂粒	良好	黄橙/橙	磨耗のため不明/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	11	9.7	2.7	4.1	
53	15-22	土師質土器・坏	1~2mmの砂粒	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	6	(9.6)	2.8	5.0	底部に指頭押圧痕
54	15-20	土師質土器・坏	角閃石、石英、1~5mmの砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明、底部糸切り離し	T1503	9	(9.7)	3.6	5.7	
55	15-3	土師質土器・坏	角閃石、石英、1~2mmの砂粒	良好	浅黄橙/黄橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	10	(9.8)	2.6	5.3	
56	15-74	土師質土器・坏	1~2mmの砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	10	(9.8)	2.8	4.7	
57	15-143	土師質土器・坏	角閃石、1~3mm程の砂粒	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	10	(9.6)	3.0	5.4	
58	15-119	土師質土器・坏	1mm未満の砂粒	良好	浅黄橙/浅黄橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	9	(9.8)	2.4	6.2	
59	15-121	土師質土器・坏	角閃石、1~2mm程の砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	5	9.9	2.7	5.4	
60	15-128	土師質土器・坏	角閃石、1~2mm程の砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	5	(9.8)	2.9	5.2	
61	15-140	土師質土器・坏	1~3mm程の砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	8・9	(9.8)	3.0	4.8	
62	15-131	土師質土器・坏	角閃石、1~2mm程の砂粒	良好	浅黄橙/浅黄橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	6	(10.2)	2.6	6.0	底部に指頭押圧痕
63	15-75	土師質土器・坏	角閃石、1~2mm程の砂粒	良好	橙/橙	ナデ、回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	5	10.0	2.3	5.2	
64	15-113	土師質土器・坏	角閃石、石英、長石、1~2mm程の砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明、底部糸切り離し	T1503	6	(10.0)	2.4	5.1	
65	15-13	土師質土器・坏	長石、1~2mmの砂粒	良好	浅黄橙/浅黄橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	5	10.1	2.8	6.0	
66	15-26	土師質土器・坏	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	浅黄橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	9	(10.3)	2.6	5.6	
67	15-142	土師質土器・坏	角閃石、1~2mm程の砂粒	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	T1503	11	(10.6)	3.0	5.4	
68	15-118	土師質土器・坏	角閃石、1mm程の砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	10	(10.4)	2.8	5.1	
69	15-122	土師質土器・坏	角閃石、1mm前後の砂粒	良好	橙/橙	回転ナデ/磨耗のため不明	T1503	6	(10.6)	2.5	5.6	
70	15-115	土師質土器・坏	角閃石、石英、1~2mm程の砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明、底部糸切り離し	T1503	10	(10.4)	2.6	5.4	底部に指頭押圧痕
71	15-71	土師質土器・坏	角閃石、石英、1~2mm程の砂粒	良好	橙~黄橙/橙~黄橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明、底部糸切り離し	T1503	4	(10.4)	2.6	5.2	底部に指頭押圧痕
72	15-70	土師質土器・坏	1mm程の砂粒	良好	黄橙/黄橙	ナデ/底部糸切り離し	T1503	6	-	残1.3	-	内面に同心円状の沈線
73	15-139	土師質土器・坏	1mm程の砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	9	13.4	3.6	7.9	
74	15-69	土師質土器・坏	1mm程度の砂粒	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ/?、底部糸切り離し	T1503	5	-	残1.5	5.0	内面に同心円状の沈線

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調		器面調整 (内面/外面)	調査 地点	層位	法量 (cm)		備考
					(内面/外面)	(外面/外面)				口径	器高 底径	
75	15-88	土師質土器・甕	長石, 1mm程度の砂粒	良好	灰黄褐/灰黄褐~褐灰	ヨコナデ/ヨコナデ	T1503	7	(21.5)	残5.2	-	
76	15-87	土師質土器・浅鉢	角閃石, 長石, 石英, 1~2mmの砂粒	良好	にぶい橙, 褐灰/褐灰	ヨコナデ/ヨコナデ, ナデ, ユビオサエ	T1503	6	-	5.2	-	
77	15-88	土師質土器・火鉢	1~4mmの砂粒	良好	灰白~浅黄橙/灰白	ヨコナデ, ナデ/ケズリ後ナデ	T1503	10	-	残11.5	-	
78	15-95	土師質土器・火鉢	角閃石, 石英, 1~2mmの砂粒	良好	浅黄橙/浅黄橙~橙	ヨコナデ/ヨコナデ	T1503	6	-	残11.7	-	菊花文のスタンプ
79	15-92	瓦質土器・搦鉢	1mm程度の砂粒	良好	灰白/灰白	ヨコナデ, 搦目/ヨコナデ	T1503	10	-	残11.4	-	
80	15-89	瓦質土器・甕	1mm程度の砂粒	良好	灰/灰	ヨコナデ, ハケメ/ヨコナデ, タタキ, ナデ	T1503	6	-	残5.7	-	
81	15-91	瓦質土器・捏鉢	角閃石, 1mm程度の砂粒	良好	灰白/灰白	ヨコナデ/ヨコナデ	T1503	8	(32.2)	残11.4	(20.7)	
82	15-100	瓦質土器・搦鉢	角閃石, 1~3mmの砂粒	良好	暗灰~黒橙/褐灰~橙	搦目/磨耗のため不明	T1503	10	33.0	13.7	16.0	
83	15-94	瓦質土器・火鉢	1~3mmの砂粒	良好	褐灰/灰白, 灰, 黒	ナデ/ヨコナデ	T1503	6	-	残6.2	-	
84	15-97	瓦質土器・火鉢	1~2mmの砂粒	良好	灰/灰	ハケメ/ユビオサエ, ナデ	T1503	10	-	残7.1	-	スタンプによる文様
85	15-90	瓦質土器・火鉢	1~2mmの砂粒	良好	暗灰~黒/灰白, 黒褐	ヨコナデ/ヨコナデ	T1503	5	-	残10.8	-	穿孔有り(1箇所)
86	15-93	瓦質土器・火鉢	石英, 長石, 1~2mmの砂粒	やや不良	にぶい橙/浅黄橙~橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	3	-	残10.7	-	内面に炭化物付着, 菊花のスタンプ
87	15-99	瓦質土器・火鉢	角閃石, 1~2mmの砂粒	良好	灰/暗灰, 浅黄橙	ハケメ, ナデ/ナデ	T1503	7	-	残15.4	(30.4)	突帯下に沈線
88	15-96	瓦質土器・火鉢	1mm程度の砂粒	良好	灰黄緑, 灰白/にぶい黄橙, 黒褐	ナデ/ナデ	T1503	10	-	残9.2	27.3	

SD19 (陶磁器) ※層位はT1503西壁の土層

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (釉薬/胎土)		器面調整 (内面/外面)	調査 地点	層位	法量 (cm)		備考
					色調 (釉薬/胎土)	(内面/外面)				口径	器高 底径	
89	15-33	青磁・碗	緻密	良好	オリーブ灰/灰	施釉/施文, 施釉	T1503	10	-	残3.2	-	龍泉窯系
90	15-76	青磁・碗	緻密	良好	オリーブ灰/灰白	施釉/施文, 施釉	T1503	11	-	残2.5	-	龍泉窯系
91	15-145	白磁・碗	緻密	やや不良	灰白/浅黄橙	施釉/施釉	T1503	11	-	残2.3	-	東南アジア産 (ベトナム) ?
92	15-146	青磁・碗	緻密	良好	灰/灰	施釉/施釉	T1503	5	-	残2.7	-	中国製
93	15-37	青磁・碗	緻密	良好	灰オリーブ/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1503	6	-	残3.7	(6.0)	龍泉窯系
94	15-39	青磁・小皿	緻密	良好	淡黄~オリーブ黄/黄橙	施文, 施釉/施文, 施釉	T1503	8	-	残1.7	-	福建産
95	15-63	青磁・碗	緻密	良好	浅黄~オリーブ黄/灰白	施釉/ロクケズリ, 施釉	T1503	3・4	-	残2.3	3.7	龍泉窯系
96	15-32	青磁・盞	緻密	良好	オリーブ褐/にぶい黄橙	施文, 施釉/施文, 施釉	T1503	3	-	残1.7	-	龍泉窯系
97	15-35	青磁・香炉	緻密	良好	灰白~オリーブ灰/灰白	施釉/施釉	T1503	15	-	残6.9	-	龍泉窯系
98	15-43	白磁・皿	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/施釉	T1503	3	-	残2.7	-	景徳鎮窯系
99	15-44	白磁・小杯	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/施釉	T1503	3・4	-	残1.1	2.5	景徳鎮窯系
100	15-40	白磁・皿	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/施釉	T1503	4	-	残3.2	-	景徳鎮窯系
101	15-57	染付・碗	緻密	良好	灰白~浅黄, オリーブ灰/灰白	施釉/施文, 施釉	T1503	6	13.3	残1.0	-	景徳鎮窯系か(福建産の可能性あり)
102	15-46	染付・碗	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1503	5	-	残3.2	-	景徳鎮窯系, 二次的に被熱
103	15-48	染付・碗	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1503	5	-	残2.2	-	景徳鎮窯系
104	15-54	染付・碗	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1503	8	-	残4.5	-	景徳鎮窯系
105	15-49	染付・碗	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1503	4	-	残2.1	5.2	景徳鎮窯系
106	15-52	染付・碗	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1503	3	-	残3.6	-	景徳鎮窯系
107	15-58	染付・皿	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1503	10	14.2	残2.2	-	景徳鎮窯系
108	15-148	染付・皿	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1503	8	-	残2.4	-	景徳鎮窯系
109	15-56	染付・皿	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1503	11	-	残2.2	-	福建産
110	15-80	染付・皿	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1503	8	-	残1.1	-	景徳鎮窯系
111	15-61	白磁・皿	緻密	良好	淡黄/灰白	ロクロナデ/ロクケズリ, ロクロナデ	T1503	11	-	残1.1	3.8	中国製

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (釉薬/胎土)	器面調整 (内面/外面)	調査 地点	層位	口径	器高	底径	備考
112	15-62	褐釉陶器・蓋	緻密	良好	褐～黒褐/橙	ロクロナデ/施釉	T1503	9	19.5	残5.6	—	中国製 (広東) の可能性高い
113	15-64	天目茶碗	緻密	良好	黒/灰～灰オリーブ	施釉/ロクケズリ, 施釉	T1503	5	—	残1.9	3.8	中国製
114	15-65	施釉陶器・皿	緻密	良好	灰白/灰	施釉/施釉	T1503	10	—	残2.9	—	朝鮮半島製

T1501遺構外出土遺物 (土器)

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整 (内面/外面)	調査 地点	層位	口径	器高	底径	備考
115	15-136	土師質土器・坏	角閃石, 1mm程の砂粒	良好	橙/橙	回転ナデ/磨耗のため不明	T1501	—	7.1	2.0	3.0	
116	15-1	土師質土器・坏	角閃石, 1mm程度の砂粒	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ	T1501	—	7.1	2.3	3.7	
117	15-135	土師質土器・坏	角閃石, 1～2mm程の砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明, 底部糸切り離し	T1501	—	(7.4)	2.3	3.8	
118	15-9	土師質土器・坏	1mm程度の砂粒	良好	黄橙/浅黄橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1501	—	9.2	3.0	4.5	
119	15-73	土師質土器・坏	1～2mmの砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明, 底部糸切り離し	T1501	—	7.7	2.3	4.3	底部に指頭押圧痕
120	15-25	土師質土器・坏	1～2mmの砂粒	良好	黄橙/黄橙	回転ナデ/回転ナデ, 底部糸切り離し	T1501	—	9.7	3.0	4.5	
121	15-12	土師質土器・坏	1～2mmの砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明, 底部糸切り離し	T1501	—	(10.3)	3.5	5.1	
122	15-117	土師質土器・皿	角閃石, 1～2mm程の砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1501	—	7.0	1.7	4.0	
123	15-103	瓦質土器・甕	角閃石, 1mm程の砂粒	良好	灰/灰, 黒灰	ヨコナデ, ナデ/タタキ, ヨコナデ	T1501	—	—	—	—	
124	15-144	瓦質土器・火鉢	長石, 1～2mm程の砂粒	良好	にぶい黄橙/褐灰	ナデ/ナデ	T1501	—	—	—	残13.1	—

T1501遺構外出土遺物 (陶磁器)

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (釉薬/胎土)	器面調整 (内面/外面)	調査 地点	層位	口径	器高	底径	備考
125	15-34	青磁 碗	緻密	良好	灰オリーブ/灰	施釉/施文, 施釉	T1501	—	—	残2.6	—	龍泉窯系
126	15-41	白磁 碗	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/施釉	T1501	—	—	残2.5	—	景德鎮窯系
127	15-42	白磁 碗	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/施釉	T1501	—	—	残2.8	—	景德鎮窯系
128	15-79	染付 碗	緻密	良好	灰白, 灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1501	—	—	残2.0	—	景德鎮窯系
129	15-47	染付 碗	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1501	—	—	残3.5	—	景德鎮窯系
130	15-51	染付 碗	緻密	良好	淡黄/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1501	—	—	残3.7	—	景德鎮窯系か
131	15-59	染付 皿	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1501	—	—	残0.5	—	景德鎮窯系, 「天下太平」の銘
132	15-45	染付 皿	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1501	—	—	残1.1 (6.6)	—	景德鎮窯系, 二次的に被熱
133	15-53	染付 皿	緻密	良好	灰白/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1501	—	—	残2.5	—	景德鎮窯系, 二次的に被熱
134	15-78	染付 皿	緻密	良好	明青灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1501	—	—	残2.0	—	景德鎮窯系
135	15-55	染付 皿	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施釉	T1501	—	—	2.8	—	景德鎮窯系

T1502出土遺物 ※層位はT1502西壁の土層

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (釉薬/胎土)	器面調整 (内面/外面)	調査 地点	遺構	層位	口径	器高	底径	備考
136	15-30	青磁 碗	緻密	良好	灰オリーブ/灰白	施釉/施文, 施釉	T1502	SD19	下層	—	残4.1	—	福建産
137	15-38	青磁 碗	緻密	良好	灰オリーブ/灰黄	施釉/施文, 施釉	T1502	—	—	—	残3.5	—	龍泉窯系
138	15-31	染付 碗	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1502	SD19	下層	—	残3.2	—	景德鎮窯系
139	15-66	陶器・鉢?	緻密	良好	黄褐, 灰白/にぶい褐	施文, 施釉/施釉	T1502	—	—	—	残4.9	—	肥前系 (三島手)

T 1503遺構外出土遺物 (土器)

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整 (内面/外面)	調査 地点	層位	口径	器高	底径	備考
140	15-108	土師質土器・坏	角閃石, 2~3mm程の砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1503	-	(9.0)	2.8	4.6	

T 1503遺構外出土遺物 (陶磁器)

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (釉薬/胎土)	器面調整 (内面/外面)	調査 地点	層位	口径	器高	底径	備考
141	15-36	青磁・碗	緻密	良好	緑灰/灰白	施釉/施文, 施釉	T1503	-	-	残2.5	-	龍泉窯系
142	15-77	白磁・皿	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/施釉	T1503	-	-	残2.7	-	景徳鎮窯系
143	15-81	染付・皿	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1503	-	-	残2.4	-	景徳鎮窯系
144	15-50	染付・皿	緻密	良好	灰白/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1503	-	-	残1.9	-	景徳鎮窯系, 二次的に被熱
145	15-60	陶器・皿	緻密	良好	灰白/浅黄	施釉/口ケケズリ, 施釉	T1503	-	-	残1.8	4.2	肥前系灰釉皿



## 第4章 平成15年度(第16次)発掘調査

### 第1節 調査の概要

#### (1) 調査の概要 (図25)

16次調査は、平成15(2003)年7月から同10月にかけて実施した。遺構確認調査のため千畳敷周辺の帯曲輪に1601~1603区の計3つの調査区を設定するとともに、15次調査T1502で検出した竪堀跡SD19にサブトレンチを設定し、本遺構の形状や規模確認のための追加調査を行った。調査面積(T1502を除く)は、1601区:約94㎡, 1602区:約115㎡, 1603区:約183㎡の計392㎡である。

15次調査所見や現況地形観察の結果、SD19は後述するように西岡台の丘陵裾部まで延びる可能性が高いことが判明した。この結果から判断して、SD19と配置状況や形態が類似し、千畳敷北側に位置する竪堀跡SD18も同じように麓側に延びると想定されたことから、16次調査ではSD18が検出された地点から北へ約15mの帯曲輪に1601区を設定し、確認調査を実施した。その結果、想定した地点でSD18

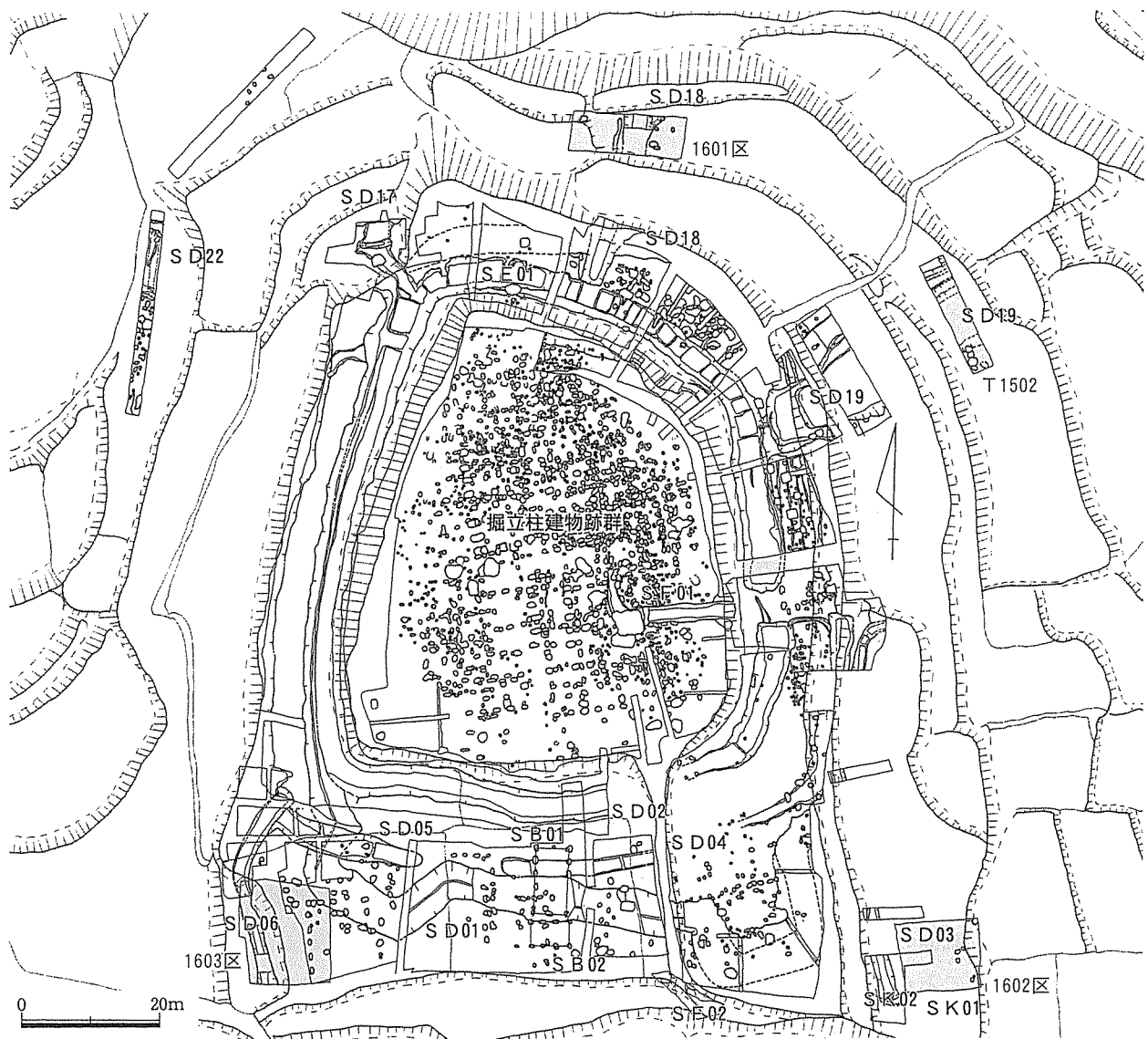


図25 16次調査区配置図 (1/1,000, アミ部分:16次調査地)



を検出したことから、一部で遺構の形状や規模を確認するために埋土の掘り下げを行った。

また、千畳敷虎口周辺で主に14世紀代の石塔残欠の大量投棄を伴う「城破り」を確認したが、この石塔群が本来所在した場所の特定が課題となっていた。過去の調査を検討した結果、1次調査で鎌倉期の墓坑としたSK01とSK02が所在する帯曲輪がその有力な推定地であったことから、1602区を設定して調査を実施した。調査の結果、調査区全面にわたって重機によるとみられる削平の痕跡が広がり、調査区の東側で拳大の礫群、散在的に分布するピットなどを検出した。中世の墓地跡を裏付ける遺構や遺物はほとんど出土しなかったが、過去の調査により周辺に存在した可能性は残されている。

1603区は保存整備事業に伴う遺構表示（千畳敷外堀跡）のために設定した調査区である。千畳敷の外堀に相当する横堀跡SD06の範囲確認を実施した結果、1次調査で確認された地点よりさらに約15m南側へ延びることが判明した。また、本遺構の東約8m付近では、掘立柱建物跡の可能性のある南北方向に並ぶ柱列を確認した。

その他、千畳敷虎口周辺に11次調査に伴い設定した横堀跡SD02の6区南側セクションベルトについて、整備工事（堀の遺構表示）に伴い掘削する必要が生じたため調査を行い、遺物の取り上げを行った。

以上の調査の結果、遺構埋土や遺構外より土師質土器の皿・坏・鉢や瓦質土器の播鉢や火鉢、青磁・白磁・染付などの中国製の陶磁器のほか、鉄砲玉として使用されたとみられる鉛玉などが出土した。

## （2）調査日誌抄

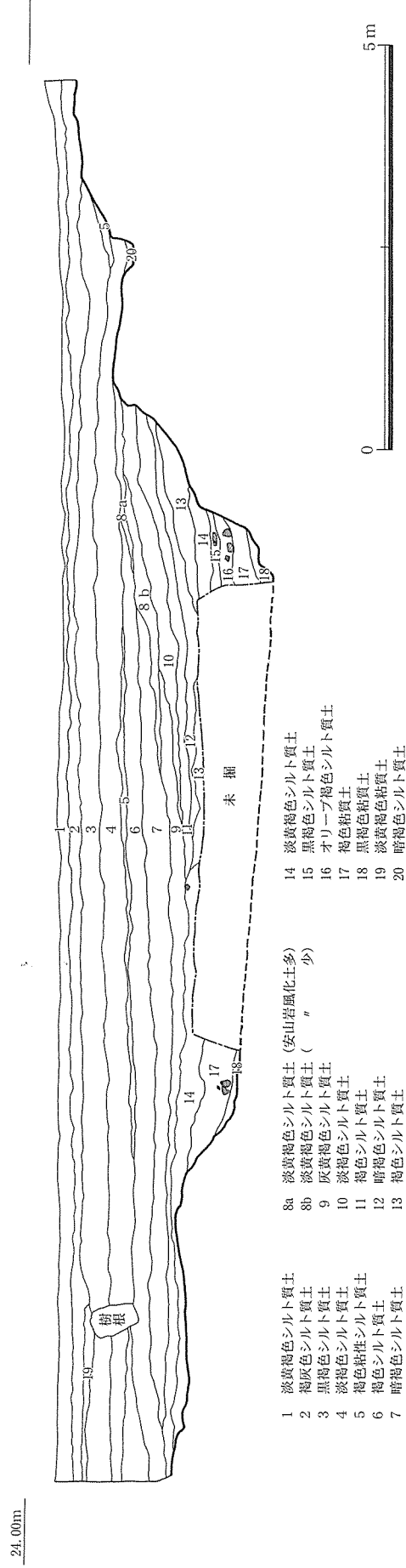
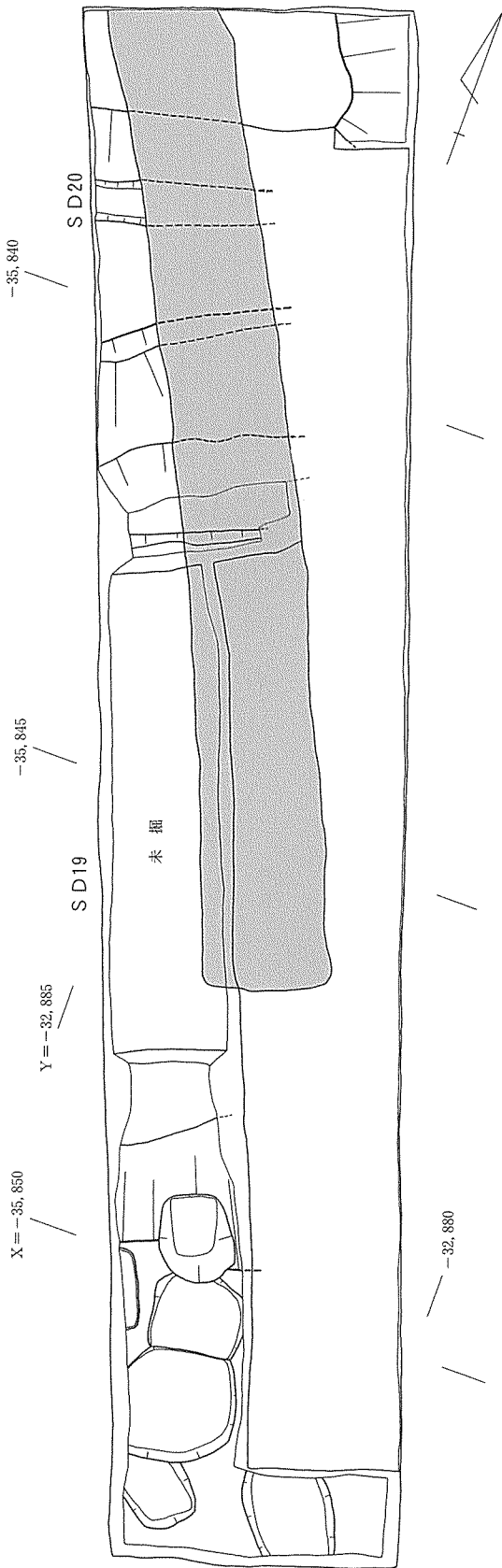
平成15（2003）年	9月1日	1601区調査状況写真撮影。1603区遺構検出作業開始。
7月23日	2日	T1502調査状況写真撮影。
	4日	宇土市教育委員会事務局職員3名、宇土市立鶴城中学校教諭2名が発掘調査現場を見学。
24日	9日	南北方向に主軸をもつ掘立柱建物跡とみられる柱列を検出（1603区）。
28日	11日	横堀跡SD06検出のため、1603区調査区西側を拡張。
8月4日	16日	1603区遺構検出作業終了、調査状況写真撮影。
7日	10月2日	1602区遺構検出作業終了。
11日	3日	1602区調査区清掃、調査状況写真撮影。
20日	24日	16次調査区空中写真撮影
21日		
25日		
27日		

## 第2節 検出遺構

SD19（図26、図版12・13）

北東－南西方向に主軸をもつ竪堀跡である。15次調査では攪乱溝断面で本遺構の存在を確認し、北側の上端と下端、底面の一部を検出した。しかし、対応する南側の上端や下端などの状況を確認することができなかったことから、16次調査では規模や形状などを把握するためにT1502西側にサブトレンチを設定し、発掘調査を実施した。

検出規模は幅約10.2m、底幅約6.7m、最大深約2.0mで、緩やかに北東側へ下降している。断面は逆



- |    |                     |    |            |
|----|---------------------|----|------------|
| 1  | 淡黄褐色シルト質土           | 14 | 淡黄褐色シルト質土  |
| 2  | 褐灰色シルト質土            | 15 | 黒褐色シルト質土   |
| 3  | 黒褐色シルト質土            | 16 | オリブ褐色シルト質土 |
| 4  | 淡褐色シルト質土            | 17 | 褐色粘質土      |
| 5  | 褐色粘状シルト質土           | 18 | 黒褐色粘質土     |
| 6  | 褐色シルト質土             | 19 | 淡黄褐色粘質土    |
| 7  | 暗褐色シルト質土            | 20 | 暗褐色シルト質土   |
| 8a | 淡黄褐色シルト質土 (安山岩風化土多) |    |            |
| 8b | 淡黄褐色シルト質土 (少)       |    |            |
| 9  | 灰黄褐色シルト質土           |    |            |
| 10 | 淡褐色シルト質土            |    |            |
| 11 | 褐色シルト質土             |    |            |
| 12 | 暗褐色シルト質土            |    |            |
| 13 | 褐色シルト質土             |    |            |

図26 T1502遺構配置図及び西壁土層断面図 (1/80, アミは攪乱)



図27 1601区遺構配置図及び北壁土層断面図 (1/80, アミは攪乱)

台形を呈し、傾斜角度は約40°である。南側上端の検出面は地表下約1.4mと深い位置にあるため、南側の深さは約0.7mと北側に比べて浅い。調査区南端では重複したやや大型のピットを検出した。南側と北側の上端の検出面に大きな高低差があるが、これがSD19掘削当初からか、または本遺構の機能停止後に改変されたのか、埋土の状況や土層断面の観察からは明らかにすることができなかった。埋土から中世の土師質土器や瓦質土器などが出土した。

また、調査の過程で周辺地形を観察した結果、SD19検出地点の延長上で麓付近まで続く長さ約30m、幅約10mほどの堅堀状の遺構を確認した。このことは、本遺構が西岡台の丘陵裾部まで延びることを示しており、千疊敷北側と東側の帯曲輪群を分断するような状態で配置される大規模な堅堀跡であることが判明した。

#### SD20 (図26, 図版14)

SD19北側に平行する小規模な溝跡。幅約0.4m、底幅約0.2m、深さ約0.3mでSD19と同様に北東側に向かって傾斜する。断面は逆台形を呈する。調査範囲が限られているため機能は不明であるが、配置状況からSD19に付随する遺構とみられる。

#### SD18 (図27, 図版15・16)

千疊敷北側に位置し、南北に主軸をもつ堅堀跡。SD02の調査に伴い10次調査で初めて確認した。

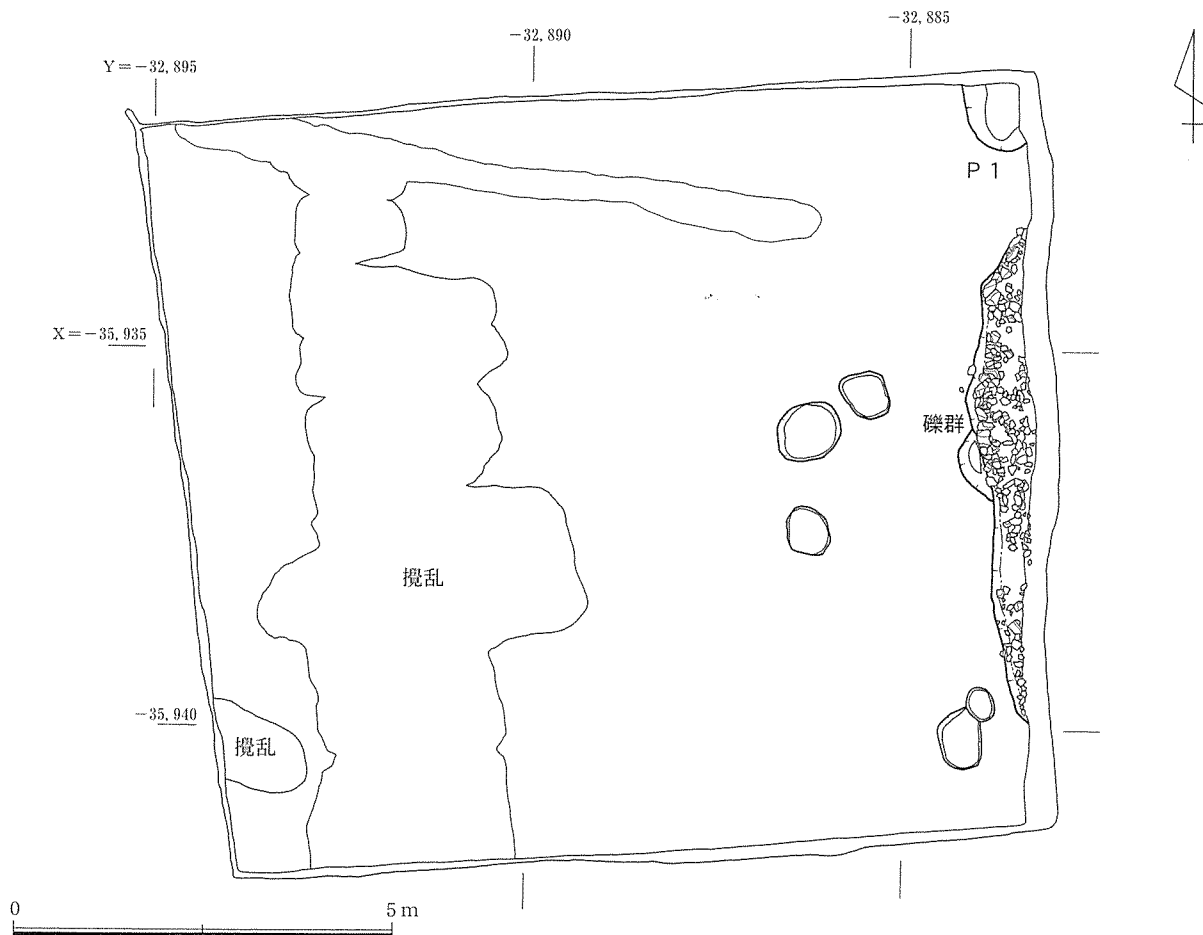


図28 1602区遺構配置図 (1/100)

1601区における検出規模は、長さ約4.4m、幅約3.3~5.8m、底幅約2.2m、深さ約1.1m。断面逆台形の箱堀状を呈し、傾斜角度は約40°である。底面は南から北に向けて緩やかに下降している。

遺構の形状や土層断面確認のため埋土を掘り下げたところ、埋土下層において拳大や人頭大の安山岩

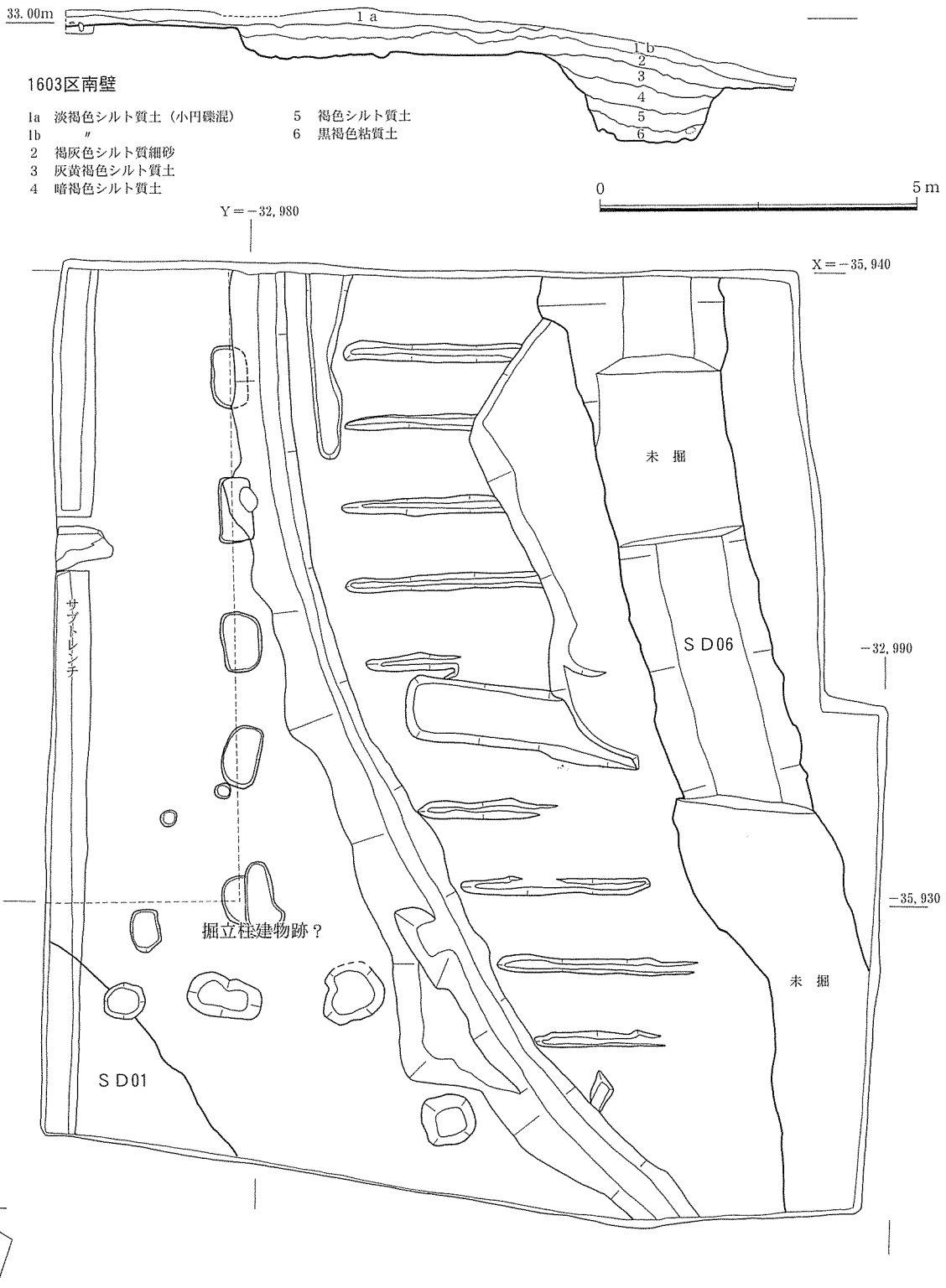


図29 1603区遺構配置図及び土層断面図 (1/100)

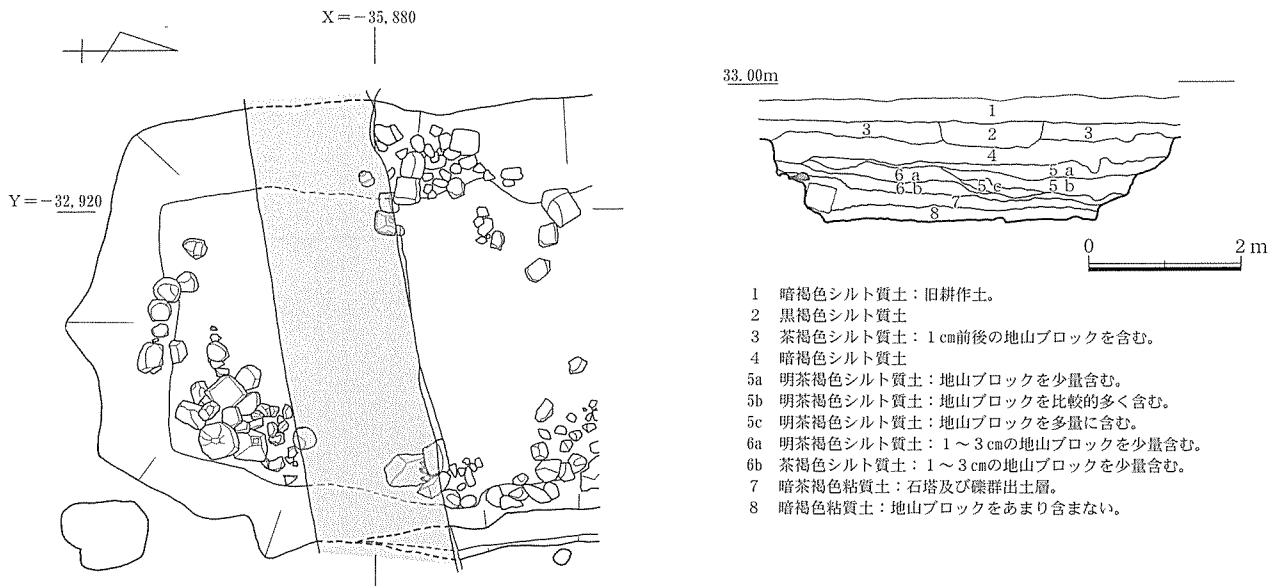


図30 千畳敷虎口北側SD02平面及び土層断面図(1/100)

の礫が多量に出土した。本遺構における過去の調査でも同様の出土状態を示す安山岩礫を確認しており、SD18の機能停止に伴い意図的に投棄された可能性を指摘できる。埋土から中世の土師質土器、瓦質土器、青磁、染付が出土した。

なお、本遺構の西側に隣接して幅約0.2～0.3mの溝跡SD21が位置する。機能は不明であるが、SD18と並行することからSD18に付随する遺構の可能性はある。

#### SD06 (図29, 図版18～20)

1次調査で初めて確認した横堀跡であり、配置状況から千畳敷の外堀として機能していたとみられる。1603区における検出規模は、長さ約15.4m、幅約1.6～2.9m、底幅約0.9～1.1m、深さ1.2m。断面は逆台形を呈し、壁面の傾斜角度は約55°～65°である。南北方向に主軸をもち、南側に向かってゆるやかに下降する。埋土から中世の土師質土器、瓦質土器、染付が出土した。

### 第3節 出土遺物

#### SD19 (図31, 図版21)

1は古墳時代前期の土師器高坏脚部片である。2～4は土師質土器。2・3は坏で、器面調整は磨耗のため不明である。4は鉢の口縁部片で、口径や形態から播鉢の可能性はある。

#### SD18 (図31, 図版21)

5は瓦質土器の火鉢で、口縁部にスタンプ文を施す。

#### 1602区P1 (図31)

6は瓦質土器の甕で、磨耗のため不鮮明であるが、器面調整は内外面ともナデとみられる。

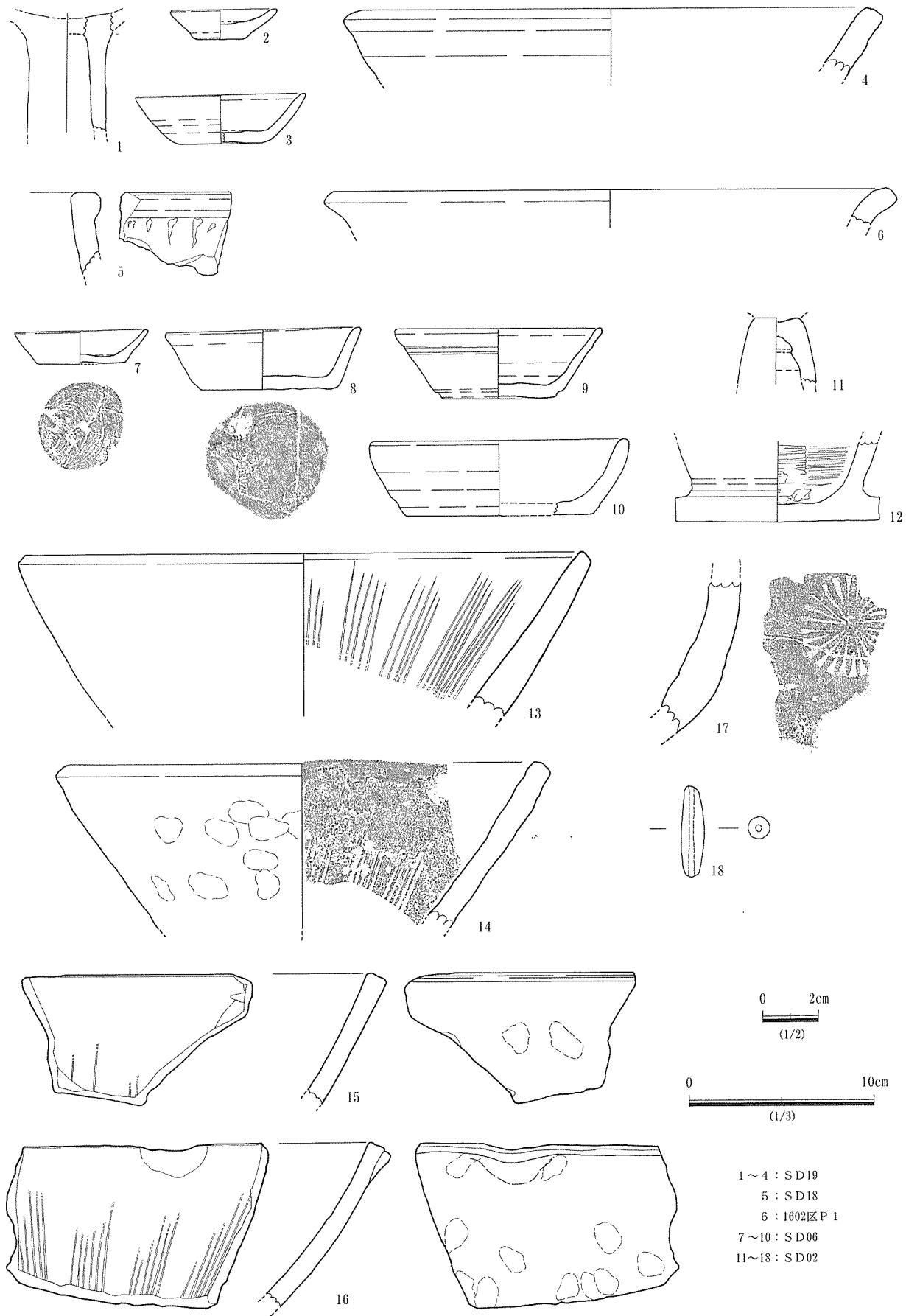


図31 SD19・SD18・1602区P 1・SD06・SD02出土遺物 (18は1/2, その他は1/3)

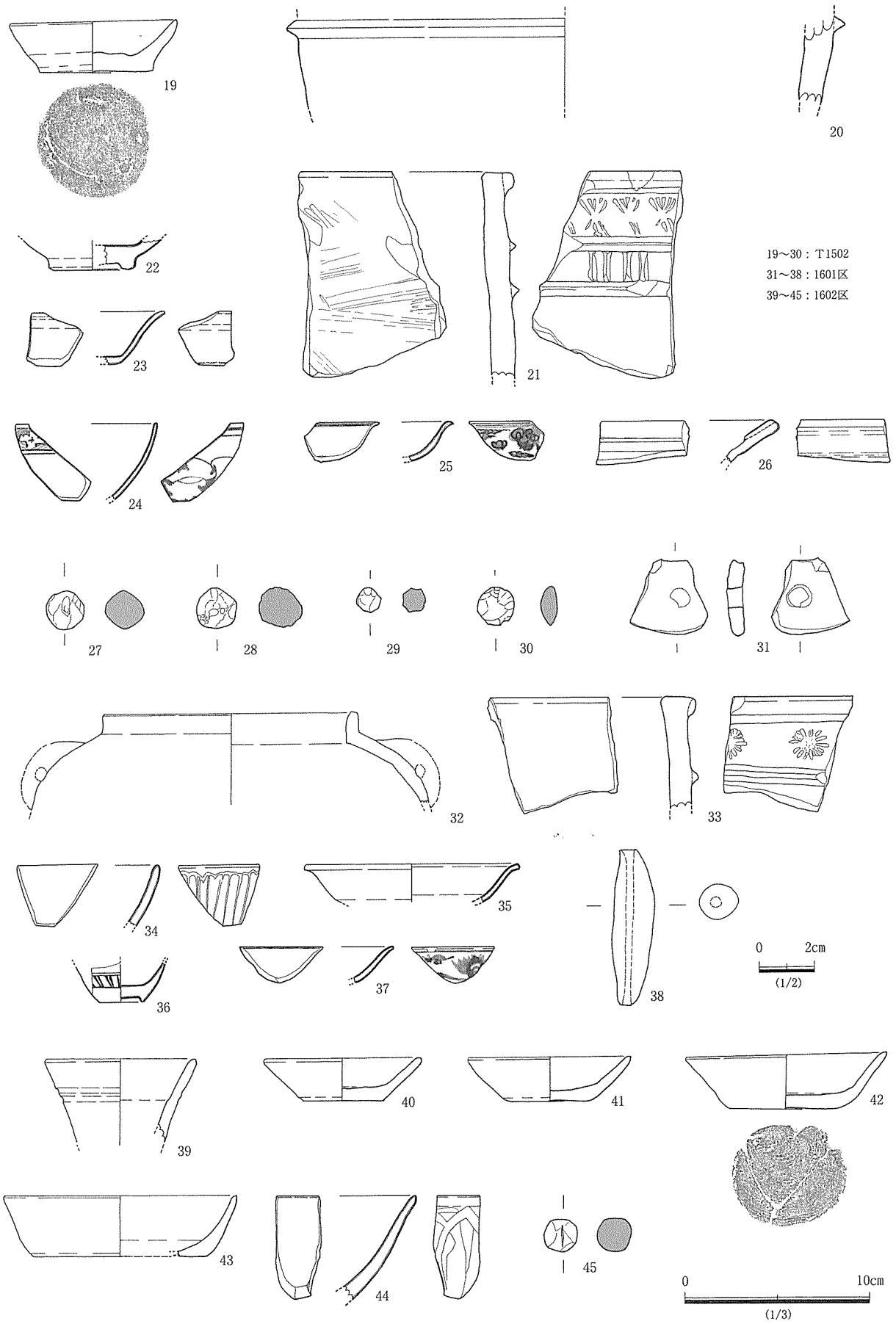


図32 T1502, 1601・1602区遺構外出土遺物 (27~31・38・45は1/2, その他は1/3)



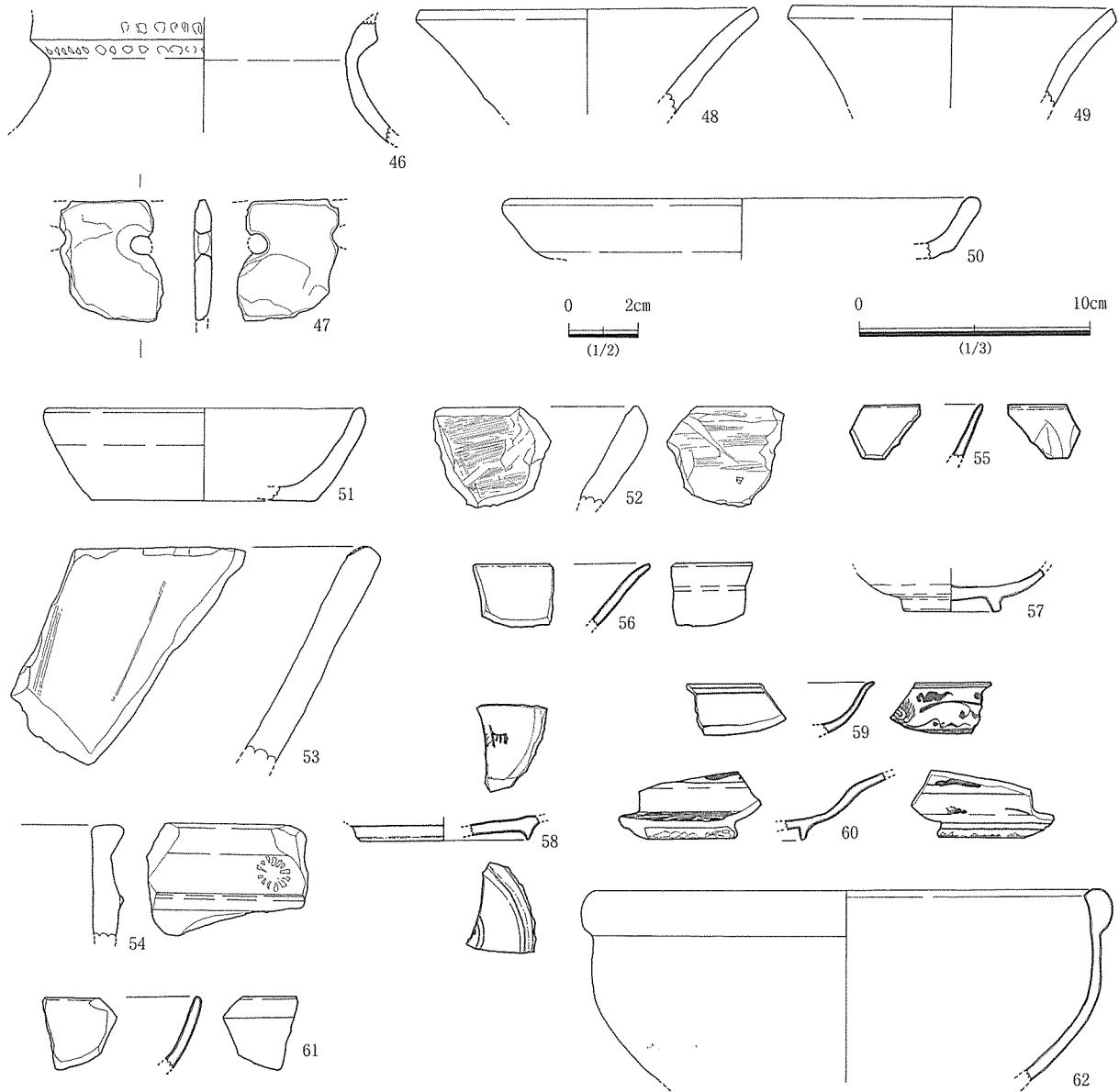


図33 1603区遺構外出土遺物 (47は1/2, 他は1/3)

SD06 (図31, 図版21)

7~10は土師質土器で, 7~9は坏, 10は皿である。7・8は内外面とも回転ナデ, 底部糸切り離しであり, 7は底部に1ヶ所穿孔がある。10は内外面ともナデを施す。

SD02 (図31, 図版21)

11は古墳時代前期の土師器高坏脚部片である。12は須恵器の台付瓶で, 台部は円盤状を呈する。13~16は瓦質土器の播鉢である。17は土師質土器の火鉢で, 外面に菊花文のスタンプを施す。18は土錘で, 細長い形状を呈し, 両端部はすばまる。中央部が最も太く最大径0.9cmを測り, 重量は1.6gである。

T1502遺構外出土遺物 (図32, 図版21・22)

19・20は土師質土器で, 19は坏, 20は火鉢である。19は底部糸切り離し, 20は胴部に細い突帯を施す。

21は瓦質土器の火鉢で、口縁部外面に突帯を貼り付け、突帯間にX字状文様のスタンプとその下部に押圧による縦意の沈線を施す。22は13世紀前半～14世紀前半の龍泉窯系の青磁碗である。23は13～14世紀前半の中国製白磁の皿で、口縁端部は釉を剥ぎ取る。24・25は景德鎮窯系の染付。24は16世紀後半～17世紀初頭の碗で、外面に唐草文を施す。25は16世紀後半の皿で、口縁部が外反する。26は17世紀第2四半期～第3四半期の肥前系播鉢で、口縁部に鉄釉を施す。27～30は鉄砲玉とみられる鉛玉。27・28は直径1.4cm、重量は27が12.4g、28が14.5gとほぼ同じ大きさであるが、29は直径0.9cm、重量2.7gと小型で未成品の可能性はある。

#### 1601区遺構外出土遺物 (図32, 図版22)

31は穿孔がある土製品、32は土師質土器の耳付壺である。33は瓦質土器の火鉢で、口縁部外面に菊花文のスタンプを施す。34は15世紀中頃～16世紀初頭の龍泉窯系青磁碗で、外面に剣先蓮弁文を施文する。35は16世紀代の景德鎮窯系白磁皿で口縁部が外反する。36・37は景德鎮窯系の染付。36は16世紀代の小杯、37は16世紀前半～中頃の皿である。38は土錘で、細長い形状を呈し、両端部はすぼまる。中央部が最も太く最大径1.5cmを測り、重量は10.2gである。

#### 1602区遺構外出土遺物 (図32, 図版22)

39は古墳時代後期の須恵器長頸壺で頸部以下を欠損する。40～43は土師質土器で、43が皿、それ以外は坏である。磨耗のため器面調整が不明な41・43以外は、内外面とも回転ナデで底部は糸切り離してである。44は13世紀～14世紀前半の龍泉窯系青磁で、外面は片切彫による鎬蓮弁文を施文する。45は鉄砲玉とみられる鉛玉で、直径1.2cm、重量は9.4gである。

#### 1603区遺構外出土遺物 (図33, 図版22)

46は弥生土器の壺で、口縁端部と胴部を欠損する。外面に刺突による列点文を施す。47は石包丁で、両端部を欠損しており、2ヶ所の穿孔がある。48・49は古墳時代前期とみられる土師器の壺の口縁部である。50・51は土師質土器の皿。52～54は瓦質土器で、52は捏鉢、53は播鉢、54は火鉢である。54の口縁部外面には菊花文のスタンプを施す。55は13世紀～14世紀前半の龍泉窯系青磁碗で、外面に片切彫による鎬蓮弁文を施文する。56・57は白磁である。56は13世紀～14世紀前半の中国製、57は1820～60年代の肥前系の碗である。58～60は景德鎮窯系染付皿。58は16世紀末～17世紀前半のもので、見込みに「長」の銘があるが、おそらく「長命富貴」の「長」の部分とみられる。59は16世紀前半～中頃、60は16世紀後半～17世紀前半のものである。61は1580～1610年代の肥前系灰釉陶器、62は19世紀代の玉縁口縁をもつ関西系の鉢である。

表5 16次調査出土遺物観察表 (カッコ内の数字は復元値を示す)

SD19

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整 (内面/外面)	調査 地点	層位	口径	法 量 (cm) 器高 底径	備 考
1	16-30	土師器・高坏	角閃石, 1~2mmの砂粒	やや不良	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1502	上層	-	残6.4	-
2	16-28	土師質土器・坏	1~2mm程の砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1502	下層	(5.7)	1.6	2.8
3	16-26	土師質土器・坏	1mm以下の砂粒	やや不良	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1502	下層	(9.2)	2.6	4.6
4	16-55	土師質土器・鉢	角閃石, 1mm程の砂粒	良好	褐灰/灰白	ヨコナデ/ヨコナデ	T1502	埋土	(29.2)	残3.8	-

SD18

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整 (内面/外面)	調査 地点	層位	口径	法 量 (cm) 器高 底径	備 考
5	16-36	瓦質土器・火鉢	角閃石, 長石, 1mm程の砂粒	良好	暗灰, 黒/暗灰, 黒	磨耗のため不明/磨耗のため不明	1601区	4	-	残4.5	- スタンプ文

1601区 P 1

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整 (内面/外面)	調査 地点	層位	口径	法 量 (cm) 器高 底径	備 考
6	16-39	瓦質土器・甕	1mm程の砂粒	やや不良	灰白/灰白, 暗灰	ナデ?/ナデ?	1602区	埋土	(31.0)	残2.0	-

SD06

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整 (内面/外面)	調査 地点	層位	口径	法 量 (cm) 器高 底径	備 考
7	16-22	土師質土器・坏	1~2mm程の砂粒	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ, 底部糸切り離し	1603区	5	7.1	1.8	4.8 底部穿孔 (1ヶ所)
8	16-23	土師質土器・坏	1mm程の砂粒	良好	浅黄橙/浅黄橙	回転ナデ/回転ナデ, 底部糸切り離し	1603区	3	10.6	3.3	7.3 底部に指頭押庄痕
9	16-19	土師質土器・坏	角閃石, 1~2mm程の砂粒	良好	浅黄橙/浅黄橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	1603区	4	11.2	3.7	6.2
10	16-27	土師質土器・皿	角閃石, 長石, 1~3mm程の砂粒	良好	橙/橙	ナデ/ナデ	1603区	4	(14.1)	4.1	(10.2)

SD02

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整 (内面/外面)	調査 地点	層位	口径	法 量 (cm) 器高 底径	備 考
11	16-29	土師器・高坏	角閃石, 1~2mm程の砂粒	良好	橙/橙	ナデ/磨耗のため不明	6区	7	-	残3.5	-
12	16-52	須恵器・台付瓶	石英, 1mm程の砂粒	良好	青灰/青灰	ハケメ/ヨコナデ, ナデ	6区	7	-	残4.4	11.0
13	16-49	瓦質土器・播鉢	角閃石, 1~2mm程の砂粒	良好	淡黄/淡黄	ヨコナデ, 播目/ヨコナデ	6区	7	(31.0)	残8.8	-
14	16-57	瓦質土器・播鉢	角閃石, 1~2mm程の砂粒	良好	灰白/灰白	ナデ, 播目/ナデ	6区	4	(26.7)	残8.9	-
15	16-50	瓦質土器・播鉢	角閃石, 1~3mm程の砂粒	良好	灰白/灰白	播目/ヨビオサエ, ヨコナデ	6区	4	-	残7.0	-
16	16-51	瓦質土器・播鉢	角閃石, 1~2mm程の砂粒	良好	灰白/灰白	ナデ, 播目/ヨビオサエ, ナデ	6区	4	-	残8.8	-
17	16-58	土師質土器・火鉢	角閃石, 1~3mm程の砂粒	良好	淡黄/淡黄	ナデ/ナデ, 施文	6区	7	-	残8.2	- 菊花文のスタンプ
18	16-43	土釜	1mm以下の砂粒	良好	浅黄橙, 橙	全体的に磨耗	6区	4	-	-	- 長さ1.9cm, 最大径0.9cm, 重さ1.6g

T1502遺構外出土遺物(土器)

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	口径	法量 器高	底径	備考
19	16-21	土師質土器・坏	角閃石, 1mm程の砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/回転ナデ, 底部糸切り離し	T1502	-	9.0	2.8	6.1	
20	16-56	土師質土器・火鉢	角閃石, 1mm程の砂粒	良好	浅黄/浅黄	磨耗のため不明/磨耗のため不明	T1502	-	-	残4.9	-	
21	16-48	瓦質土器・火鉢	角閃石, 1~2mm程の砂粒	良好	浅黄/浅黄	ケズリ, ナデ, ヨコナデ, ヨコナデ, ナデ, 施文	T1502	-	-	残11.3	-	スタンプ文

T1502遺構外出土遺物(陶磁器)

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	口径	法量 器高	底径	備考
22	16-2	青磁・碗	緻密	良好	明緑灰/灰白	施釉/ロクロケズリ, 施文, 施釉	T1502	-	-	残1.6	4.7	龍泉窯系
23	16-15	白磁・皿	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/施釉	T1502	-	-	残2.9	-	中国製, 口縁端部釉剥ぎ
24	16-4	染付・碗	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1502	-	-	残4.2	-	景德鎮窯系
25	16-3	染付・皿	緻密	良好	明青灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1502	-	-	残2.2	-	景德鎮窯系
26	16-17	施釉陶器・搦鉢	緻密	良好	黒褐/黒褐	ナデ, 施釉/ナデ, 施釉	T1502	-	-	残2.3	-	肥前系

T1502遺構外出土遺物(その他)

挿図 番号	実測 番号	種類	素材	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	法量 口径	重量	備考
27	16-59	鉄砲玉	鉛		灰白		T1502	-	1.4	12.4	
28	16-60	鉄砲玉	鉛		灰白		T1502	-	1.4	14.5	
29	16-61	鉄砲玉	鉛		灰白		T1502	-	0.9	2.7	
30	16-63	鉄砲玉	鉛		灰白		T1502	-	1.3	5.1	

1601区遺構外出土遺物(土器・土製品)

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	口径	法量 器高	底径	備考
31	16-31	穿孔土製品	角閃石, 1mm程度の砂粒	良好	にぶい橙	磨耗のため不明	1601区	-	-	-	-	最大残存長4.1cm, 厚さ0.9mm
32	16-38	土師質土器・耳付壺	角閃石, 1mm程度の砂粒	良好	橙/橙	ケズリ, ナデ/ナデ	1601区	-	(13.8)	残5.0	-	
33	16-47	瓦質土器・火鉢	角閃石, 1mm以下の砂粒	良好	灰/灰	ヨコナデ, ナデ/ヨコナデ, 施文	1601区	-	-	残6.2	-	菊花文のスタンプ

1601区遺構外出土遺物(陶磁器)

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	口径	法量 器高	底径	備考
34	16-6	青磁・碗	緻密	良好	明緑灰/灰白	施釉/施文, 施釉	1601区	-	-	残3.3	-	龍泉窯系
35	16-7	白磁・皿	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/施釉	1601区	-	(11.6)	残2.1	-	景德鎮窯系
36	16-1	染付・小杯	緻密	良好	明緑灰/灰白	施釉/施文, 施釉	1601区	-	-	残2.1	2.4	景德鎮窯系
37	16-5	染付・皿	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	1601区	-	-	残2.0	-	景德鎮窯系

1601区遺構外出土遺物(土製品)

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	法量 (cm, g)	備考
									最大幅 長さ 重量	
38	16-42	土錘	角閃石, 1mm程度の砂粒	良好	暗灰, 黒	ナデ(全体的に磨耗)	1601区	-	1.5 5.7 10.2	

1602区遺構外出土遺物(土器)

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	法量 (cm)	備考
									口径 器高 底径	
39	16-45	須恵器・長頸壺	1mm以下の砂粒	良好	灰/暗灰	ヨコナデ/ヨコナデ, ナデ	1602区	-	(8.2) 残4.6 -	
40	16-24-2	土師質土器・坏	角閃石, 1mm程の砂粒	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ, 底部糸切り離し	1602区	-	(8.6) 2.3 4.3	
41	16-25-2	土師質土器・坏	角閃石, 1mm程の砂粒	良好	橙/橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	1602区	-	(8.8) 2.4 4.2	
42	16-20	土師質土器・坏	角閃石, 1~2mm程の砂粒	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ, 底部糸切り離し	1602区	-	10.8 3.1 6.0	
43	16-25-1	土師質土器・皿	角閃石, 1~2mm程の砂粒	良好	明黄褐/明黄褐	磨耗のため不明/磨耗のため不明	1602区	-	(12.6) 残3.3 (9.2)	

1602区遺構外出土遺物(陶磁器)

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	法量 (cm)	備考
									口径 器高 底径	
44	16-8	青磁・碗	緻密	良好	オリーブ灰/灰白	施釉/施文, 施釉	1602区	-	残5.6 -	龍泉窯系

1602区遺構外出土遺物(その他)

挿図 番号	実測 番号	種類	素材	色調	調査 地点	層位	法量 (cm, g)	備考
							直径 重量	
45	16-64	鉄砲玉	鉛	灰白	1602区	-	1.2 9.4	

1603区遺構外出土遺物(土器・石器)

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	法量 (cm)	備考
									口径 器高 底径	
46	16-46	弥生土器・壺	角閃石, 長石, 石英, 1~2mm程の砂粒	良好	明黄褐/明黄褐	磨耗のため不明/磨耗のため不明	1603区	-	残5.3 -	
47	16-41	石包丁	片岩系	-	淡灰	-	1603区	-	- -	幅3.5cm, 厚さ0.5cm, 重量8.5g
48	16-34	土師器・壺	角閃石, 長石, 1~3mm程の砂粒	良好	にぶい黄橙/にぶい黄橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	1603区	-	(14.8) 残4.6 -	
49	16-33	土師器・壺	1~3mm程の砂粒	良好	明褐/明褐	磨耗のため不明/磨耗のため不明	1603区	-	(14.3) 残4.4 -	
50	16-32	土師質土器・皿	角閃石, 1~2mm程の砂粒	良好	浅黄橙/浅黄橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	1603区	-	(20.7) 残2.7 (16.9)	
51	16-24-1	土師質土器・皿	角閃石, 石英, 1~2mm程の砂粒	良好	にぶい橙/にぶい橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	1603区	-	(13.9) 4.0 (9.6)	
52	16-40	瓦質土器・握鉢	1mm程の砂粒	良好	黄褐/黄灰	ハケス/ナデ	1603区	-	残4.2 -	
53	16-54	瓦質土器・播鉢	角閃石, 石英, 1~2mm程の砂粒	やや不良	橙/にぶい黄橙	播目/磨耗のため不明	1603区	-	残9.3 -	
54	16-37	瓦質土器・火鉢	角閃石, 長石, 1mm程の砂粒	良好	灰白/灰白	磨耗のため不明/ヨコナデ, 施文	1603区	-	残4.8 -	菊花文のスタンプ

1603区遺構外出土遺物(陶磁器)

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	口径	法 量 (cm) 器高	底径	備 考
55	16-12	青磁・碗	緻密	良好	オリーブ灰/灰白	施釉/施文、施釉	1603区	-	-	残2.1	-	龍泉窯系
56	16-11	白磁・碗	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/施釉	1603区	-	-	残2.7	-	中国製、口縁部釉剥ぎ
57	16-16	白磁・碗	緻密	良好	明オリーブ灰/灰白	施釉/ロクログズリ、施釉	1603区	-	-	残1.8 (4.5)	-	肥前系、蛇の目釉剥ぎ、
58	16-13	染付・皿	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文、施釉/施文、施釉	1603区	-	-	残1.0	7.5	景徳窯系、見みに長の氣(長命富貴か)
59	16-9	染付・皿	緻密	良好	灰白/灰白	施文、施釉/施文、施釉	1603区	-	-	残2.2	-	景徳鎮窯系
60	16-14	染付・皿	緻密	良好	明緑灰/灰	施文、施釉/施文、施釉	1603区	-	-	残2.8	-	景徳鎮窯系
61	16-10	灰軸陶器・碗	緻密	良好	灰オリーブ、暗オリーブ/灰	施釉/施釉	1603区	-	-	残3.1	-	肥前系
62	16-18	施釉陶器・鉢	緻密	良好	浅黄、黄灰/こぶい黄澄	回転ナデ、施釉/回転ナデ、施釉	1603区	-	(22.0)	残8.3	-	関西系



## 第5章 平成16年度(第17次)発掘調査

### 第1節 調査の概要

#### (1) 調査の概要 (図34)

第17次調査は、千畳敷北西側の帯曲輪に1701区と1702区の2つの調査区を設けて、平成16(2004)年6月から同年8月までの期間で実施した。また、保存整備工事に伴い、園路施工範囲にあたる千畳敷南側の切岸状地形を呈する地点において1703区を設定、平成17年(2005)年2月から3月にかけて発掘調査を実施した。調査面積は、1701区：約59㎡、1702区：約57㎡、1703区：約24㎡の計140㎡である。

千畳敷周辺の発掘調査における大きな成果として、現況地形の観察では明確ではなかった竪堀跡の存在が、10次調査以降、次々に判明したことがあげられる。また、これら発掘調査で検出した竪堀跡の延長上を詳細に観察すると、廃絶後に完全には埋没しきれず、斜面が崩落したようにえぐれた地形を呈する地点が数ヶ所で確認できることがわかった。

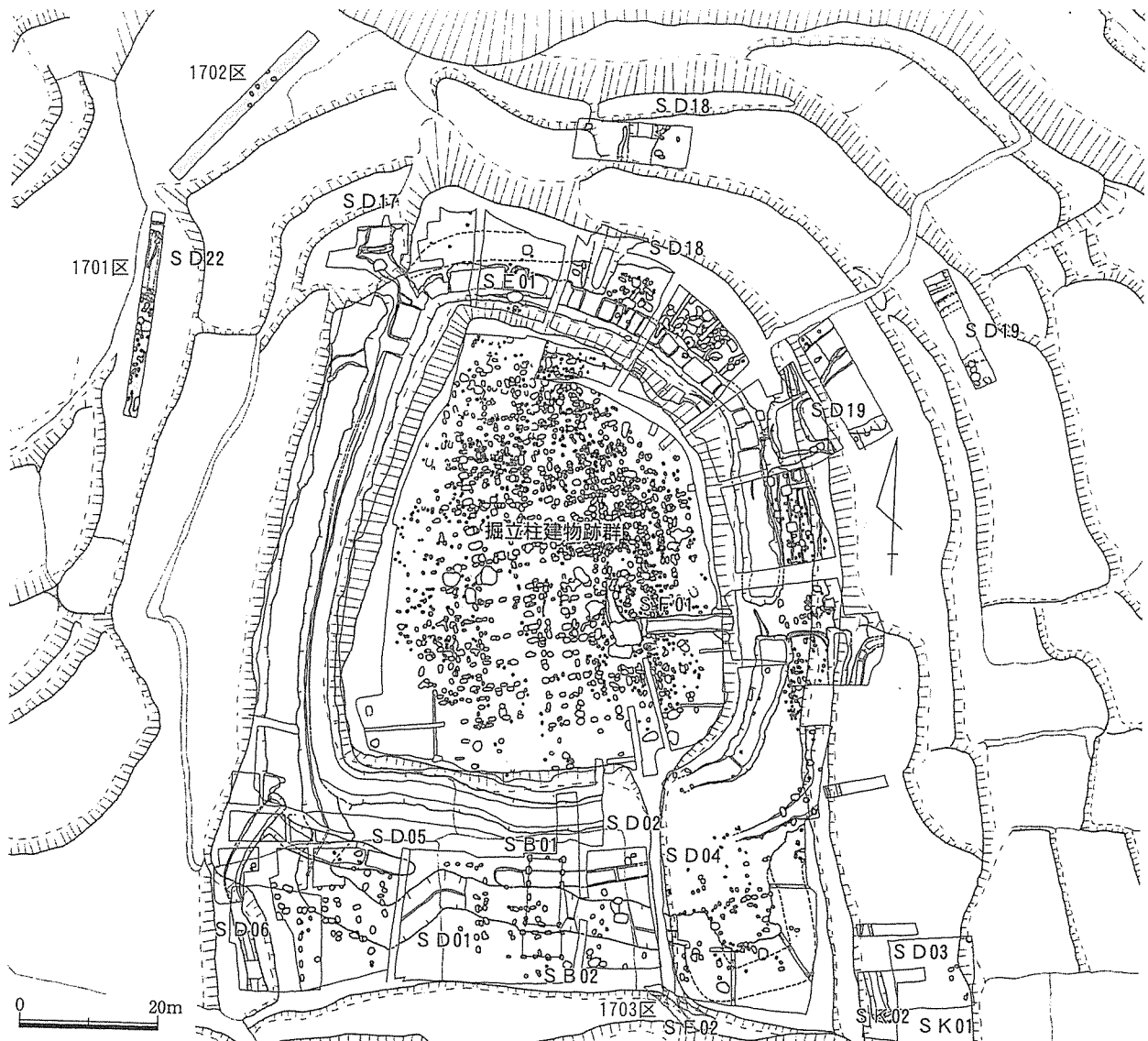


図34 17次調査区配置図 (1/1,000, アミ部分：17次調査地)



以上の特徴を示す地形が、千畳敷北西側帯曲輪や切岸において観察できることから、竪堀跡の有無を確認するため、1701・1702区を設定し、調査を実施した。その結果、1701区において大規模な竪堀跡SD22を検出したことから、千畳敷北西側にも竪堀跡が存在することが明らかとなった。また、1702区では、竪堀跡は検出されず、重機による削平が調査区の大半で確認された。この削平が影響したためか、検出したピットは1701区と比べて散在的だった。

1703区の調査では、道路状遺構SF02を検出した。出土遺物から本遺構の時期を特定することはできなかったが、昭和49（1974）年作成の地形図にも同地点において千畳敷方面へ延びる道が表現されており（図5）、この頃までは道として利用されていたと推定される。

以上の調査で検出した遺構の埋土や遺構外から、古墳時代の土師器や中世の土師質土器、瓦質土器、中国製の白磁や青磁、染付、埴塼などが出土した。

## （2）調査日誌抄

平成16(2004)年		図的に埋められたような状況を確認。
6月29日	調査区除草作業。調査前状況写真撮影。	12日 SD22底面確認のためサブレンチを設定。
30日	1701区、1702区表土除去開始。	24日 SD22西側下層でスロープ状を呈する突出部を検出。
7月5日	1701区遺物包含層掘り下げ。	25日 1701・1702区調査状況写真撮影。
12日	1701区で竪堀跡SD22を検出。	平成17(2005)年
14日	1701区の遺構検出作業終了。1702区調査開始。	1月25日 1703区設定、表土掘り下げ。調査前状況写真撮影。
28日	1701・1702区遺構検出状況写真撮影。	2月3日 1703区で道路状遺構SF02を検出。
29日	SD22埋土掘り下げ開始。	14日 1703区遺構実測、調査状況写真撮影。
8月2日	SD22上層で多量の地山掘削土を検出。意	

## 第2節 検出遺構

### SD22（図35～36・38，図版24～26）

北西－南東方向に主軸をもつ竪堀跡である。検出規模は幅約11.1m、底幅約6.8m、深さ約2.0m。壁面の傾斜角度が約50°の断面逆台形を呈する。底面は麓側に向けて緩やかに下降している。

本遺構の北側壁面より南側へ傾斜するスロープ状の突出部を検出した。その機能は不明であるが、千畳敷を圍繞する横堀跡SD02の未完成区間においても同様の突出部が確認されている。また、埋土下層において拳大や人頭大の安山岩塊石が集中する部分があり、その状況から判断して意図的な投げ込みとみられる。前章で報告したように、竪堀跡SD18においても同様の安山岩塊石の投げ込みを確認している。

本遺構は、以前の調査で検出した竪堀跡SD19やSD18などと同様に、千畳敷を中心に同心円状に巡る帯曲輪群を分断するように配置されている。SD22の延長上には、連続する崩落状地形が丘陵斜面から裾部付近までの約60mにわたって観察できることから、SD19と同程度の大規模な竪堀跡と推定される。

また、本遺構の周辺で大小のピットを検出した。これらと竪堀跡の関係は不明であるが、柵列や掘立柱建物跡が存在した可能性がある。埋土から古墳時代の土師器、中世の土師質土器、瓦質土器、青磁、白磁、染付、埴塼などが出土した。

### SF02（図37，図版28・29）

南北方向に主軸をもつ道路状遺構である。限られた面積の調査であり、攪乱の可能性がある掘り込み

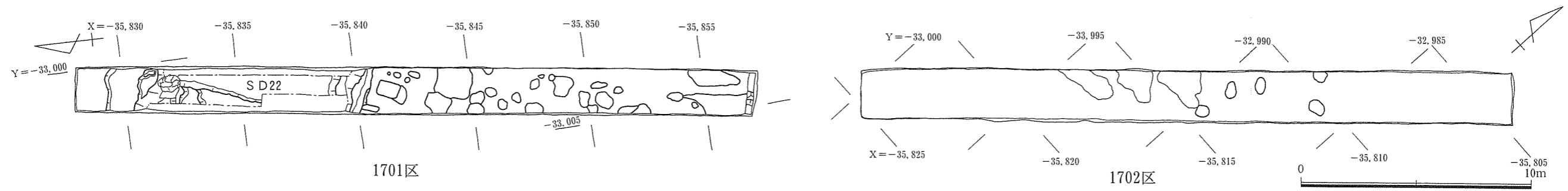


図35 1701・1702区遺構配置図 (1/200)

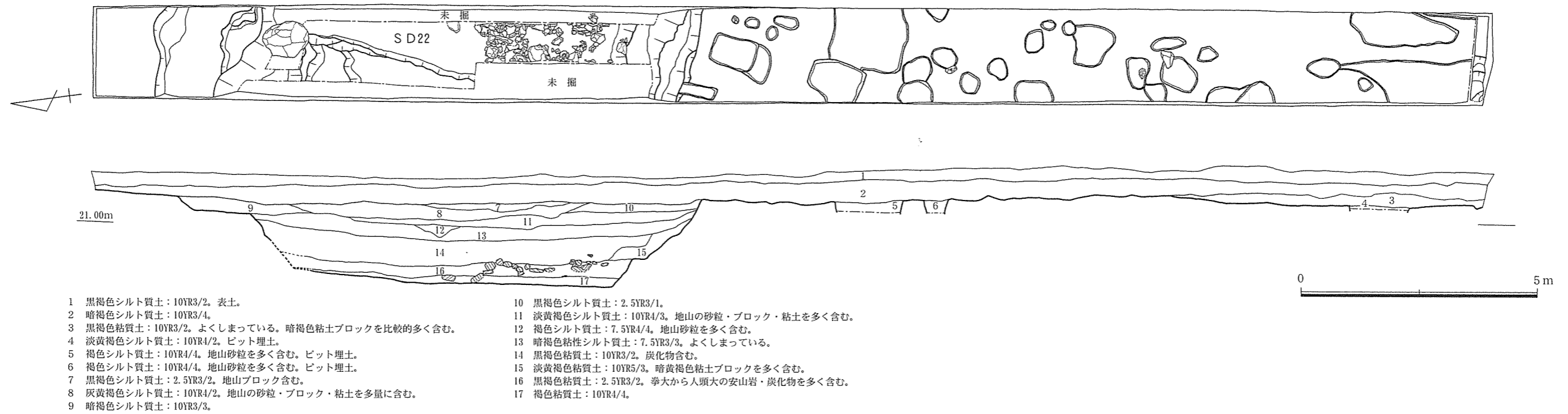


図36 1701区遺構配置図及び東壁土層断面図 (1/100)

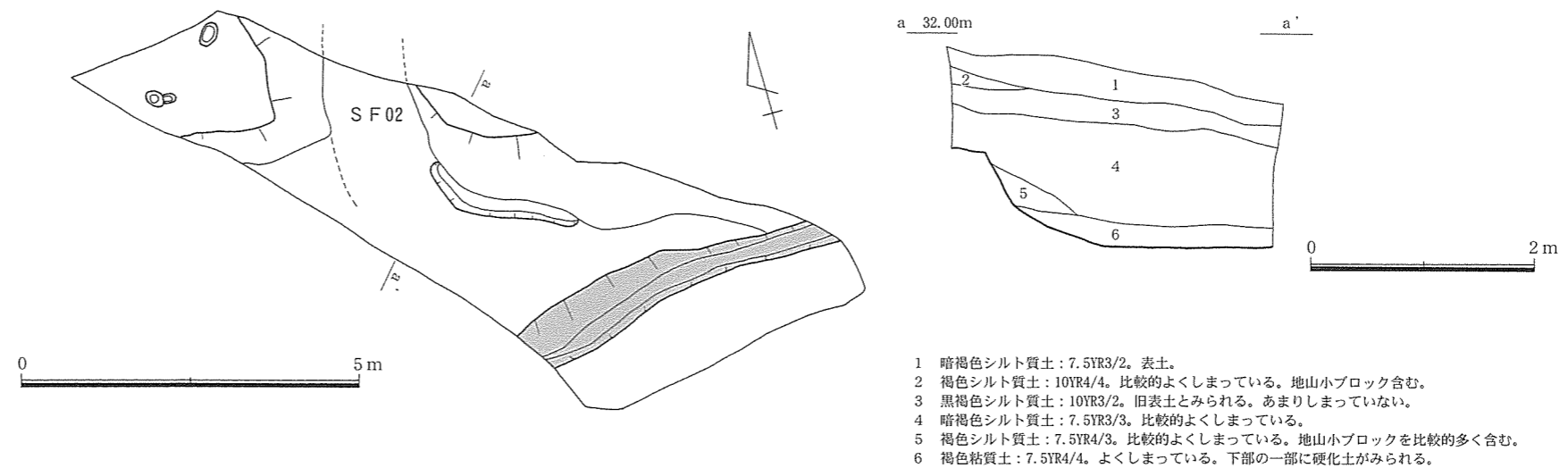


図37 1703区遺構配置図及び土層断面図 (配置図：1/100, 断面図：1/60, アミは攪乱)

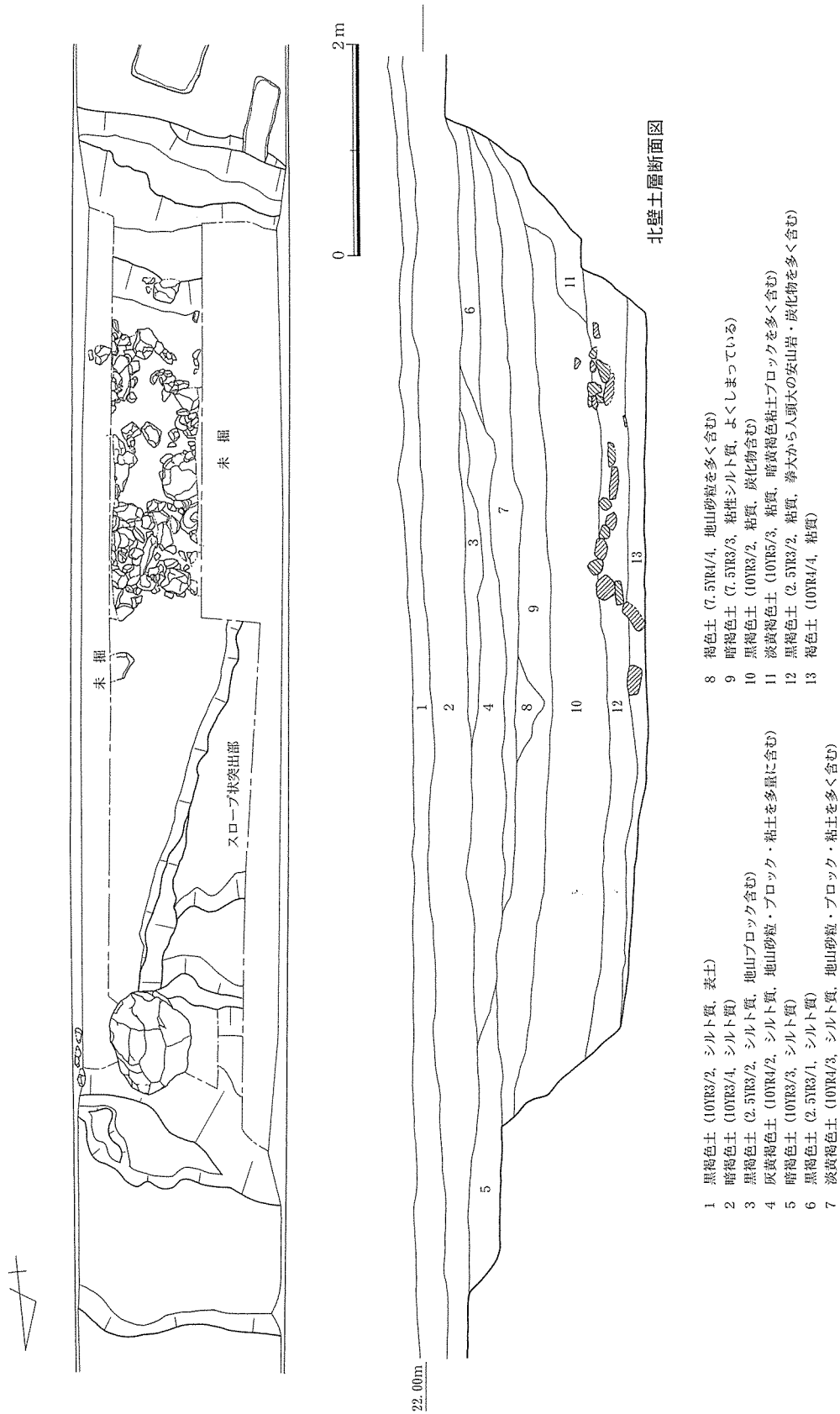


図38 S D 22平面図及び土層断面図 (1 / 60)

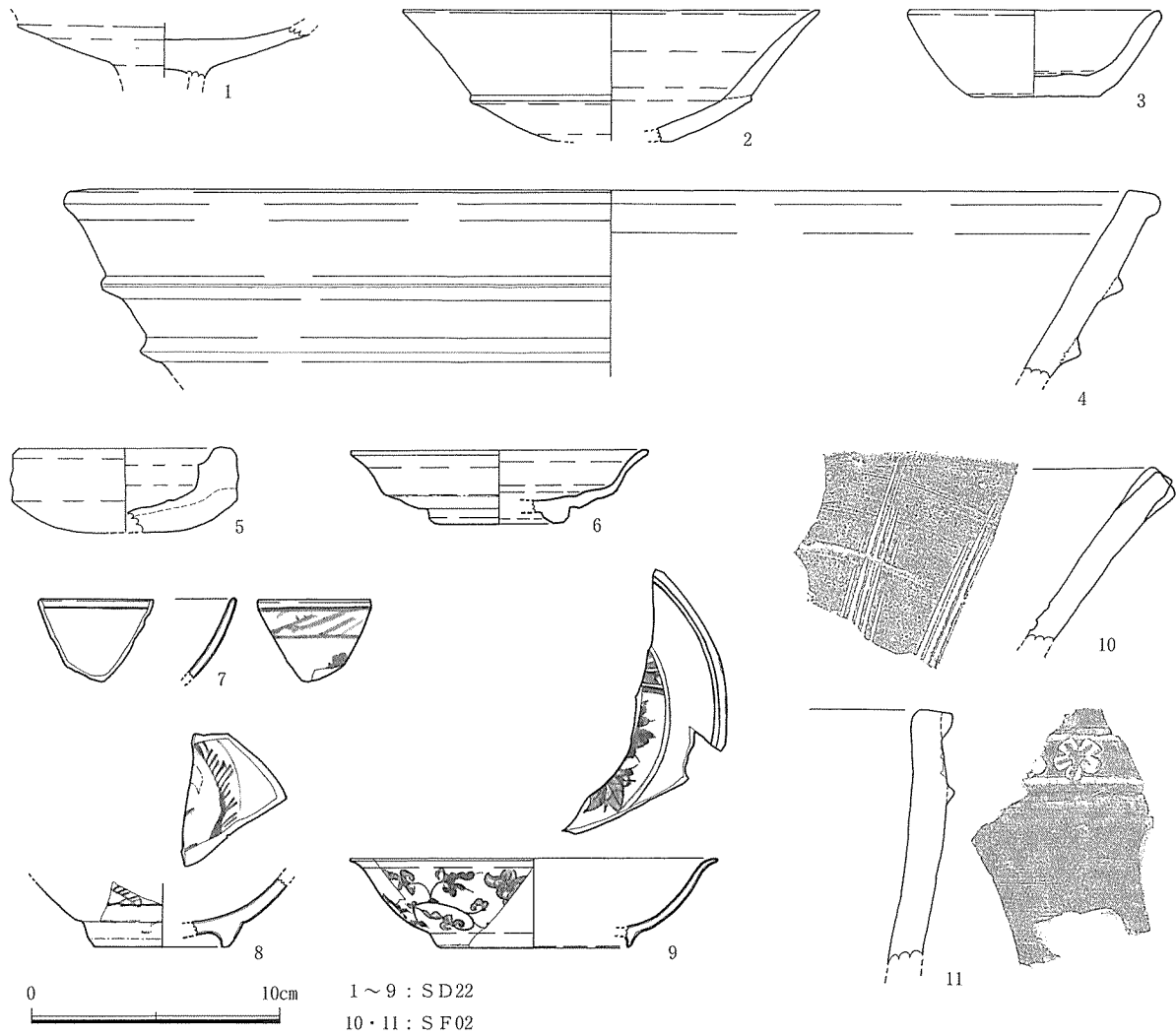


図39 SD22・SF02出土遺物 (1/3)

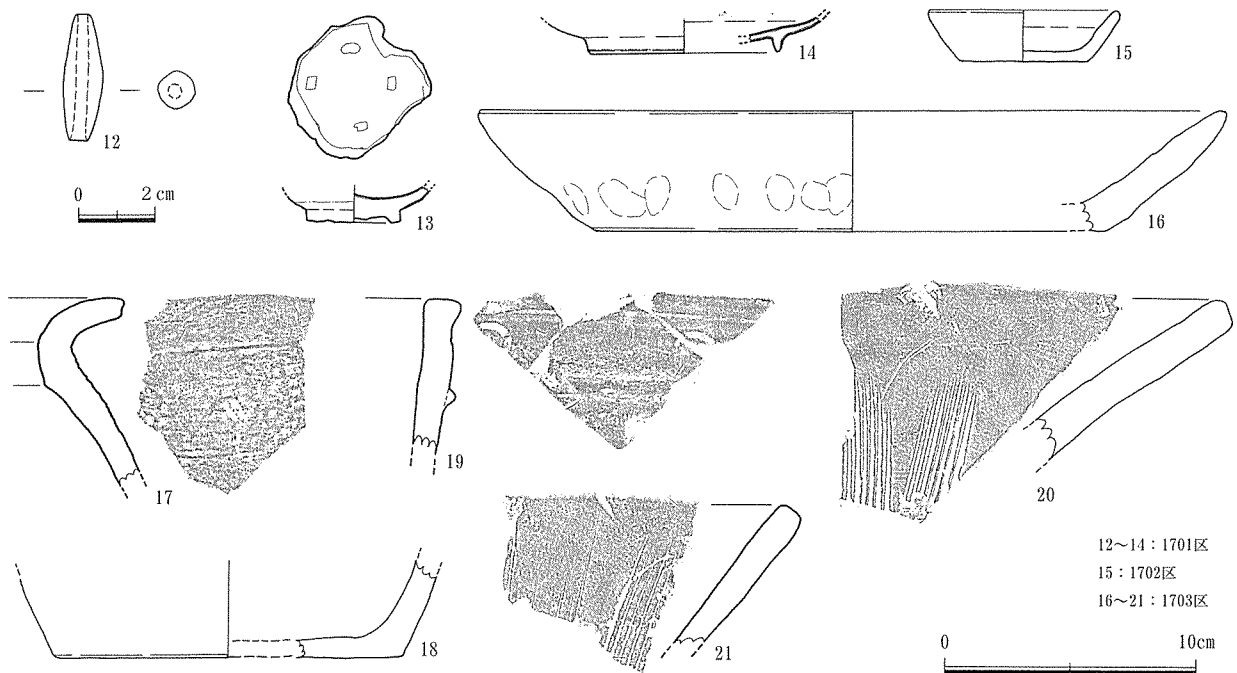


図40 1701~1703区遺構外出土遺物 (12は1/2, その他は1/3)

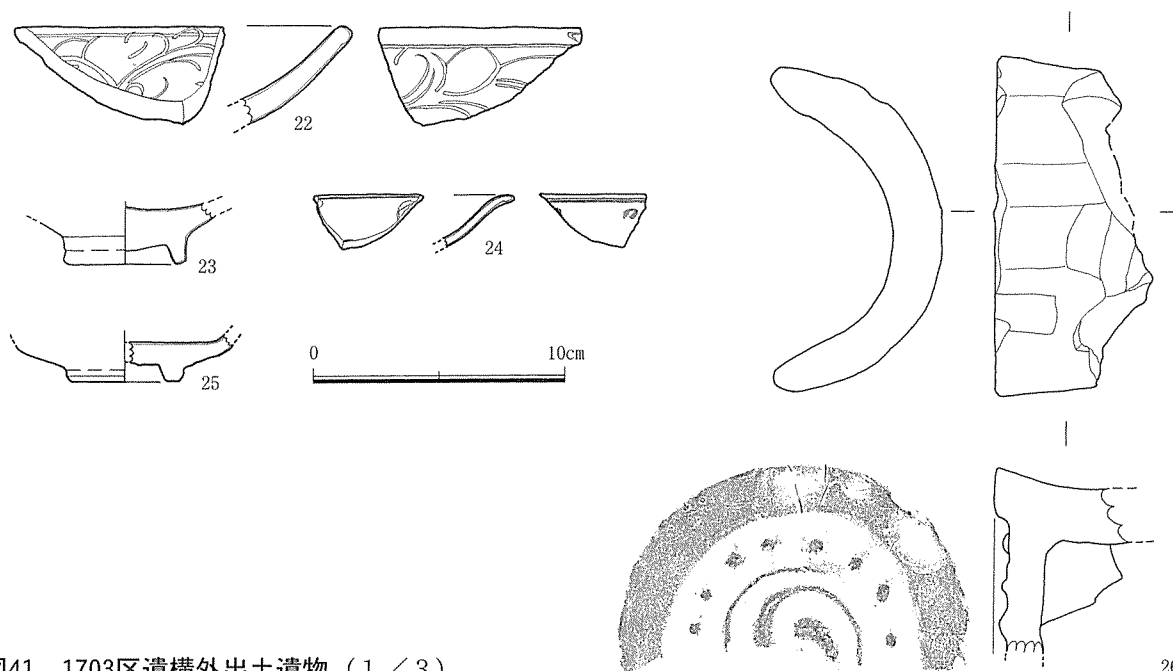


図41 1703区遺構外出土遺物 (1 / 3)

などから規模を明確にし難いが、検出規模は幅約2.2m、底幅約1.2mである。調査区北側では切り通し状を呈し、北側の千疊敷方向に向かって緩やかに上昇している。埋土下層の一部で硬化面を確認したことから、道として機能していたとみられる。

上述のとおり、昭和49(1974)年作成の地形図にも同地点において千疊敷方面へ延びる道が表現されており(図5)、この頃までは道として利用されていたと推定される。埋土から瓦質土器が出土した。

### 第3節 出土遺物

#### S D 22 (図39, 図版30)

1・2は古墳時代前期の土師器高坏である。3は土師質土器の坏で、器面調整は内外面とも回転ナデで、底部糸切り離しである。4は土師質土器の火鉢で、浅鉢形を呈する。外面の突帯の一部が剥落しており、その部分では、突帯貼り付けに際して目印にしたとみられる沈線を確認できる。5は埴塼で、内外面に溶解物が付着している。6は15～16世紀の中国製青磁皿で、見込みに蛇の目釉剥ぎの痕跡が残る。7～9は染付。7は16世紀後半～17世紀前半の景德鎮窯系碗とみられるが、焼成はやや不良である。8は16世紀前半～中頃の景德鎮窯系の碗。9は16世紀後半の景德鎮窯系の皿で、外面に唐草文を施文する。

#### S F 02 (図39, 図版30)

10・11は瓦質土器で、10は挿鉢、11は火鉢である。11は口縁部外面に桜花文のスタンプを施す。

#### 1701区遺構外出土遺物 (図40, 図版30)

12は土錘で、細長い筒状を呈し、両端部がすぼまる。中央部が最も太く直径1.1cm、重さは3.0gである。13・14は白磁。13は中国製で、15～16世紀代の切高台の小皿。14は16世紀代の景德鎮窯系の皿である。

1702区遺構外出土遺物（図40，図版30）

15は土師質土器の坏。器面調整は内外面とも回転ナデを施し，底部は糸切り離しである。口縁部に油痕があり，灯明のために用いられたとみられる。

1703区遺構外出土遺物（図40・41，図版30）

16・17は土師質土器。16は浅鉢で，内面に炭化物が付着している。17は甕で，外面にタタキを施す。18～21は瓦質土器。18は深鉢。19は火鉢で，口縁部にスタンプ文を施す。20・21は播鉢で，21の内面には炭化物が付着している。22は14世紀後半～15世紀前半の龍泉窯系青磁皿で，内外面にヘラ彫りで唐草文を施文する。23は14世紀後半～15世紀中頃の龍泉窯系青磁碗である。24は16世紀代の景德鎮窯系染付皿。25は1590～1630年代の肥前系陶器皿である。26は軒丸瓦で，瓦当面の中心に三つ巴文，その外縁に推定14個の珠文を施す。

表6 17次調査出土遺物観察表(カッコ内の数字は復元値を示す)

S D22 (土器)

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	法 量 (cm)	備 考
									口径 器高 底径	
1	17-9	土師器・高杯	角閃石, 石英, 1~2mm程の砂粒	やや不良	明赤褐/明赤褐	磨耗のため不明/磨耗のため不明	1701区	7	- 残2.2	-
2	17-10	土師器・高杯	角閃石, 1~4mm程の砂粒	良好	浅黄橙/浅黄橙	磨耗のため不明/磨耗のため不明	1701区	9	(16.7) 残5.3	-
3	17-8	土師質土器・坏	角閃石, 1mm程の砂粒	良好	灰白, 橙	回転ナデ, ナデ/回転ナデ, 底部糸切り離し	1701区	7	(10.2) 3.5 5.3	-
4	17-13	土師質土器・火鉢	角閃石, 石英, 1~2mm程の砂粒	良好	浅黄橙, 黒, 浅黄橙, 黒	ナデ/ナデ	1701区	3	(44.0) 残7.5	- 突帯下に沈線
5	17-12	埴輪	1~2mm程の砂粒	良好	黒にぶい赤褐/にぶい赤褐	磨耗のため不明/磨耗のため不明	1701区	8	(9.0) 3.4 (3.2)	溶解物付着

S D22 (陶磁器)

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	法 量 (cm)	備 考
									口径 器高 底径	
6	17-1	青磁・皿	緻密	良好	明オリーブ灰/灰白	施釉/ロクロケズリ, 施釉	1701区	9	(11.8) 3.0 5.6	蛇の目釉剥ぎ, 中国製
7	17-2	染付・碗	緻密	やや不良	暗青灰/浅黄橙, にぶい黄橙	施文, 施釉/施文, 施釉	1701区	3	- 残3.3	- 景德鎮窯系か
8	17-6	染付・碗	緻密	良好	明青灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	1701区	8	- 残2.9 (5.4)	景德鎮窯系
9	17-5	染付・皿	緻密	良好	明青灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	1701区	4	(14.8) 3.6 (7.6)	景德鎮窯系

S F 02

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	法 量 (cm)	備 考
									口径 器高 底径	
10	17-19	瓦質土器・楕鉢	石英, 1mm以下の砂粒	良好	褐灰/褐灰	ナデ, ヨコナデ, 罎目/ナデ, ヨコナデ	1703区	下層	- 残7.0	-
11	17-17	瓦質土器・火鉢	角閃石, 1mm以下の砂粒	良好	灰白/灰白	ナデ/ヨコナデ, 施文	1703区	下層	- 残10.3	- 桜花文のスタンプ

1701区遺構外出土遺物

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	法 量 (cm)	備 考
									口径 器高 底径	
12	17-11	土甕	緻密	良好	橙	ナデ	1701区	-	-	- 最大径1.1cm, 長さ3.1cm, 重量3.0g
13	17-3	白磁・小皿	緻密	良好	灰白, 淡黄/浅黄橙	ロクロナデ, 施釉/ロクロナデ, 施釉	1701区	-	残1.6 3.8	目跡あり, 中国製
14	17-4	白磁・皿	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/施釉	1701区	-	残1.4 (7.4)	景德鎮窯系

1702区遺構外出土遺物

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	法 量 (cm)	備 考
									口径 器高 底径	
15	17-7	土師質土器・坏	角閃石, 1mm程の砂粒	良好	橙/橙	回転ナデ, ナデ/回転ナデ, 底部糸切り離し	1702区	-	(7.5) 2.1 (5.0)	口縁部に油痕

1703区遺構外出土遺物（土器）

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整 (内面/外面)	調査 地点	層位	法 量 (cm)	備考
									口径 器高 底径	
16	17-15	土師質土器・浅鉢	角閃石, 石英, 長石, 1mm程の砂粒	良好	にぶい黄橙/褐灰	ナデ/ユビオサエ, ナデ	1703区	-	(29.8) 5.8 (20.3)	内面に炭化物付着
17	17-24	土師質土器・甕	角閃石, 石英, 長石, 1mm程の砂粒	やや不良	浅黄橙/浅黄橙	ナデ/タタキ, ナデ	1703区	-	- 残7.5 -	
18	17-18	瓦質土器・深鉢	1mm以下の砂粒	良好	褐灰/褐灰	ナデ/ナデ, ケズリ	1703区	-	- 残3.9 (14.8)	
19	17-20	瓦質土器・火鉢	角閃石, 1~3mm程の砂粒	良好	灰白/灰白	ナデ/ナデ, 施文	1703区	-	- 残6.3 -	口縁部にスタンプ文
20	17-16	瓦質土器・搦鉢	角閃石, 石英, 1mm以下の砂粒	良好	灰白/灰	ナデ, 掃目/ヨコナデ, ナデ, ユビオサエ	1703区	-	- 残6.5 -	
21	17-21	瓦質土器・搦鉢	1mm以下の砂粒	良好	灰白/浅黄橙	ナデ, ヨコナデ, 掃目/ユビオサエ, ナデ, ヨコナデ	1703区	-	- 残5.6 -	内面に炭化物付着

1703区遺構外出土遺物（陶磁器）

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整 (内面/外面)	調査 地点	層位	法 量 (cm)	備考
									口径 器高 底径	
22	17-25	青磁・皿	緻密	良好	オリーブ灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	1703区	-	- 残3.9 -	龍泉窯系
23	17-14	青磁・碗	緻密	良好	オリーブ灰/灰白	施釉/ロクロケズリ, 施釉	1703区	-	- 残2.4 4.8	龍泉窯系
24	17-22	染付・皿	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	1703区	-	- 残2.1 -	景徳鎮窯系
25	17-23	施釉陶器・皿	緻密	良好	灰オリーブ/浅黄	施釉/ロクロケズリ, 施釉	1703区	-	- 残1.9 (4.6)	肥前系

1703区遺構外出土遺物（瓦）

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	器面調整 (内面/外面)	調査 地点	層位	法 量 (cm)	備考
									瓦当径 胴部長 高さ	
26	17-26	軒丸瓦	角閃石, 石英, 1mm以下の砂粒	やや不良	灰白/灰白	糸切り(コビキA) / 磨耗のため不明	1703区	-	13.6 残6.2 6.6	瓦当面の模様は三つ巴文



## 第6章 まとめ

### 第1節 千畳敷周辺の城郭遺構について—豎堀跡を中心に— (図42)

15～17次調査では、これまで明確ではなかった千畳敷周辺における城郭遺構の配置状況を明らかにすることを目的とした。特に10次調査以降、千畳敷周辺で豎堀跡の存在が明らかになったことから、その配置状況の把握を主眼において調査を実施した。

15・16次調査の結果、豎堀跡SD19は検出時の想定をはるかに越える規模であることが明らかとなった。埋土より15～16世紀代を中心とする貿易陶磁器が出土しているが、掘削年代は明確ではない。ただし、千畳敷を囲繞し、中世宇土城跡における最終段階の普請と想定される未完成の横堀跡SD02と重複関係が認められず、出土遺物の年代も共通することから、両遺構は同時並存し、廃城に伴い機能を停止したと想定される。また、地表面観察でT1502北東側に豎堀跡と推定される地形の落ち込みを確認できることから、SD19は丘陵裾部までおよぶ可能性が高い。つまり、本遺構はSD02付近から丘陵裾部まで約80mにわたって存在する大規模な豎堀跡と推定される。このような規模の遺構が自然堆積で埋まるとは考え難いことや、埋土に近世陶磁器を含まないことなどから、廃城時かその直後に人為的に埋められたと想定される。

また、16次調査において、10次調査で検出した豎堀跡SD18が、さらに北方向へ延びることを確認するとともに、地表面観察でははっきりとした痕跡が確認できなかった豎堀跡SD22を17次調査で新たに検出したことは、宇土城跡の縄張りを考えるうえで重要な成果といえよう。その他にも、千畳敷周辺には類似する遺構の存在が明らかになっており、1次調査で確認した溝跡SD03は千畳敷東側で約90°東側に折れ、豎堀として機能したことが18次調査で判明しており(平成24年度報告予定)、10次調査で開渠跡と想定したSD17についても豎堀として機能したと推定される。

これらの遺構は、千畳敷東側から北西側の帯曲輪や切岸を分断するような状態で、ほぼ一定の距離を隔てて配置されているものの、連続して豎堀を配する畝状豎堀群とは様相が異なるといえる。また、SD

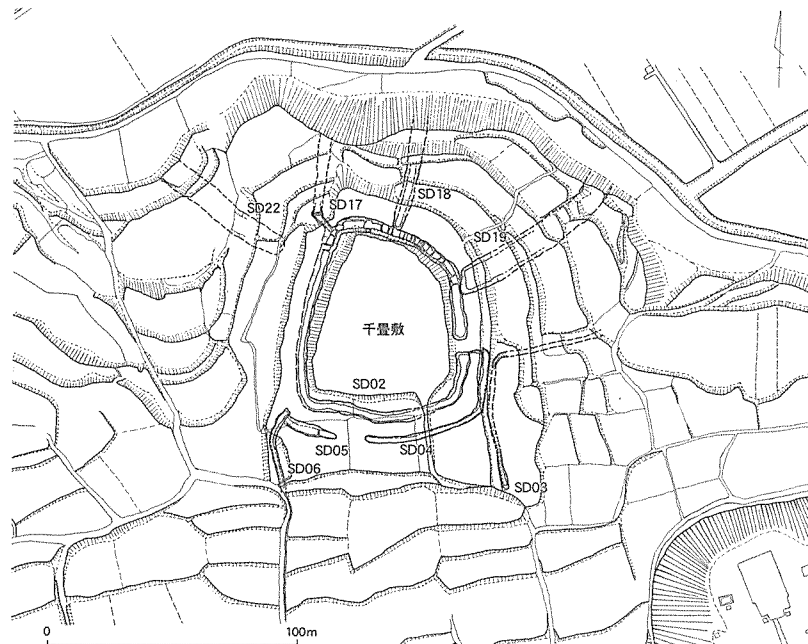


図42 千畳敷周辺の豎堀跡と横堀跡 (1/3,000, 藤本2005より)

D19やSD22は中世城跡の豎堀跡としては極めて規模が大きく、両遺構の幅は約10mと千畳敷を囲繞するSD02の約2倍であり、検出面からの深さも2mを越えている。SD18もSD02とほぼ同規模である。これらの遺構の形成時期を出土遺物から特定することは難しいが、出土遺物から廃絶時期は何れも16世紀末頃と推定され、ほぼ同時期に機能していたとすれば、千畳敷を中心として放射状に配置されていたと考えられる。ただし、千畳

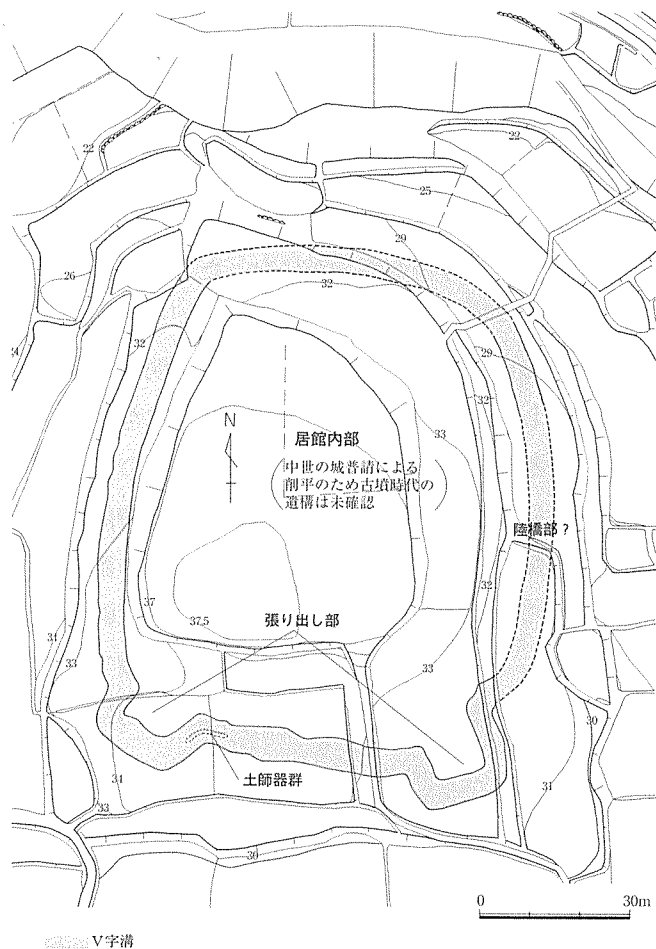


図43 首長居館推定範囲図(1/1,500, 藤本2003より)

に張り出し部をもつ不整楕円形プランで、検出状況や地形などを考慮すると、居館東側に陸橋部が存在するものと推定される。居館部分の面積は約7,600㎡、SD01を含めると約9,500㎡を測り、九州で確認されている古墳時代首長居館の約20例のうち最大規模である<sup>1)</sup>。居館部分に建物跡などの遺構が存在したと推測されるが、城普請による削平のため古墳時代の遺構は未確認である。

宇土半島基部は、九州のなかでも前期の前方後円墳が数多く築造された地域であり、西岡台の半径2km圏内には城ノ越古墳、迫ノ上古墳、スリバチ山古墳、天神山古墳などの50~100m規模の前方後円墳が存在する。西岡台の首長居館はこれらの前方後円墳に葬られた首長の生活の場であり、それを裏付けるようにSD01より壺・甕・鉢・器台・高坏などの土師器が多量に出土している。武末純一氏によると、出土土師器は1期(3世紀末~4世紀前半)、2期(4世紀中頃~後半)、3期(4世紀末~5世紀前半)に分けられるという(高木・武末2001)。つまり、1首長=1居館ではなく、数代にわたり継続的に営まれたとみられる。このように、首長の墳墓である前方後円墳と、その住まいである居館を特定できるのは九州でもまれである。また、古墳と居館の詳細な比較検討が可能な事例もほとんどないことから、極めて重要な知見が得られたといえよう。

古墳時代になると、首長と一般成員との階層分化の進行により、一般成員の集落とは別の場所に空間的独立性・隔絶性を保持する首長居館が各地に造られた。宇土半島基部の場合、首長の住まいが西岡台である一方、一般成員の生活の場は、居館から東へ約500mの宇土城跡(城山)が所在する低丘陵上の宇土城跡城山遺跡や、西へ約500mの轟遺跡などがその候補地にあげられる。特に城山遺跡は、弥生時

敷南側の緩傾斜地は未調査のため確認されていない。現段階では、千畳敷北半部周辺に限られているが、今後の調査によって南側でも確認される可能性はある。

一方、三城では横堀跡、豎堀跡ともに未確認であり、曲輪面とその直下の帯曲輪との高低差も千畳敷ほど顕著ではない。また、千畳敷ではおびただしい数の柱穴が重複した状態を検出したが、三城では千畳敷ほどの顕著な重複関係は認められないことなどから、曲輪の機能に区別があった可能性を指摘できる。

## 第2節 古墳時代首長居館について(図43)

SD19の範囲確認を目的として設定した調査区T1503において、古墳時代の壕跡SD01を検出し、千畳敷部分に存在した古墳時代首長居館の規模をほぼ確定したことは大きな成果といえる。

これまでの調査結果を総合すると、居館の平面形態は千畳敷南西側と南東側の計2ヶ所に

代終末から古墳時代前期にかけて継続するが、中期以降の生活痕跡が確認できないことから、西岡台の首長居館と消長をともにする可能性が高い。

#### 註

- 1) 九州では、福岡市比恵遺跡4号環濠（古墳時代前期）が約8,000㎡と西岡台に匹敵する規模である。西岡台以外の県内の首長居館として、合志市石立遺跡（古墳時代前期、約3500㎡）と、時期・規模とも不明であるが宇城市不知火町浦上遺跡もその候補地にあげられている（高木・武末2001）。

#### 引用・参考文献

- 杉井 健 2002 「宇土城跡城山遺跡」『新宇土市史』資料編第2巻 宇土市  
 高木恭二・武末純一 2001 「西岡台遺跡」『考古』新宇土市史基礎資料第9集 宇土市教育委員会  
 寺沢 薫 1998 「古墳時代の首長居館」『古代学研究』第141号 古代学研究会  
 平山修一・高木恭二ほか 1977 『宇土城跡(西岡台)』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 宇土市教育委員会  
 藤本貴仁 2003 『宇土城跡(西岡台)』VI 宇土市埋蔵文化財調査報告書第24集 同上  
 藤本貴仁 2005 『宇土城跡(西岡台)』VIII 宇土市埋蔵文化財調査報告書第26集 同上  
 藤本貴仁 2007 『宇土城跡(西岡台)』IX 宇土市埋蔵文化財調査報告書第29集 同上  
 藤本貴仁 2009 『宇土城跡(西岡台)』X 宇土市埋蔵文化財調査報告書第31集 同上



# 図 版

## PLATES

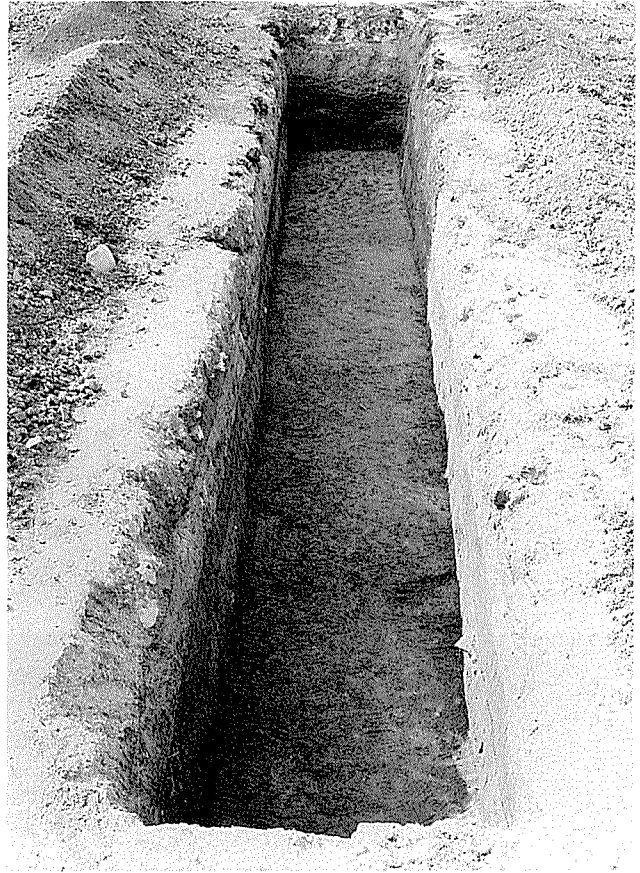
図版 1～11：第15次発掘調査

図版12～22：第16次発掘調査

図版23～30：第17次発掘調査



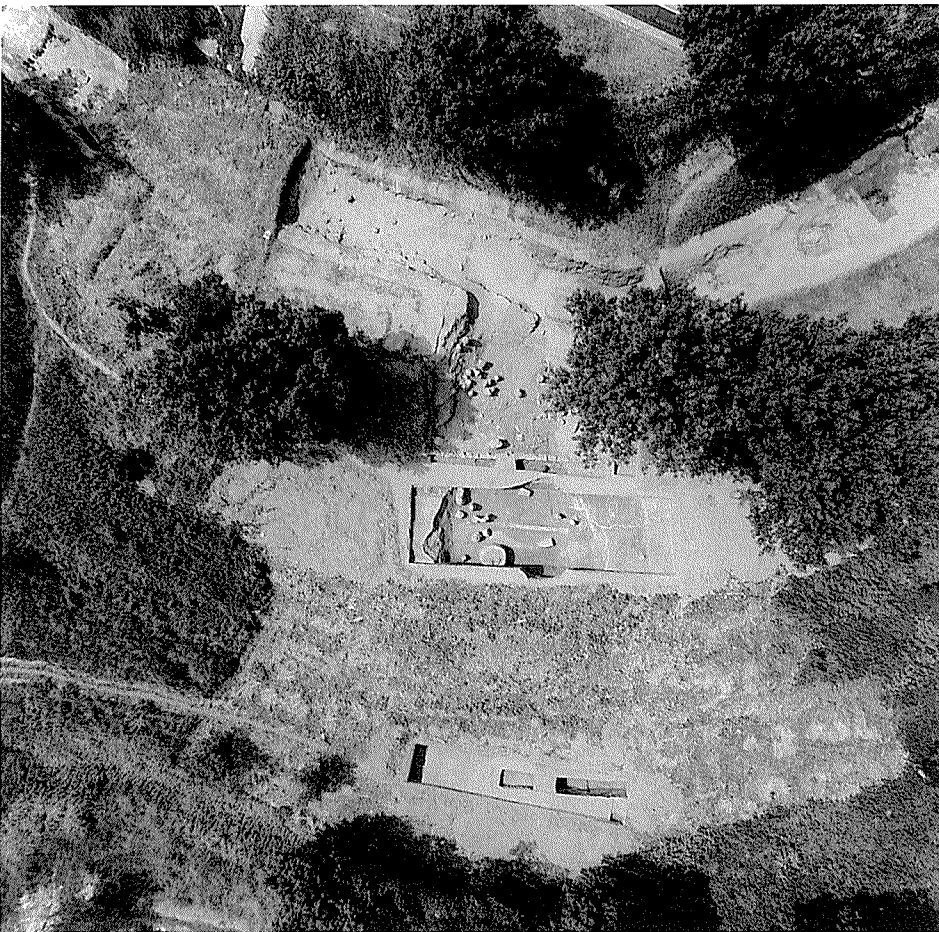
T1501表土除去状況（南より）



T1501調査状況（南より）



T1501東壁土層断面（南西より）

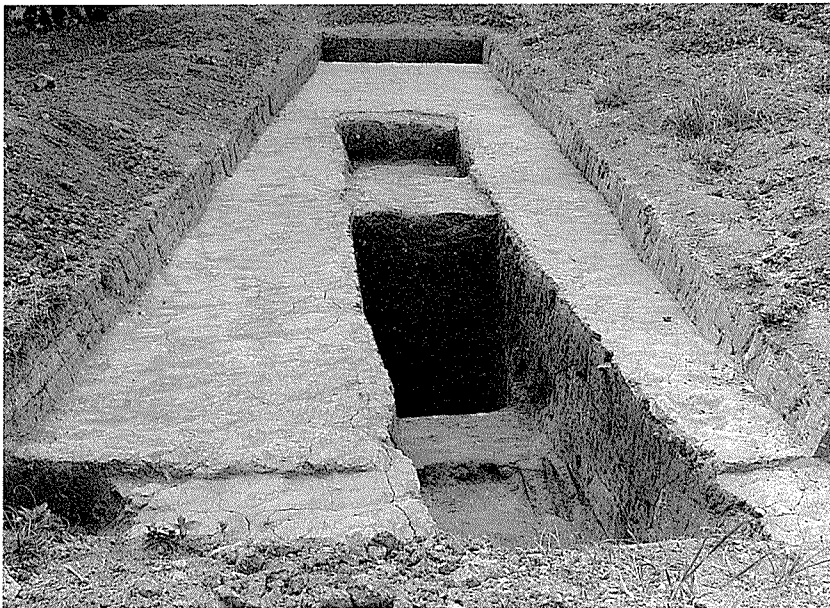


T1502・1503航空写真  
（上が南西）

# 図版 2



T 1502調査前状況（南東より）



T 1502調査状況（北より）



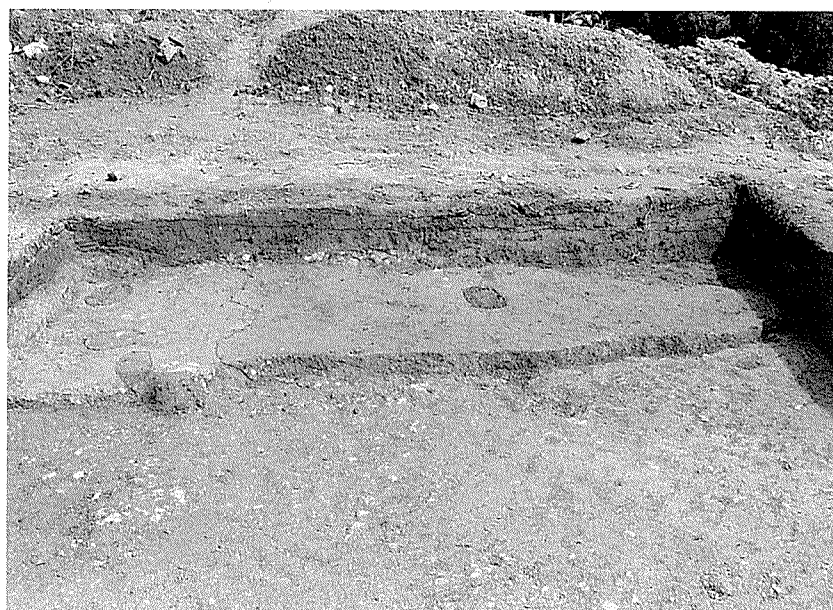
攪乱溝断面検出の豎堀跡 S D 19  
（東より）



T1503調査前状況（南より）



T1503遺構検出状況（南より）



古墳時代首長居館塚跡 S D01  
と S D19の重複状況（南より）



図版 4



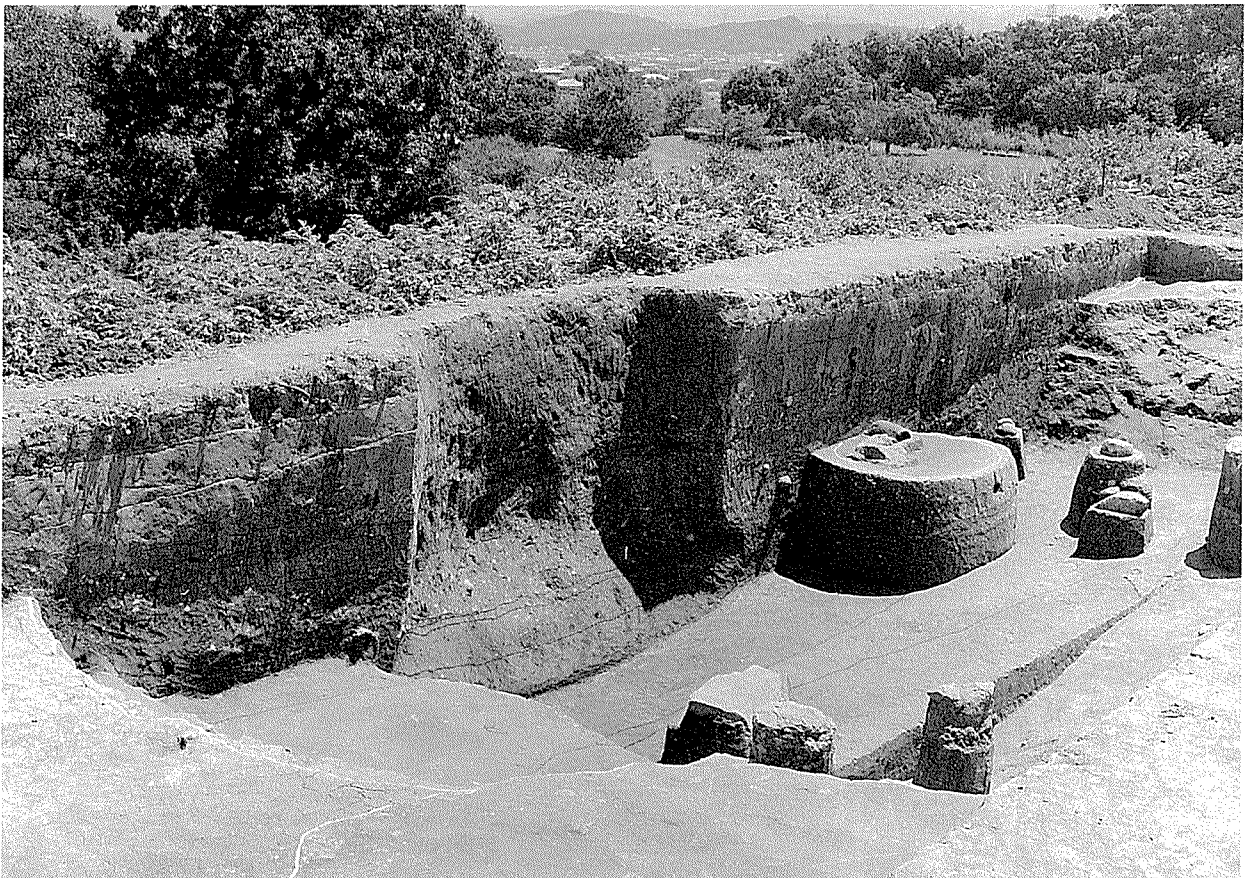
S D19調査状況 1 (北より)



S D19調査状況 2  
(北より)



S D19調査状況 3 (南より)

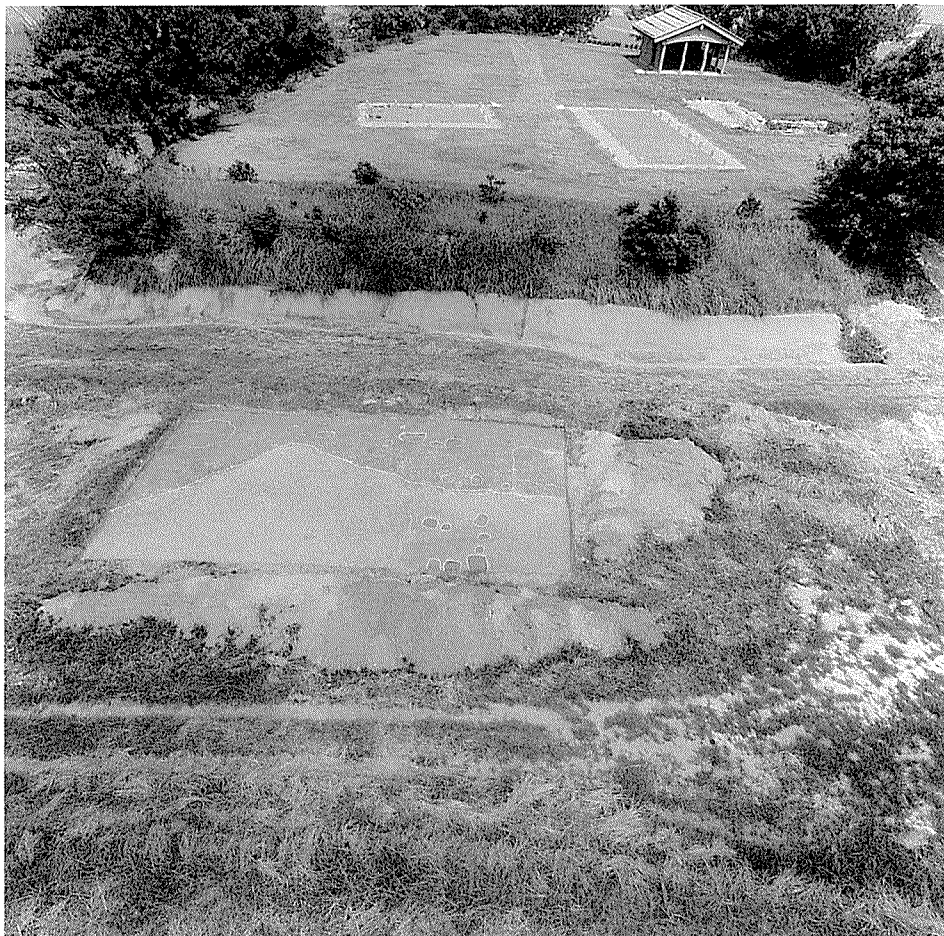


T 1503東壁土層断面 (北西より)

図版 6



S D01とS D19の重複状況（南より）



T 1505遺構検出状況航空写真（南より）



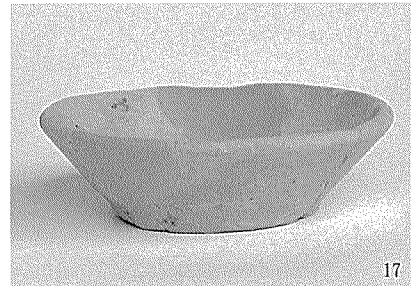
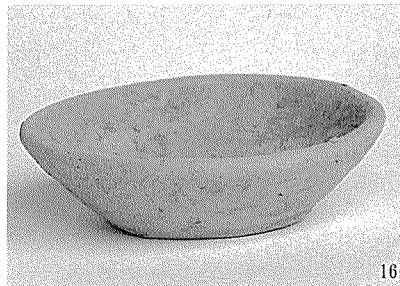
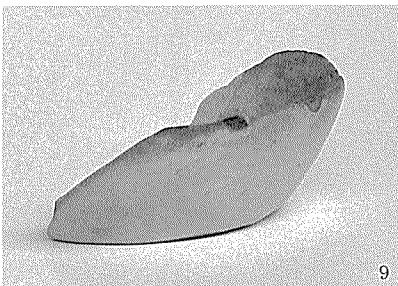
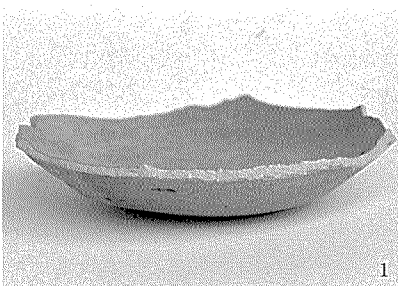
T1505表土除去状況（北より）



T1505遺構検出状況（北より）

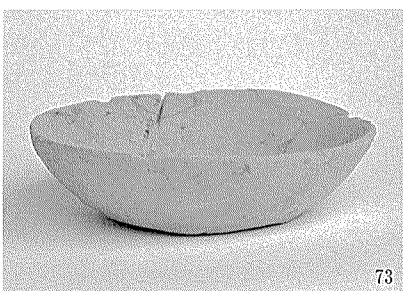
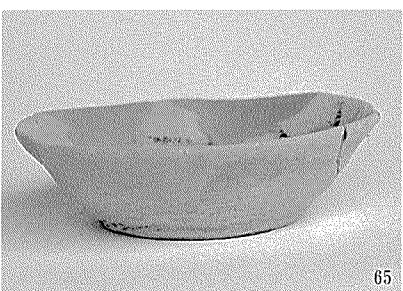
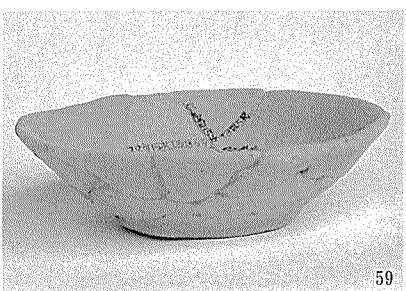
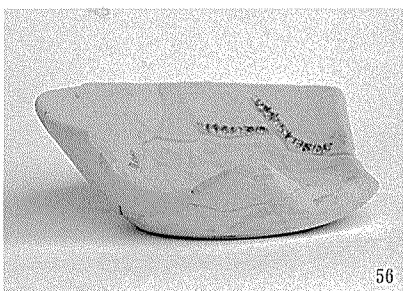
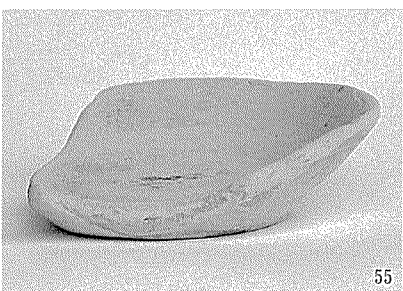
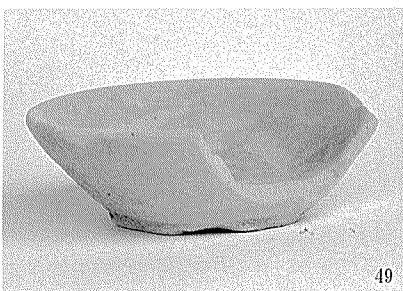
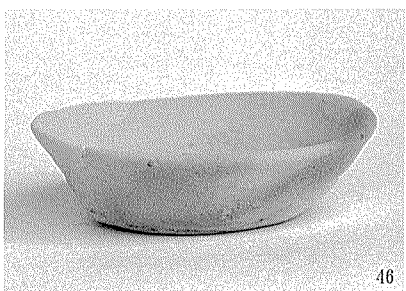
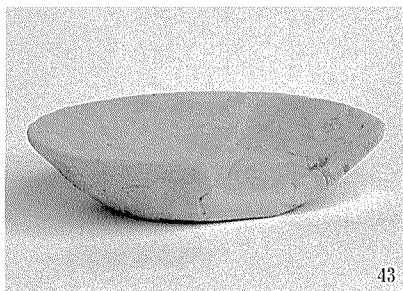
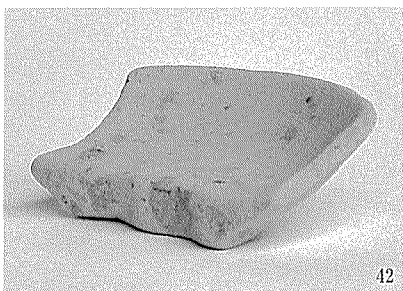
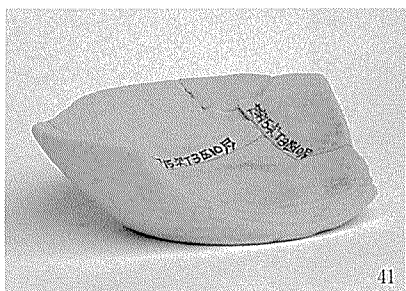
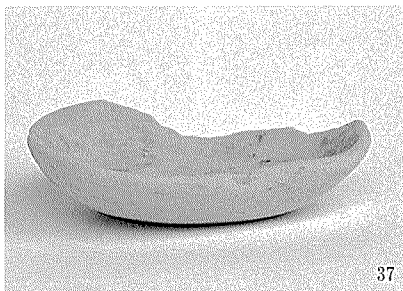
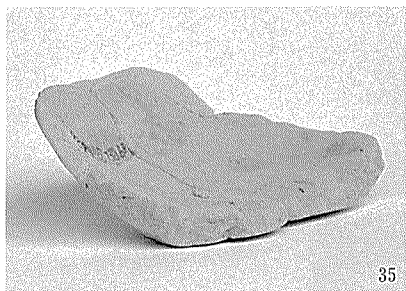
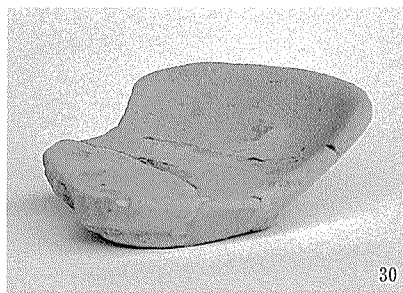
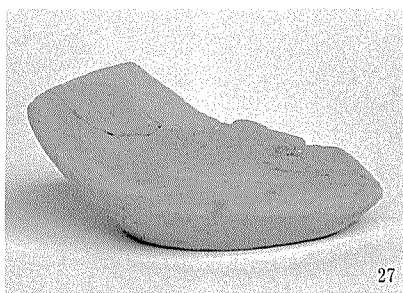
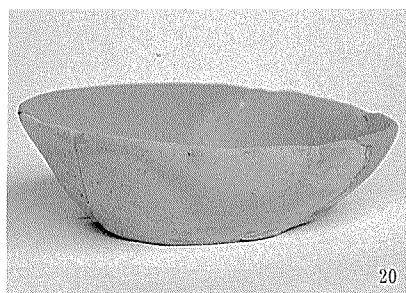


S D01, 横堀跡 S D04・  
S D05検出状況（東より）

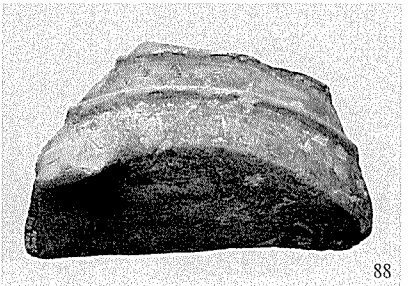
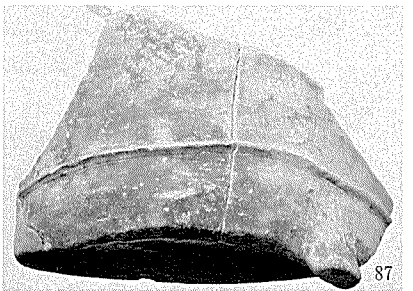
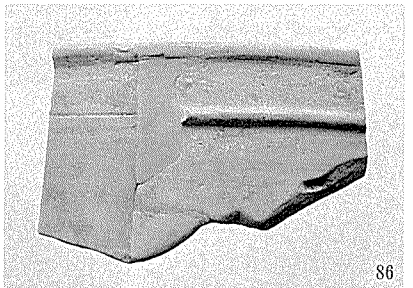
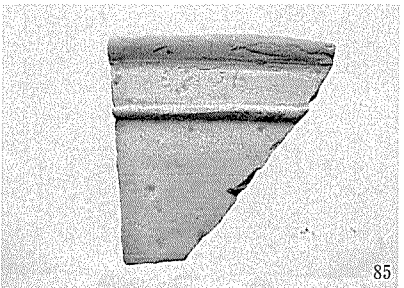
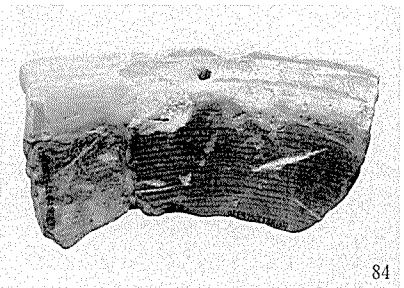
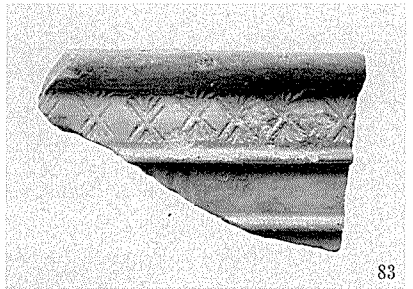
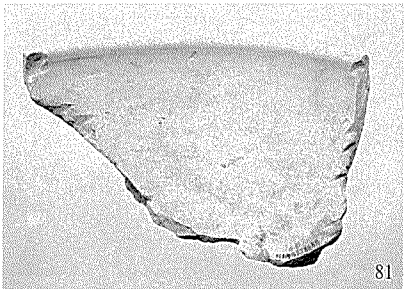
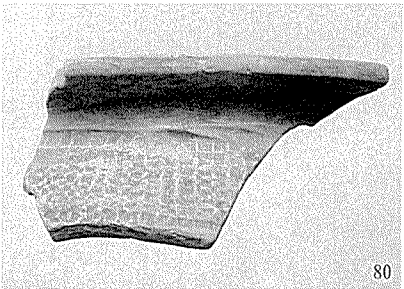
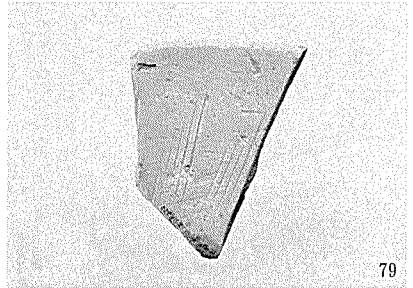
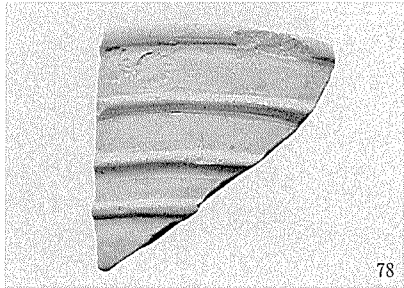
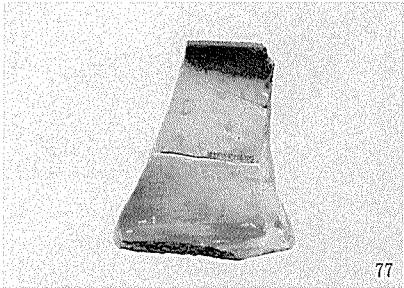
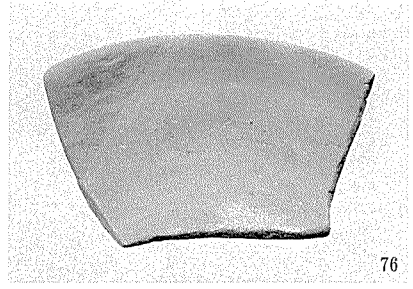
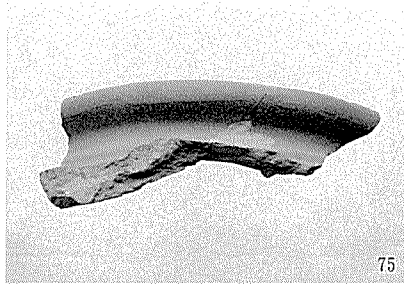
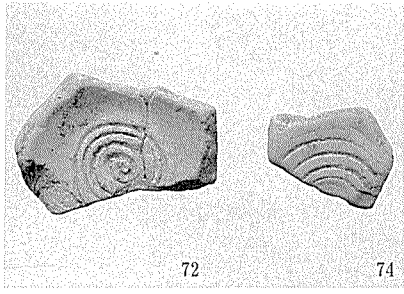


S D01出土遺物, S D19出土遺物 1

図版 8

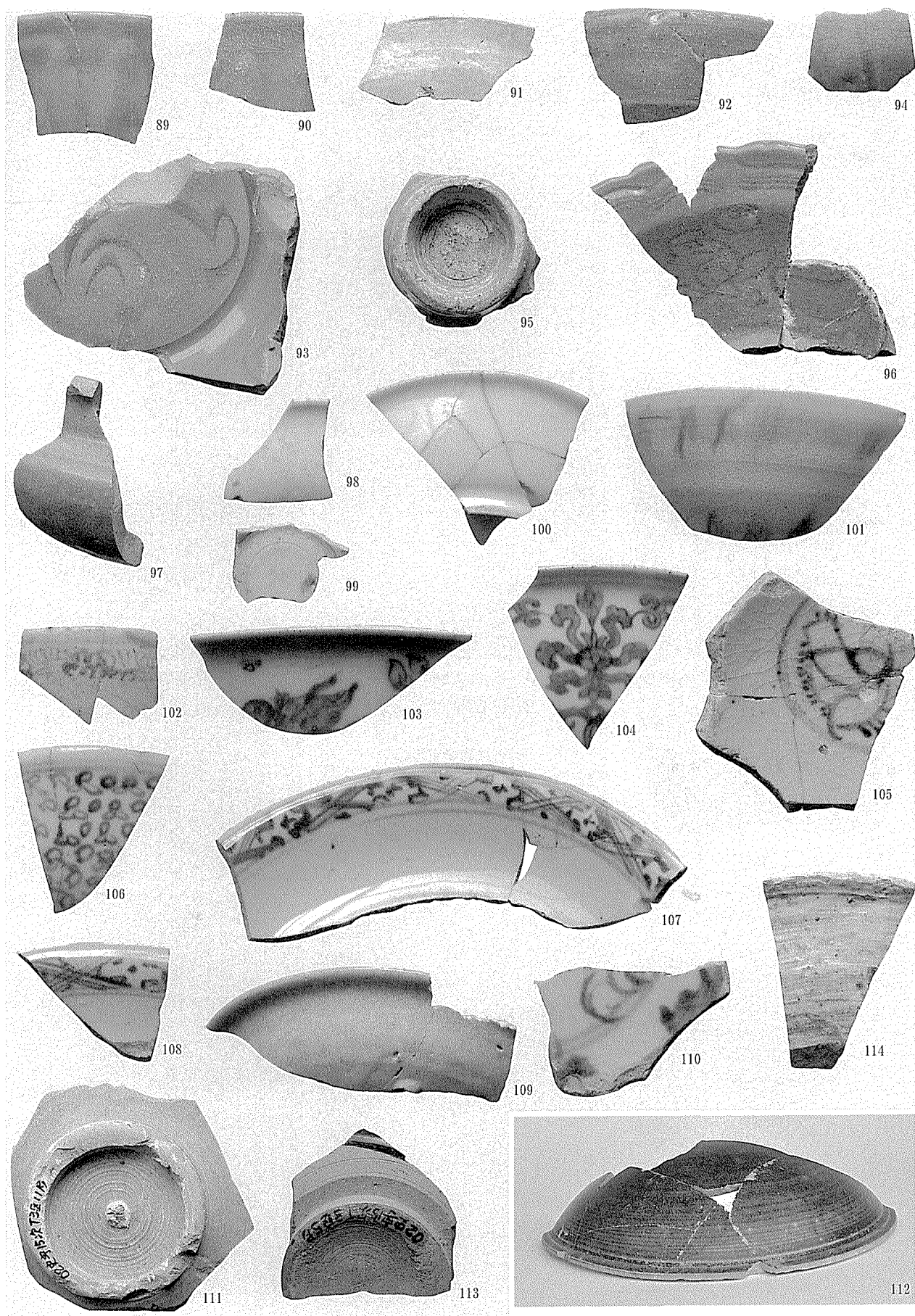


S D 19出土遺物 2

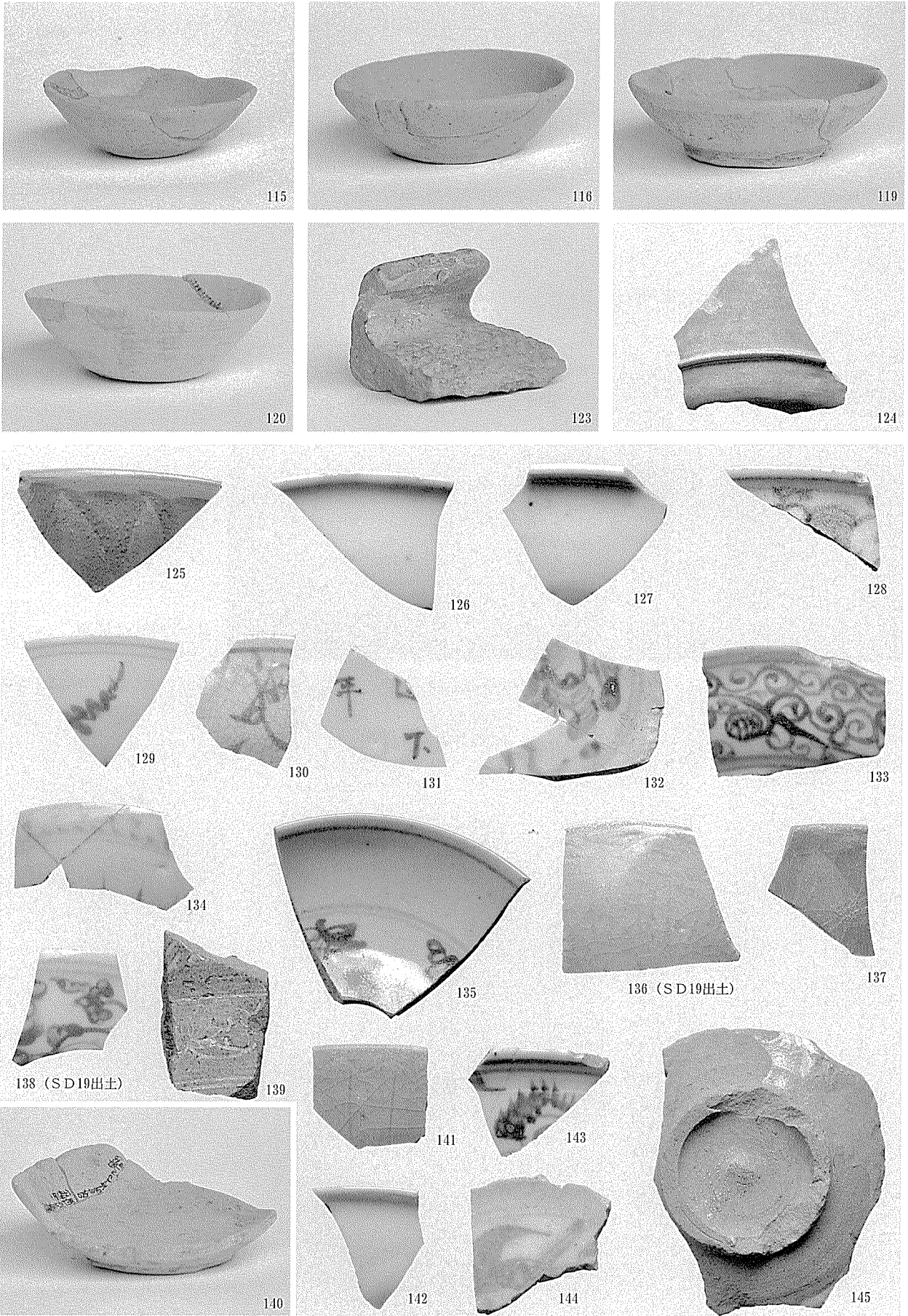


S D19出土遺物 3

图版 10



S D 19出土遺物 4



S D19出土遺物 5, T 1501~T 1503遺構外出土遺物



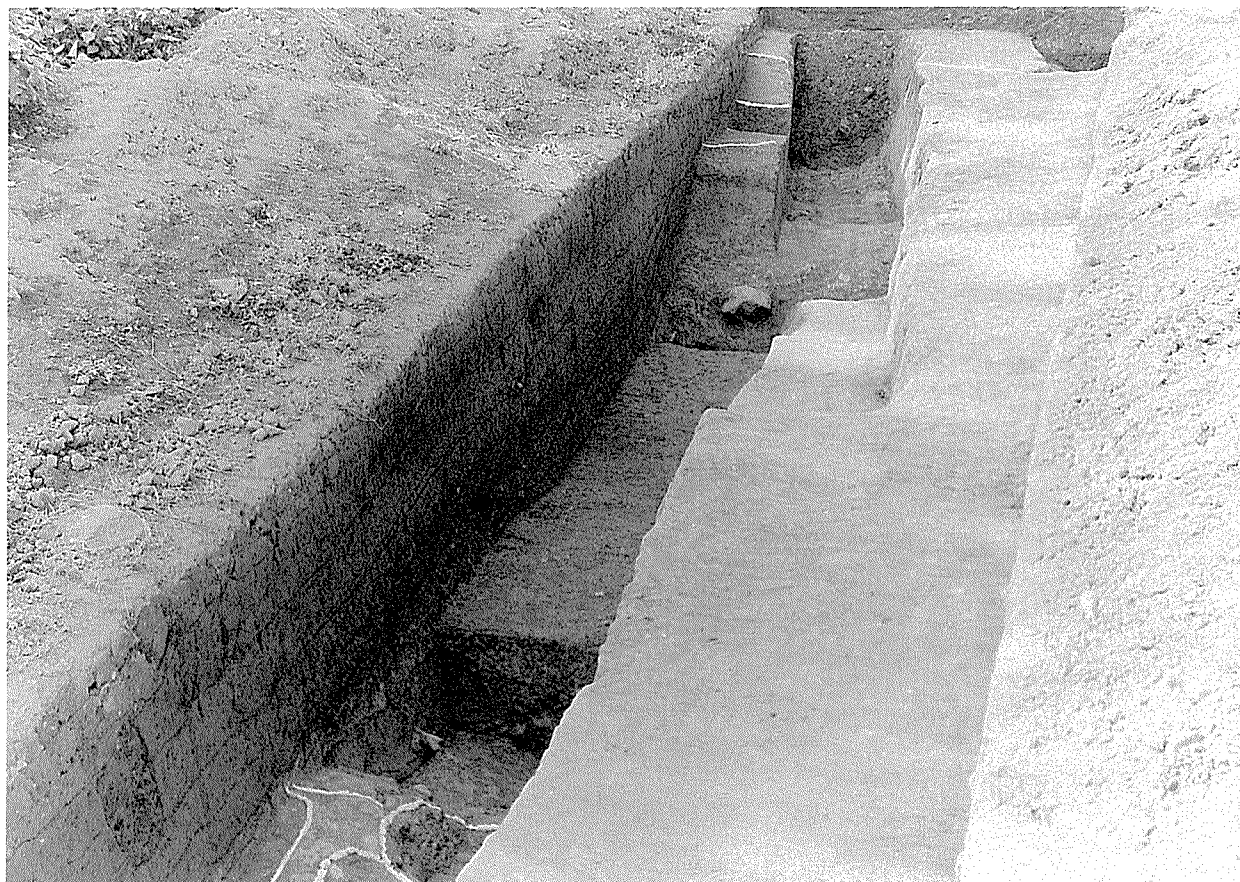
図版 12



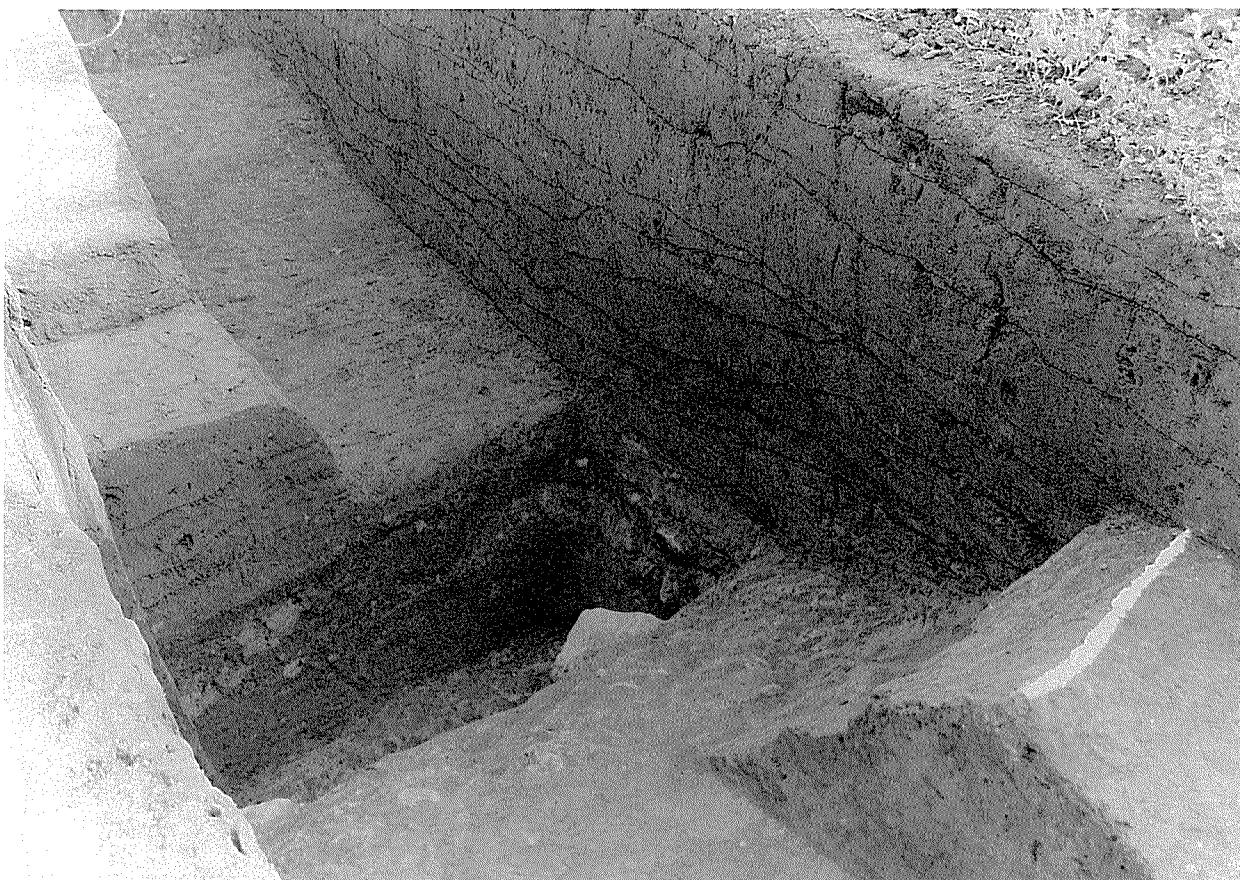
T1502航空写真  
(上が西)



T1502遺構検出状況 (北より)



S D19検出状況（南より）



S D19土層断面及び底面検出状況（北より）

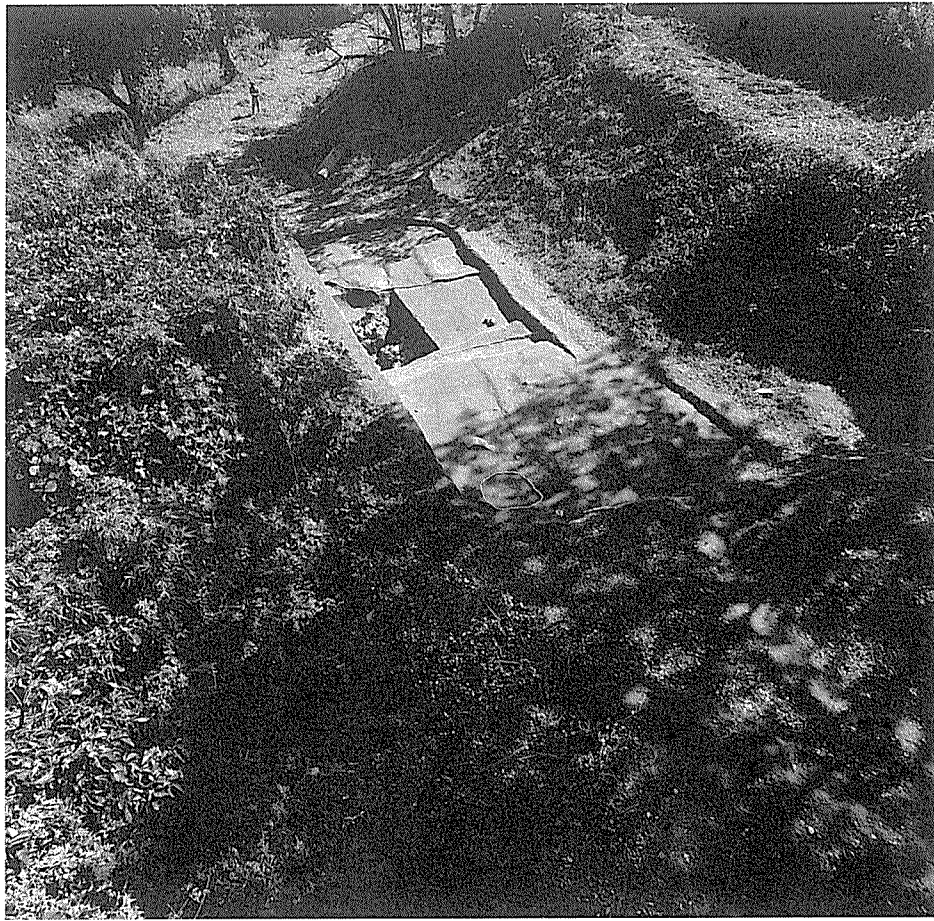
図版 14



溝跡 S D 20 検出状況 (東より)



16次調査区遠景航空写真 (北より)



1601区遺構検出状況航空写真（北西より）



1601区調査前状況（西より）

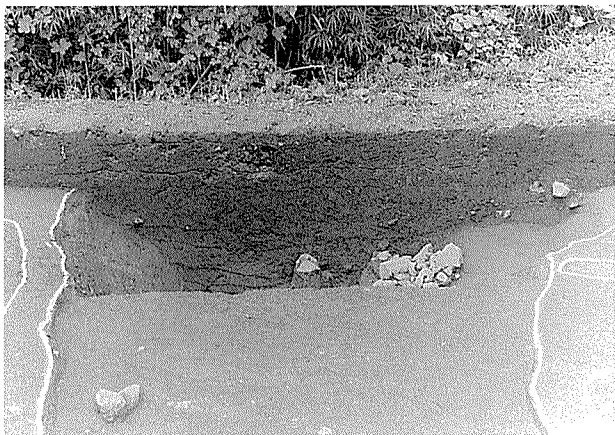
図版 16



1601区遺構検出状況（東より）



竪堀跡 S D 18・溝跡 S D 21検出状況（南より）



S D 18土層断面（南より）



S D 18礫群出土状況（西より）



1601区調査状況（東より）



1602区調査状況航空  
写真（上が南）



1602区調査前状況（南より）



1602区調査状況（北西より）

図版 18



1603区調査状況航空写真（北より）



1603区調査前状況（北東より）



1603区遺構検出状況（北より）



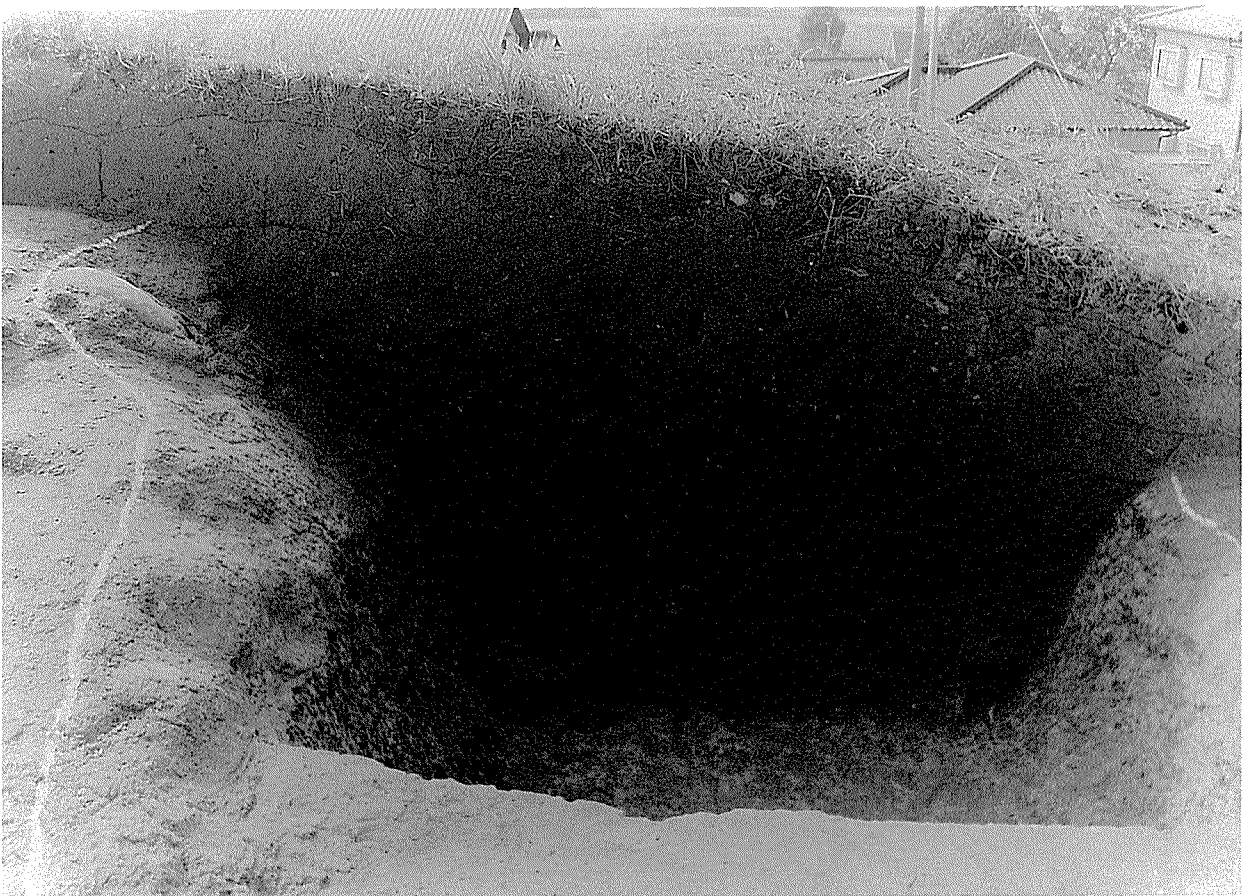
柱列跡検出状況（北より）



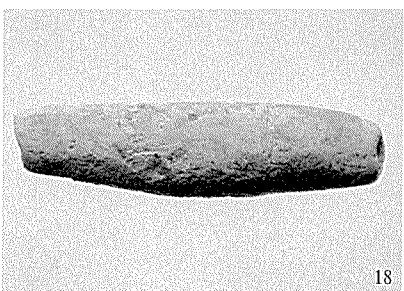
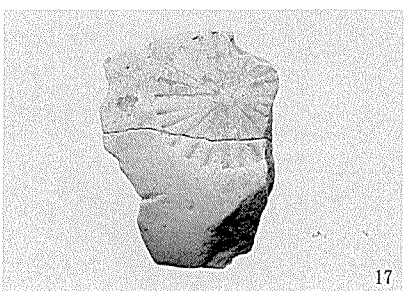
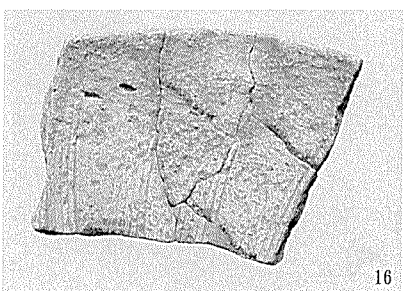
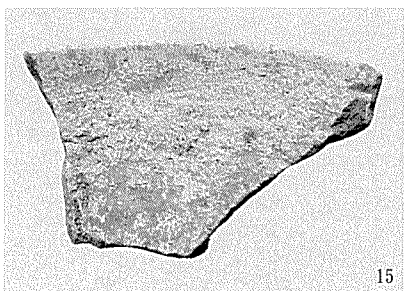
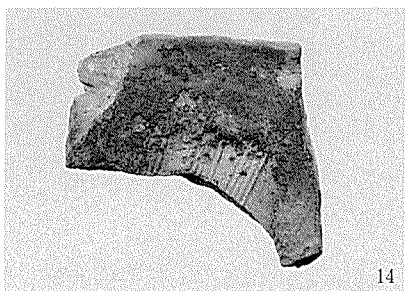
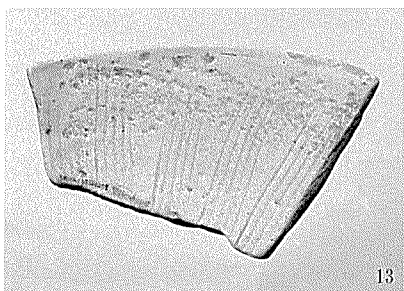
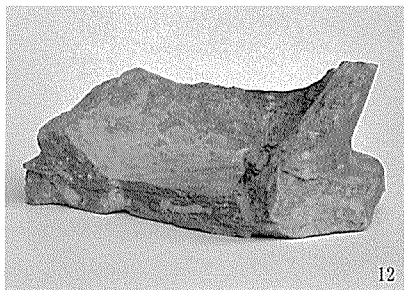
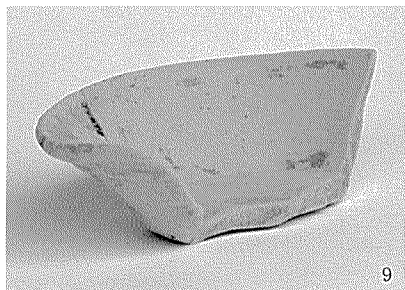
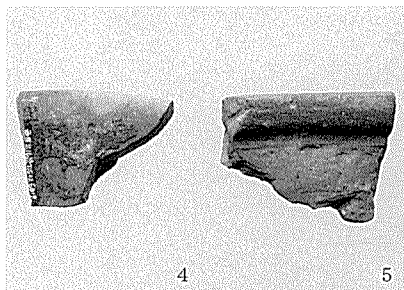
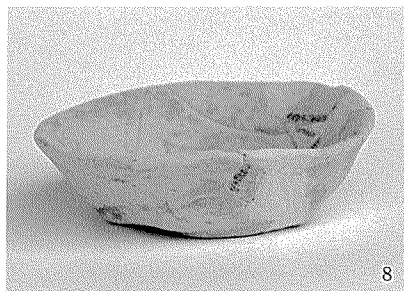
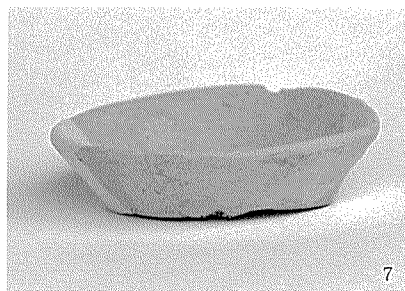
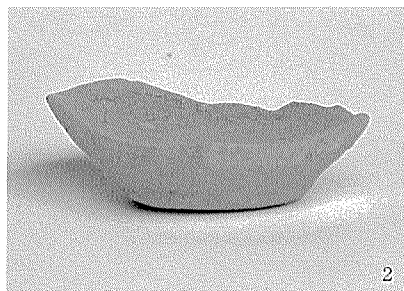
図版 20



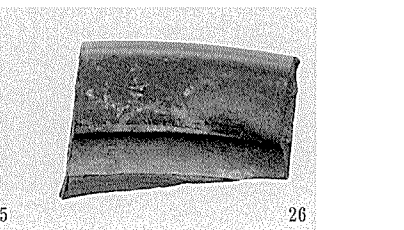
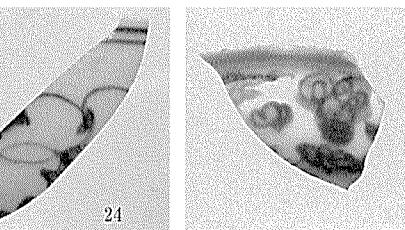
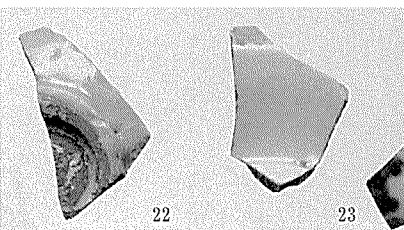
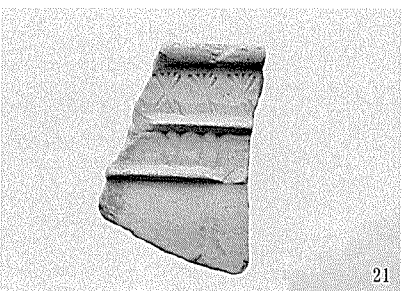
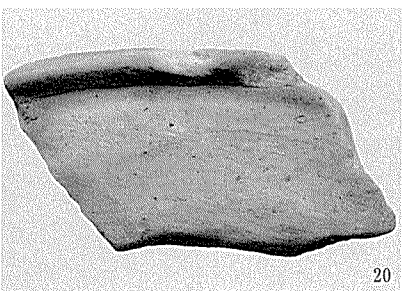
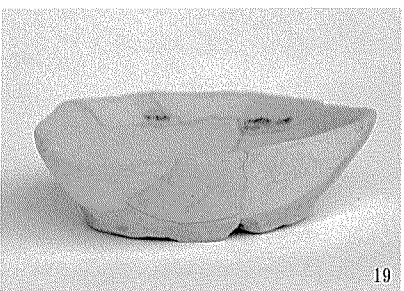
横堀跡 S D 06 検出状況 (北より)



S D 06 土層断面 (北より)

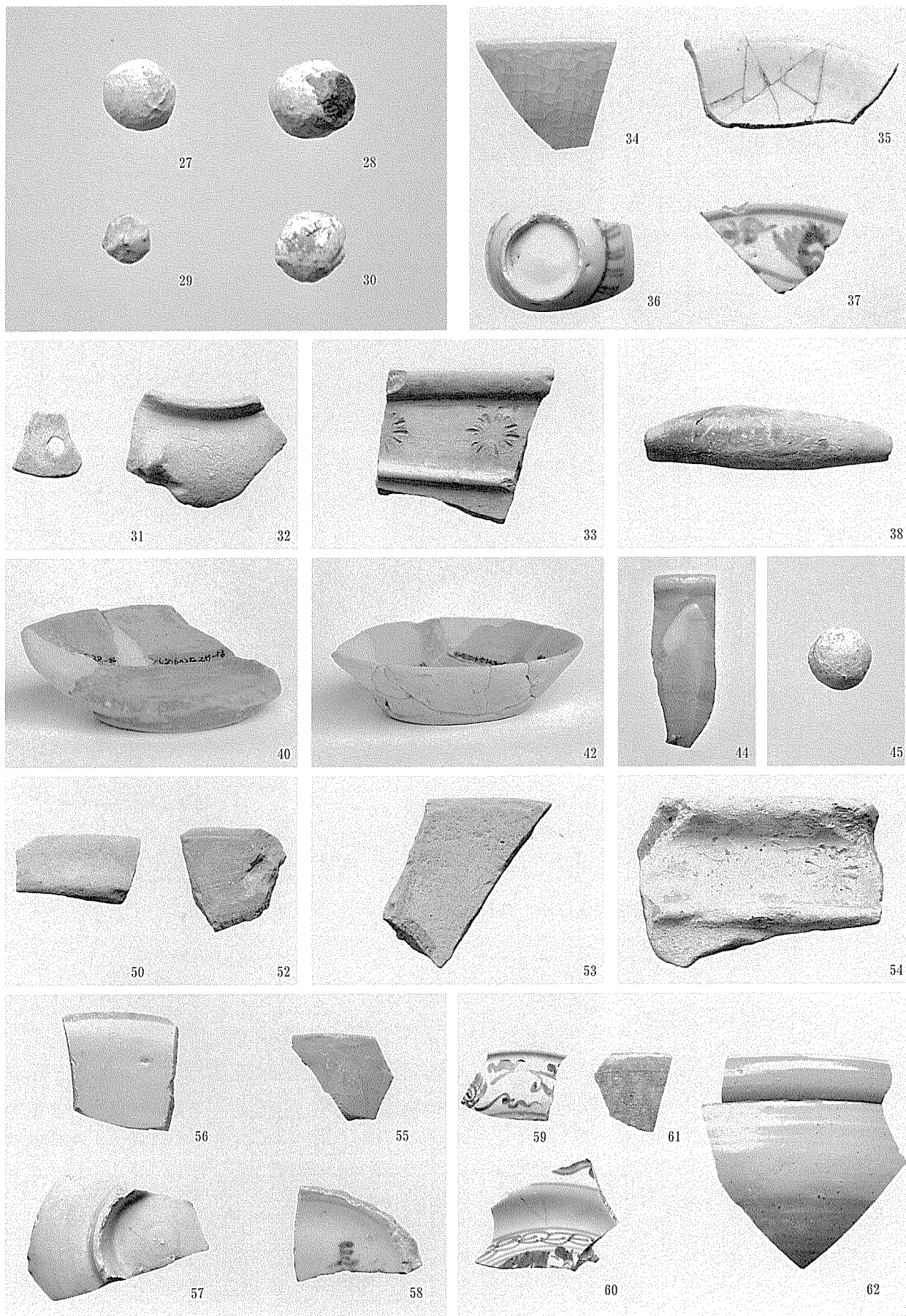


遺構出土遺物 (SD19, SD18, 1602区P 1, SD06, SD02)



T1502遺構外出土遺物

図版 22



T 1502・1601~1603区遺構外出土遺物



17次調査区遠景航空  
写真（南西より）



1701区調査前状況（南より）

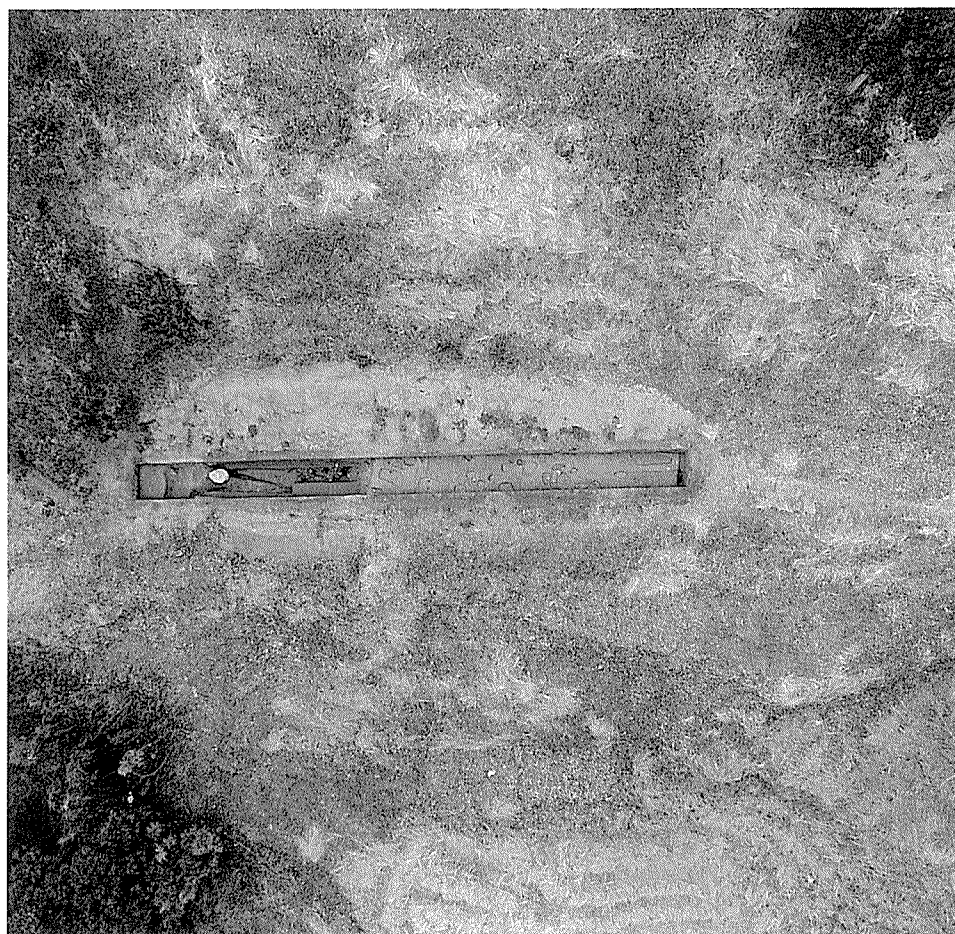
図版 24



1701区調査前状況（北より）



1701区遺構検出状況（南より）



1701区遺構調査状況  
航空写真（上が東）



1701区遺構調査状況（北より）



1701区遺構調査状況（南より）



竪堀跡S D22調査状況（南西より）

図版 26



S D 22調査状況 (北より)

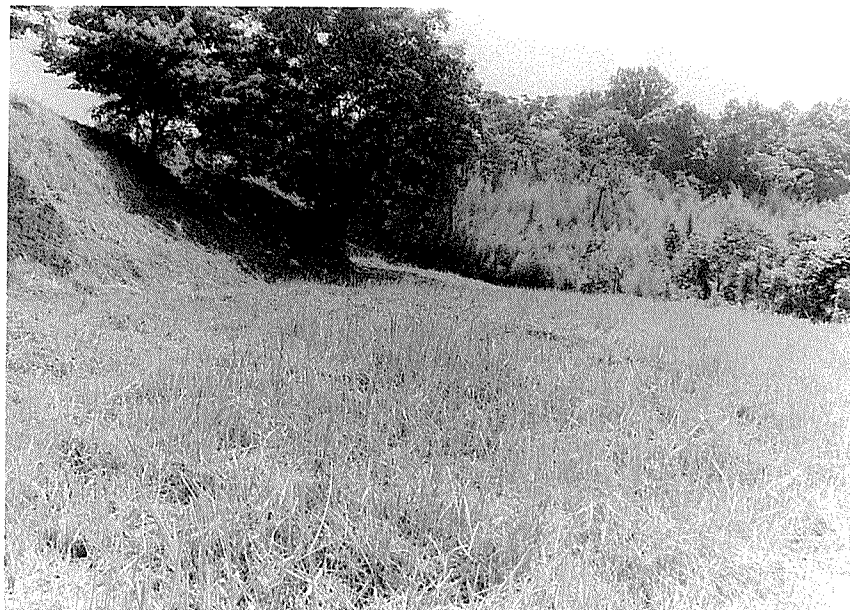


S D 22出土礫群 (北より)



S D 22堀底内突出部検出状況 (南東より)

図版 27



1702区調査前状況（北東より）



1702区調査状況航空写真  
（北東より）



図版 28



1702区調査状況（南西より）



1702区調査状況（北東より）



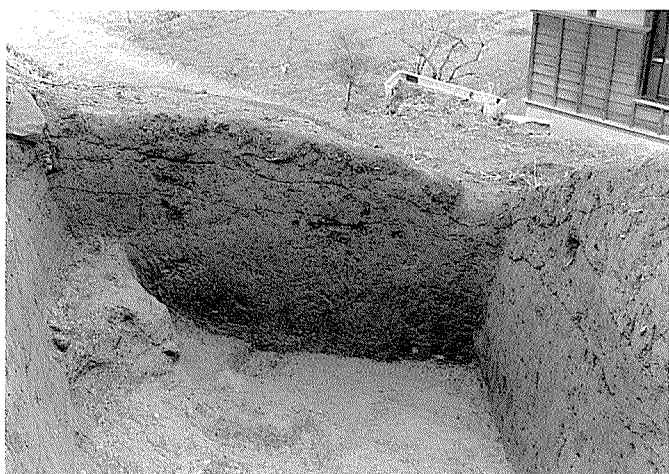
1703区調査前状況（南東より）



1703区調査状況（南東より）

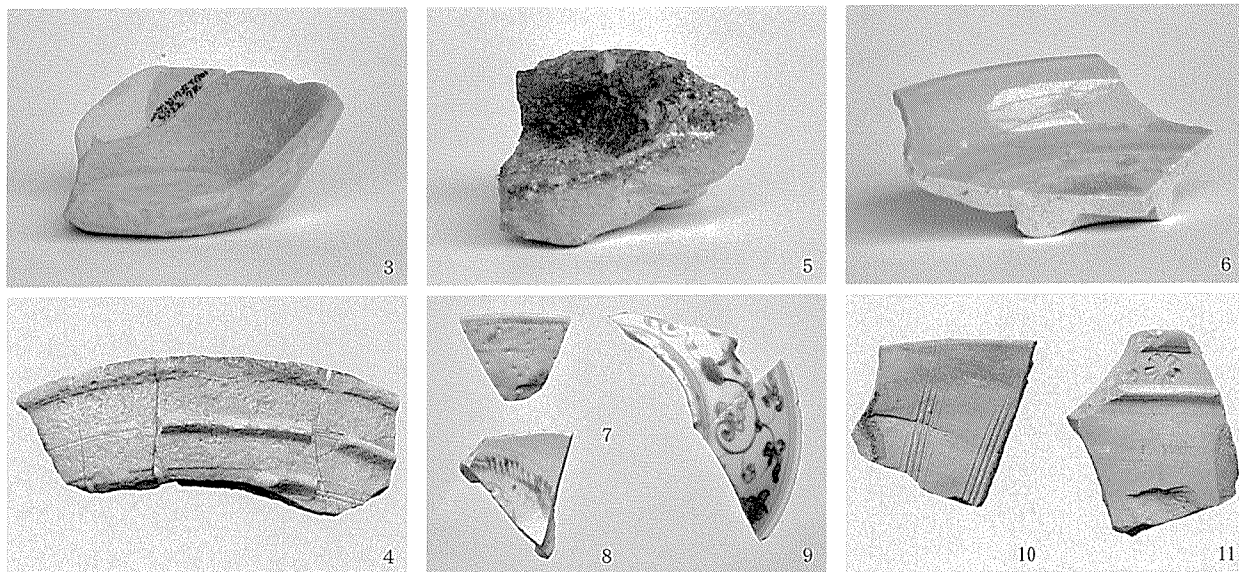


道路状遺構 S F 02 調査状況（南より）

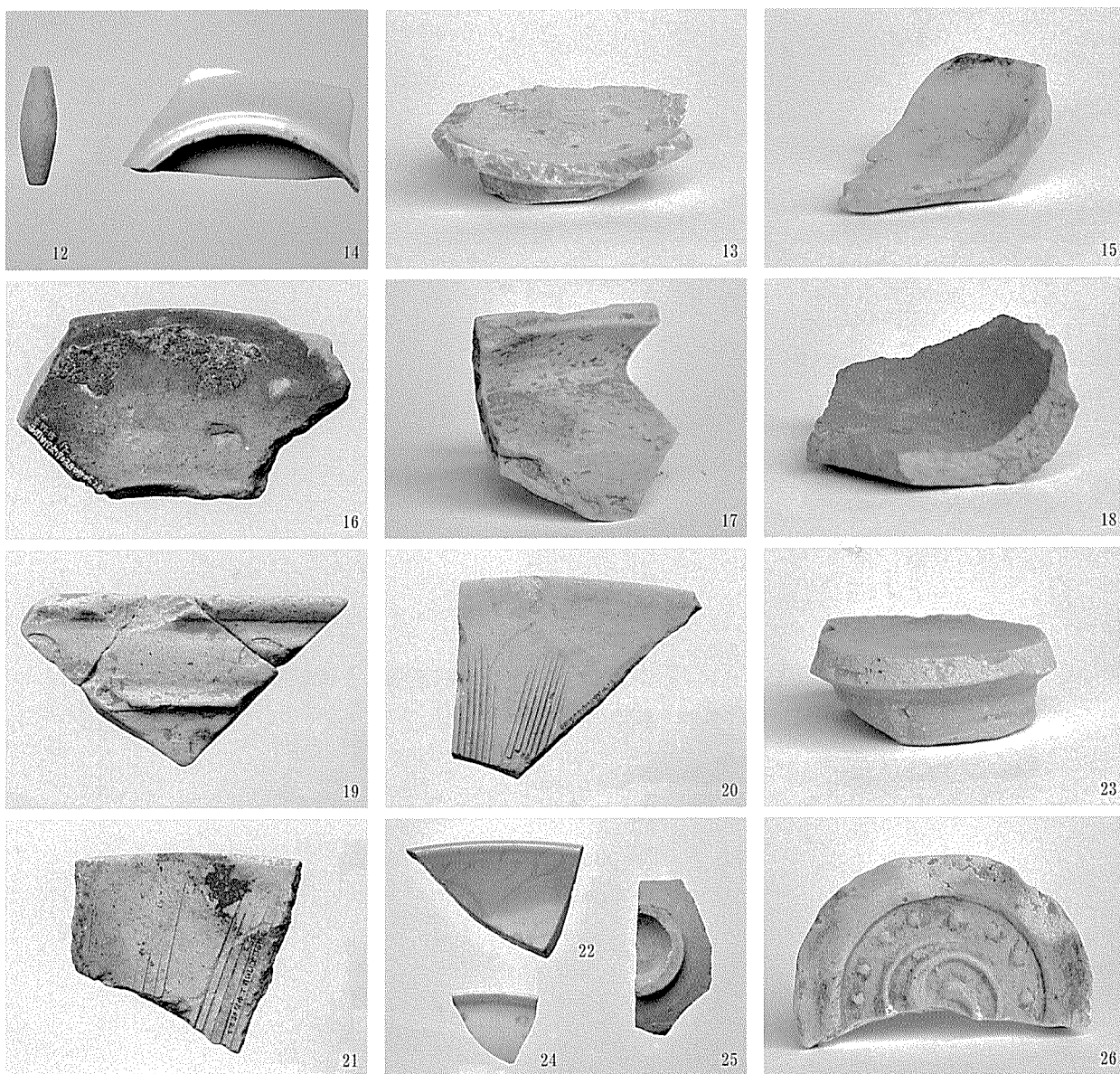


1703区南東壁土層断面（北西より）

図版 30



SD22・SF02出土遺物



1701~1703区遺構外出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	うとじょうあと (にしおかだい)							
書名	宇土城跡 (西岡台) XI							
副書名	史跡整備事業に伴う平成14～16年度 (第15～17次) 発掘調査報告書							
シリーズ名	宇土市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ号	第33集							
編著者名	藤本貴仁・芥川博士							
編集機関	宇土市教育委員会							
所在地	〒869-0433 熊本県宇土市新小路町95							
発行年月日	2012年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯※ ° ' "	東経※ ° ' "	調査 回数	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うとじょうあと 宇土城跡	くまもとけん う と し しん め まち 熊本県宇土市神馬町  あごせんじょうじき 字千畳敷	43211		32° 40' 46"	130° 38' 47"	15次 16次 17次	298㎡ 392㎡ 140㎡	保存整備事 業に伴う発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			
宇土城跡	中世城	古墳時代 中世	【古墳時代】壕跡 【中世】横堀跡・竪堀跡		【古墳時代】土師器・須恵器 【中世】土師質土器・瓦質土器・ 貿易陶磁器 (白磁・青 磁・染付など), 鉛玉			
特記事項								
<p>【15次調査】主郭・千畳敷北東側の大規模な竪堀跡SD19が、千畳敷を同心円状に巡る帯曲輪を分断する状態で配置されることを確認。現況地形より丘陵裾部まで延びる可能性が高いことが判明。宇土城跡が築城される以前、千畳敷部分に存在した古墳時代前期の首長居館を圍繞する壕跡SD01を検出。居館規模をほぼ特定。</p> <p>【16次調査】千畳敷北側に位置する竪堀跡SD18の範囲確認を目的とした調査で、SD19と同様に帯曲輪を分断する状態で配置され、丘陵裾部方向へ延びることが判明。</p> <p>【17次調査】千畳敷北西側で大規模な竪堀跡SD22を検出。千畳敷を圍繞する横堀以外に大小5つの竪堀が千畳敷北側から東側にかけて放射状に配置されることが判明。</p>								

※北緯及び東経は世界測地系を使用。

## 宇土城跡（西岡台） XI

— 史跡整備事業に伴う平成14～16年度(第15～17次)発掘調査報告書 —  
宇土市埋蔵文化財調査報告書 第33集

発行年月日 2012年3月28日

編集・発行 熊本県宇土市教育委員会  
〒869-0433 宇土市新小路町95  
TEL 0964-22-6500(代) FAX 0964-58-1005

印 刷 社会福祉法人 熊本県コロニー協会  
コロニー印刷  
〒860-0051 熊本市二本木3丁目12-37  
TEL 096-353-1291(代) FAX 096-353-1294

The Report of The Research  
of Burial Cultural Properties  
Uto City Vol.33

# **Ruins of Uto Castle (Nishiokadai) XI**

2012

Kumamoto Prefecture Uto City  
Board of Education